

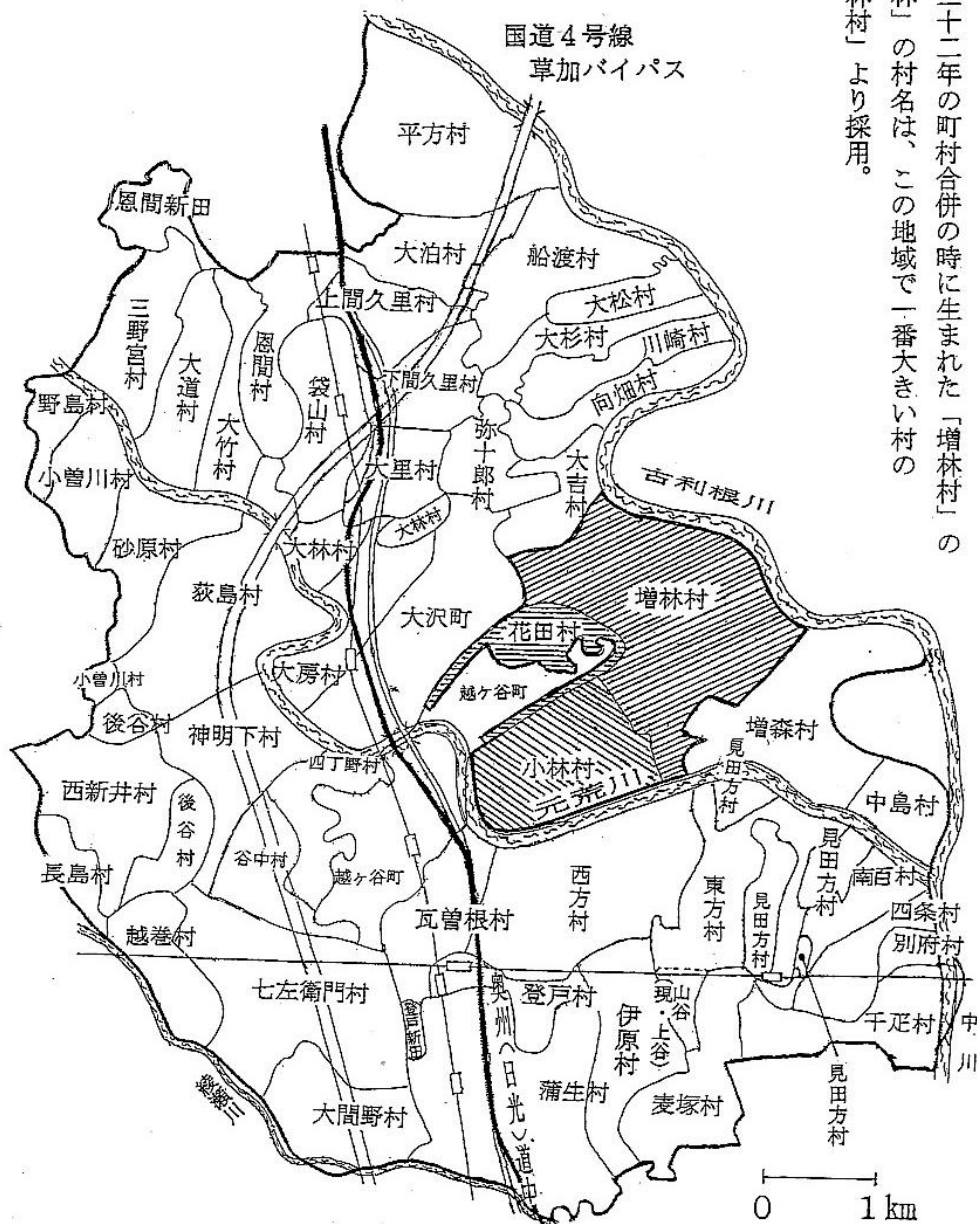
平成11・12年度調査
1999・2000

増林地区 の石仏

^{ましばやし}増林村・^{ましもり}増森村・^{なかじま}中島村・
^{はなた}花田村・^{こばやし}小林村

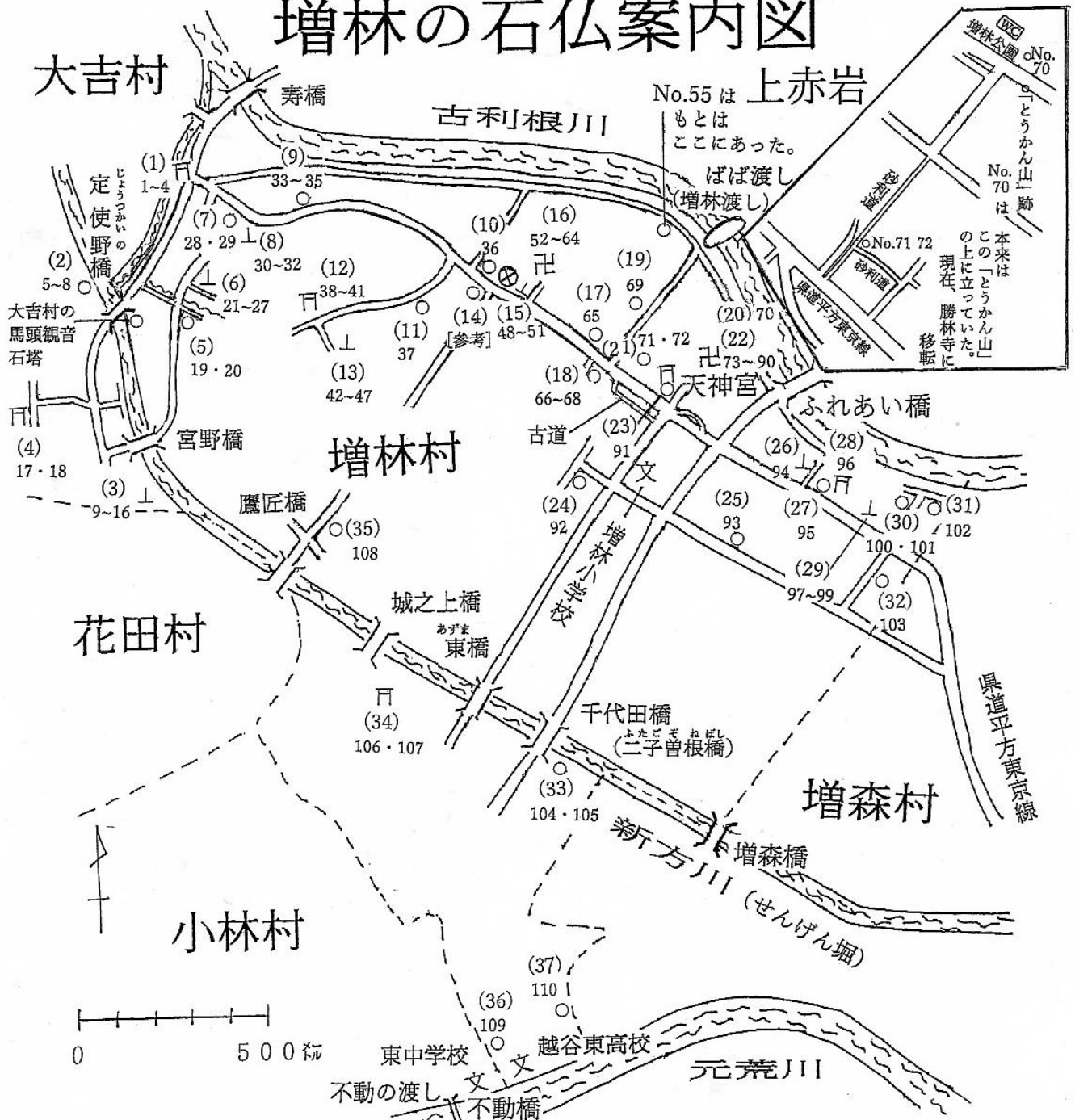
令和6年(2024)4月改訂

明治二十二年度の町村合併の時に生まれた「増林村」の
「増林」の村名は、この地域で一番大きい村の
「増林村」より採用。



加藤幸一 作成

増林の石仏案内図



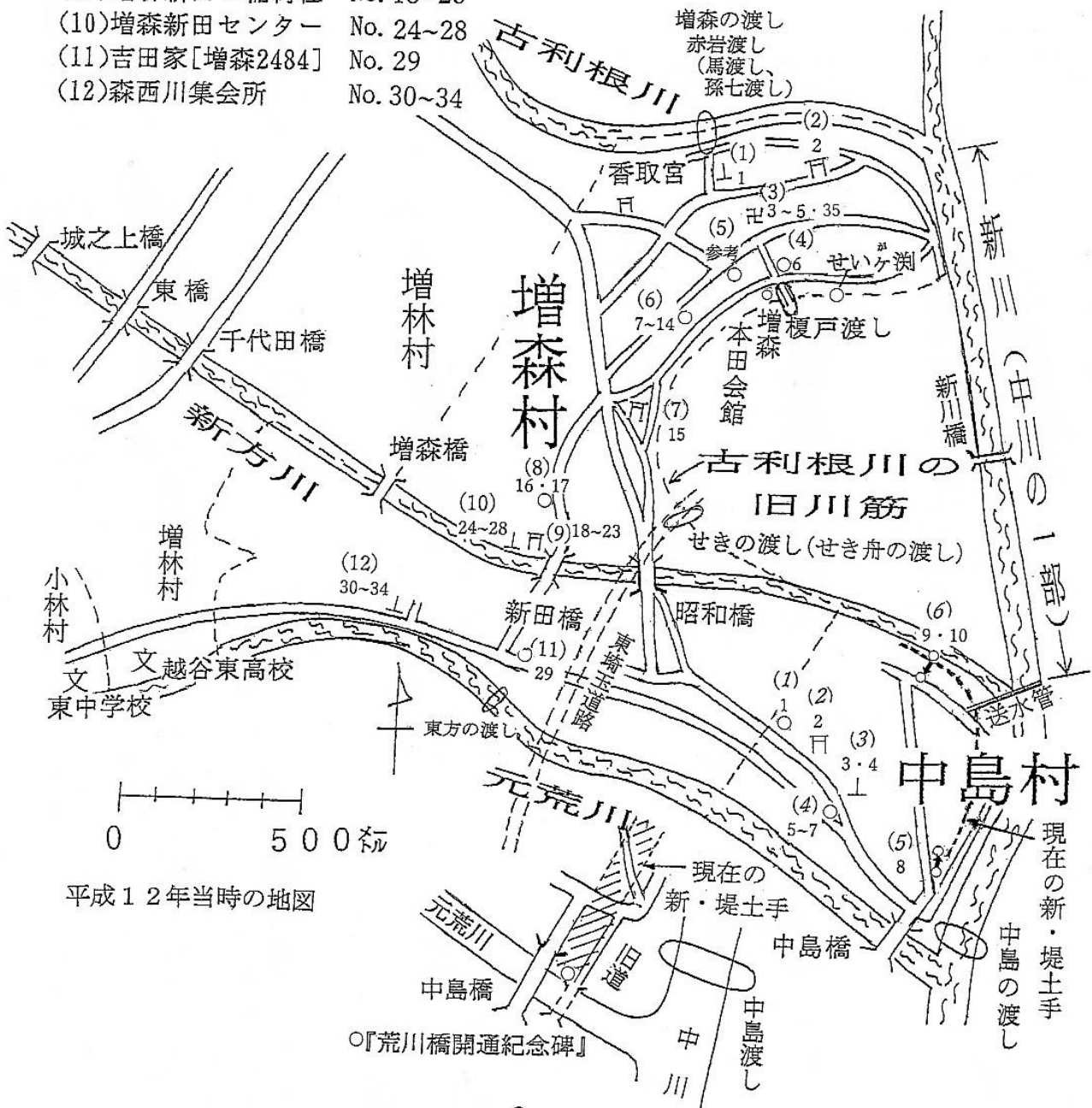
増森・中島の石仏案内図

増森村

- (1) 観音堂墓地 No. 1
- (2) 河原崎の内田稻荷 No. 2
- (3) 宝正院 No. 3~5・35
- (4) 消防増林分団小屋 No. 6
- (5) 小島家[増森 1723-2][参考] (49頁)
- (6) 薬師堂 No. 7~14
- (7) 増森神社 No. 15
- (8) 中村家[増森2-47] No. 16・17
- (9) 増森新田の稻荷社 No. 18~23
- (10) 増森新田センター No. 24~28
- (11) 吉田家[増森2484] No. 29
- (12) 森西川集会所 No. 30~34

中島村

- (1) 林家[中島1-79] No. 1
- (2) 中島神社 No. 2
- (3) 正福寺管轄の共同墓地 No. 3・4
- (4) 小川家[中島2-89] No. 5~7
- (5) 鈴木家[中島 2-119-1] No. 8
- (6) 送水管近くの路傍 No. 9・10



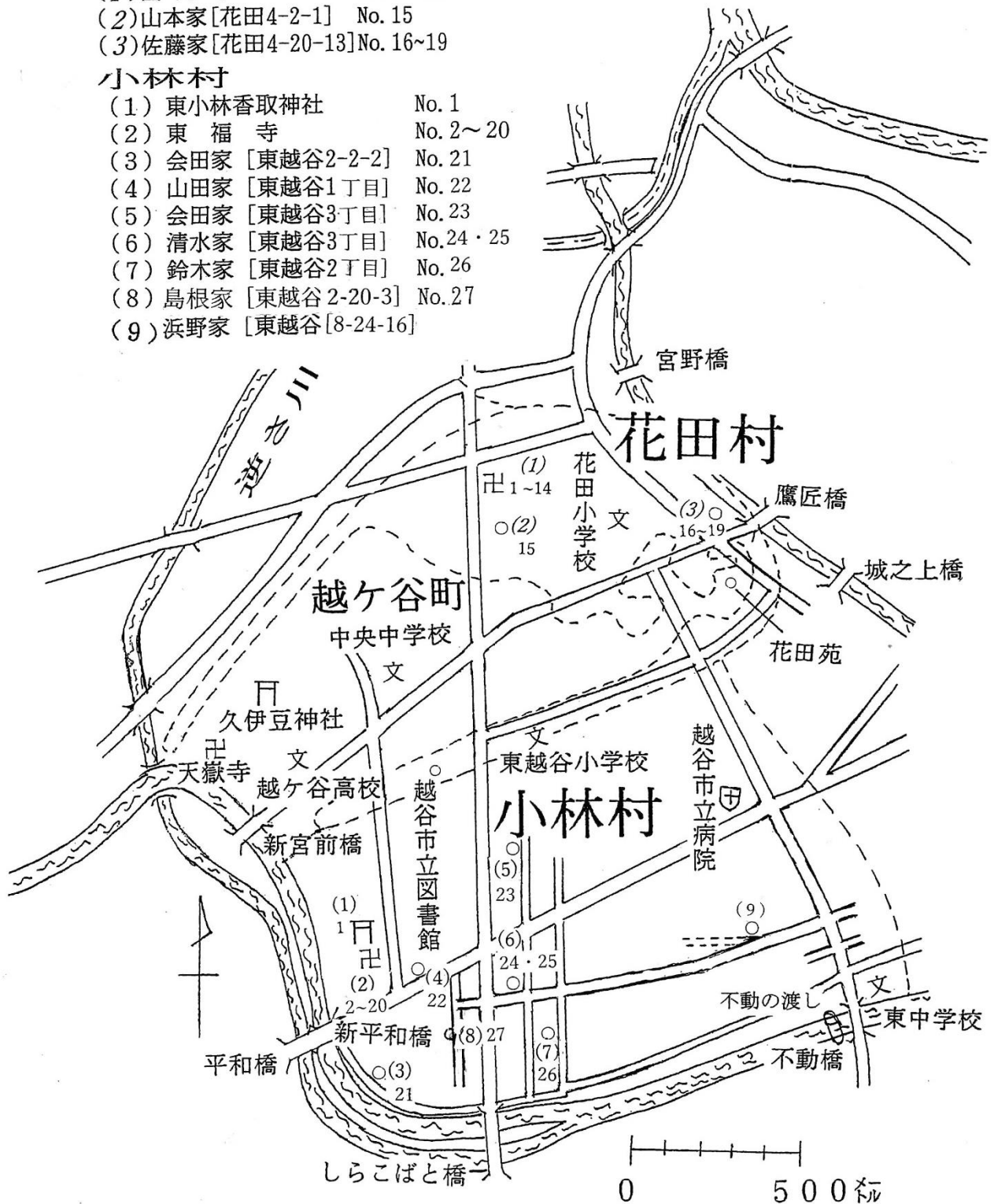
花田・小林の石仏案内図

花田村

- (1) 西円寺 No. 1~14
- (2) 山本家 [花田4-2-1] No. 15
- (3) 佐藤家 [花田4-20-13] No. 16~19

小林木村

- (1) 東小林香取神社 No. 1
- (2) 東福寺 No. 2~20
- (3) 会田家 [東越谷2-2-2] No. 21
- (4) 山田家 [東越谷1丁目] No. 22
- (5) 会田家 [東越谷3丁目] No. 23
- (6) 清水家 [東越谷3丁目] No. 24・25
- (7) 鈴木家 [東越谷2丁目] No. 26
- (8) 島根家 [東越谷2-20-3] No. 27
- (9) 浜野家 [東越谷 [8-24-16]



1. 増林 道標付き普門品供養塔

[側面]

ひがしにふもとくんとんち

増林前波の水神宮

文化十二年亥
二月吉日
普門品供養
中講

全波組

こをみおーがやん戸

額主要心

きんこのださーま

世語人 澁島

文化12 (1815)

3. 増林 道標付き成田山供養塔

[側面]

右にこしや二十丁
左のぶに里

増林前波の水神宮

成田山
増林生張 是か
二丁 屯三郎左衛門
話儀右衛門
人 弥兵衛

慶応3 (1867)

2. 増林 敷石供養塔

増林前波の水神宮

敷石
嘉永六年
二月吉日
川岸船持中
大吉己之七
川寺仲左門
發願主
半五尺

嘉永6 (1853)

4. 増林 普門品供養塔

増林前波の水神宮

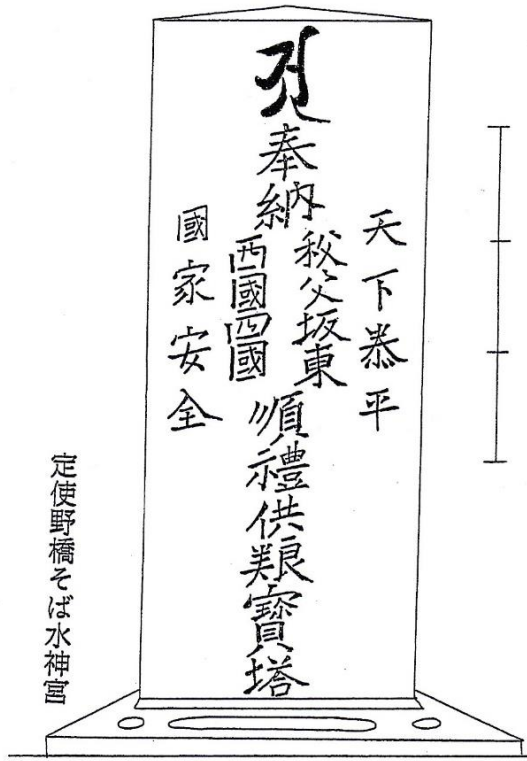
普門品供養
鐵章齋の時讀
鐵章齋の時讀

戸張佐治門
平野源八
岡安文左衛門
平野權左門
中山重三郎
同儀右衛門
中笠平八
岡安新若門
平野吉五郎

嘉永元 (1848)

5. 増林

百観音・八十八箇所巡礼塔

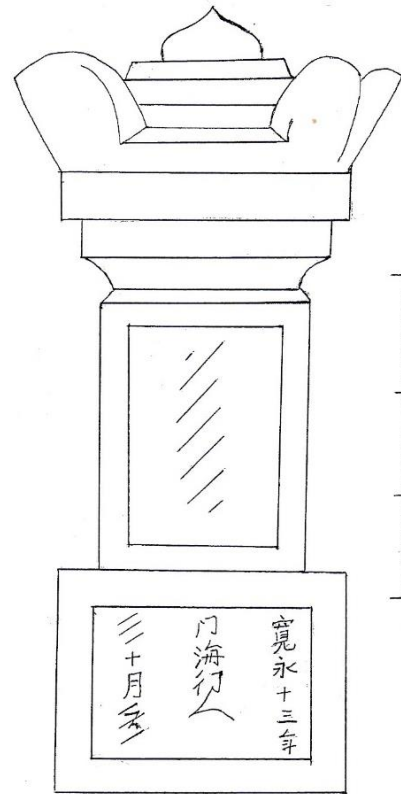


定使野橋そば水神宮

寛政5 (1793)

7. 追加 増林

宝篋印塔



定使野橋そば水神宮

寛永13 (1636)

6. 増林

地藏像付き念仏塔



定使野橋そば水神宮

宝永8 (1711)

8. 追加 増林

「水神宮」文字塔



定使野橋そば水神宮

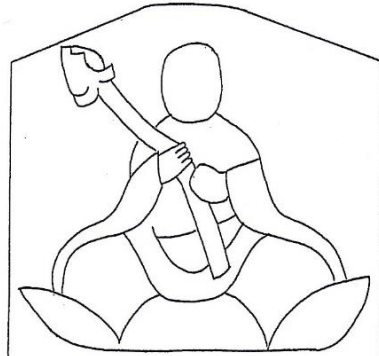
嘉永2 (1849)

9. 増林

道標付き三界万霊塔

ふさう乃

定使野共同墓地



右ふしかや乃
願主増林村惣掣放山慈光尼
三界萬靈有無縁等
寛延四辛未天三月吉祥日
左さーま乃

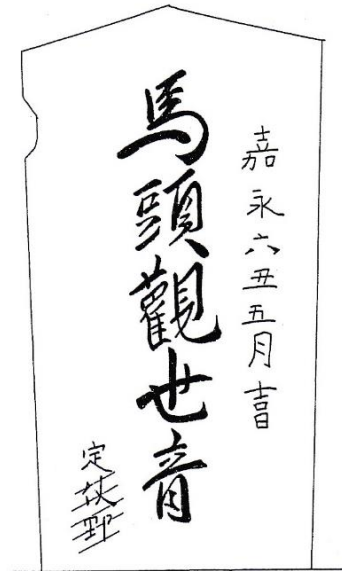
寛延4 (1751)

のたほうし花乃

11. 増林

「馬頭観音」文字塔

定使野共同墓地



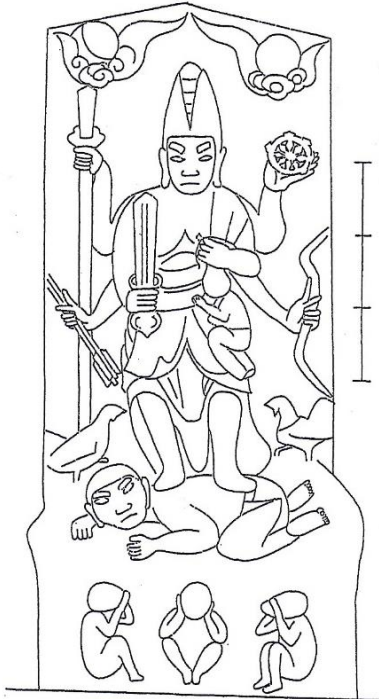
嘉永六五五月吉日
馬頭観世音
定使野

嘉永6 (1853)

10. 増林

青面金剛像庚申塔

定使野共同墓地



安永4 (1775)

12. 増林

観音像付き普門品供養塔

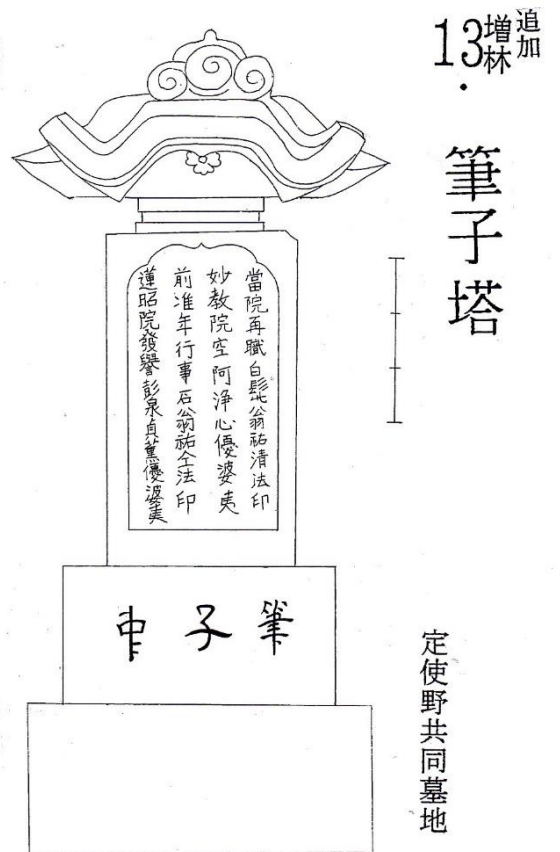
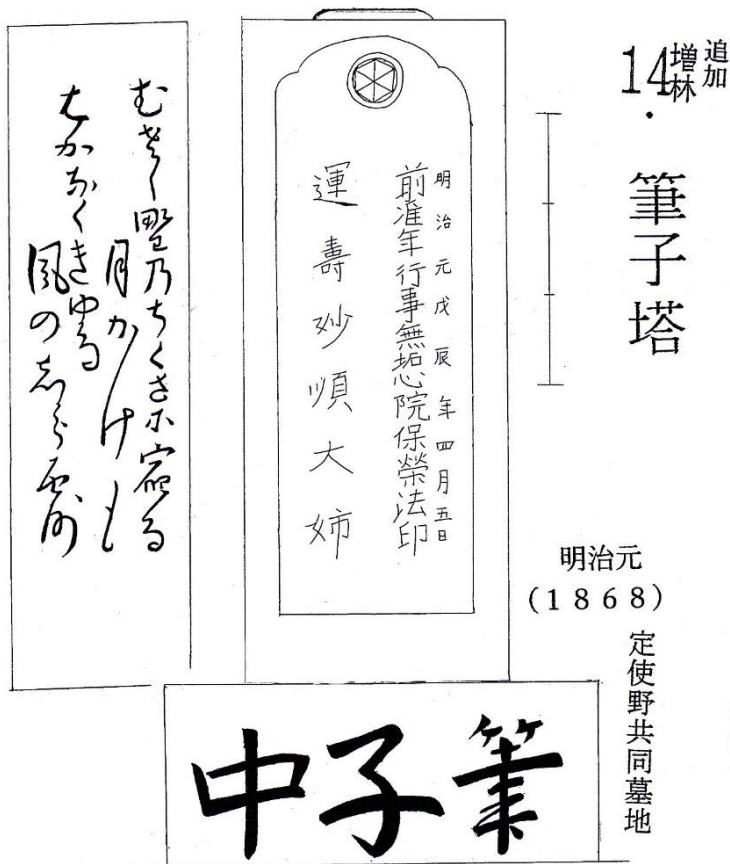
定使野共同墓地



天明九乙酉歳増林定使野
奉讀誦普門品三万卷供養
二月吉祥日講中二十人

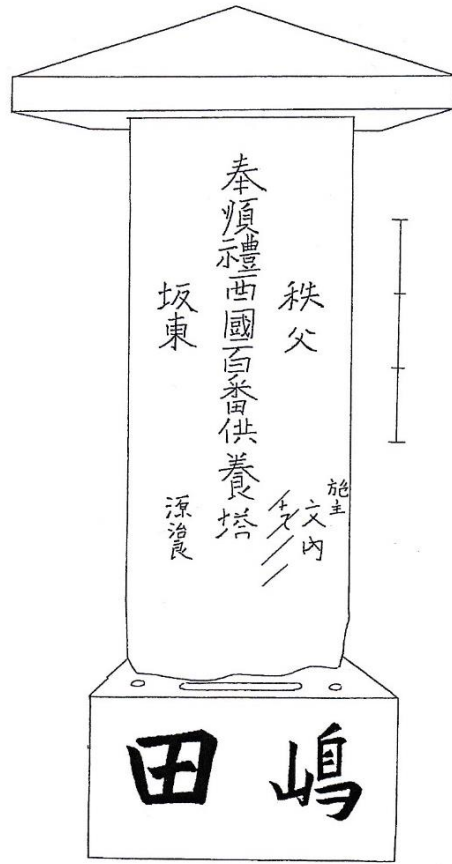
願主
門助

天明9 (1789)



17^{増林}・百観音巡礼塔

島田家「花田二一三―七」稲荷社



弘化2 (1845)

19^{増林}・道標付き文字庚申塔

たぶらうら

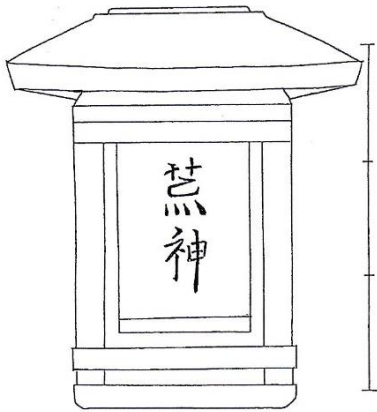
ちんごら



嘉永7 (1854)

18^{増林}・「荒神」文字塔

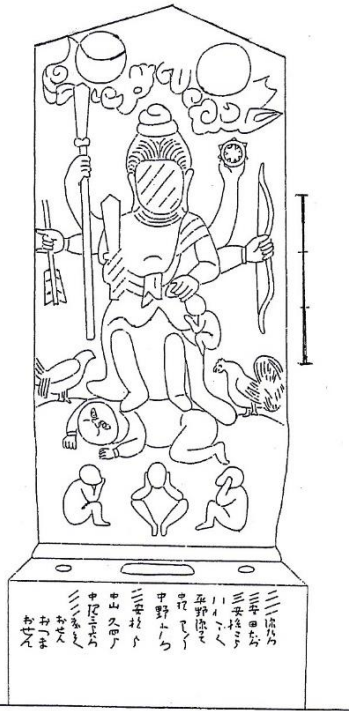
島田家「花田二一三―七」稲荷社



元禄7 (1694)

20^{増林}・青面金剛像庚申塔

野田街道「かけい堀」そば十字路



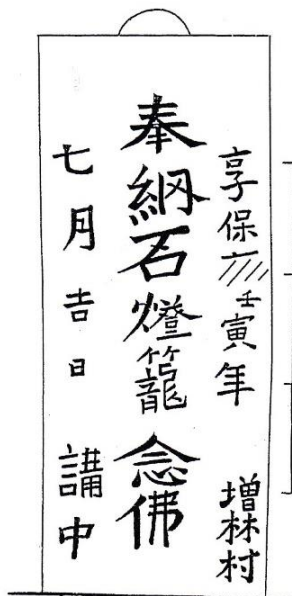
野田街道「かけい堀」そば十字路

三流ちん
三安田ちん
三安孫ちん
ハイトく
平野保三
中野たけ
中野たけ
三安ちん
中山久四
中野三六
おせん
おま
おせ

元禄17 (1704)

21^{増林}・石燈籠供養塔

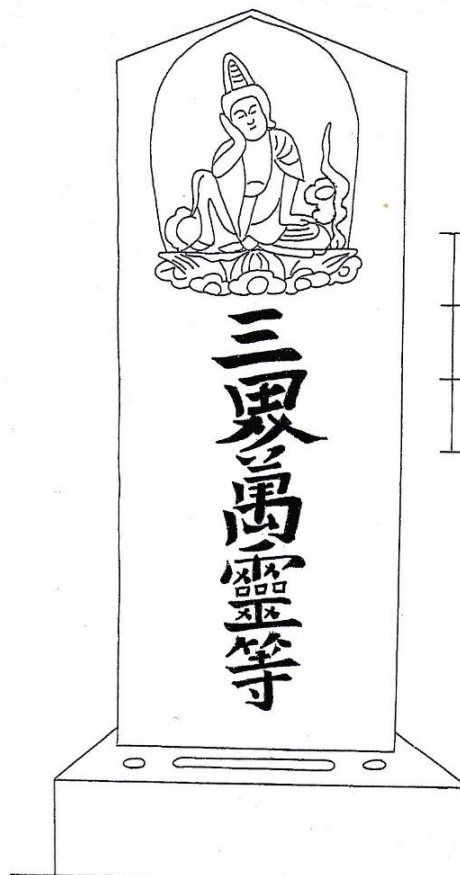
清涼院墓地



享保7 (1722)

23^{増林}・十九夜念仏を兼ねた三界万霊塔

清涼院墓地



寛延4 (1751)

22^{増林}・十三仏像容塔

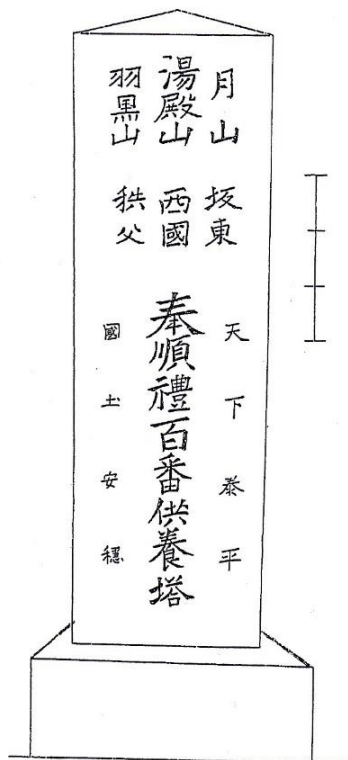
清涼院墓地



明和7 (1770)・天明7 (1787)

24^{増林}・出羽三山及び百観音巡礼塔

清涼院墓地

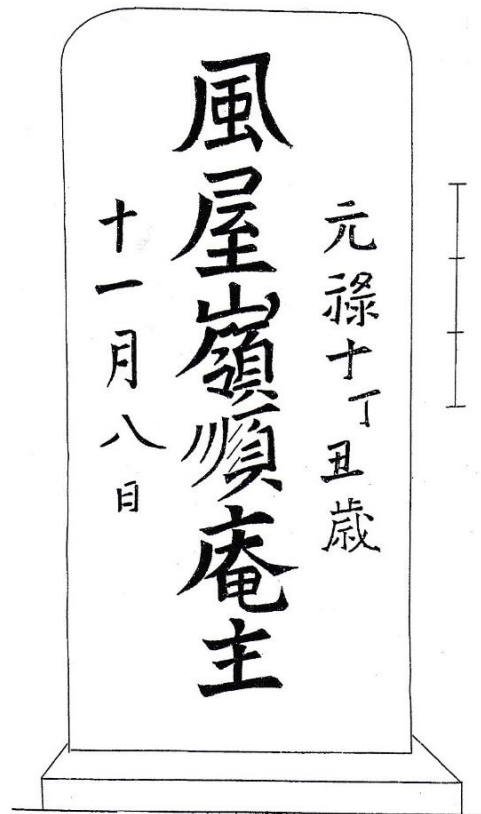


文化7 (1810)

25^{増林}

清涼院庵^{あんじゅ}主供養塔

清涼院墓地



元禄10 (1697)

26^{増林 追加}

「曆住塔」文字塔

清涼院墓地



27^{増林 追加}

地蔵像付き念仏塔

清涼院墓地

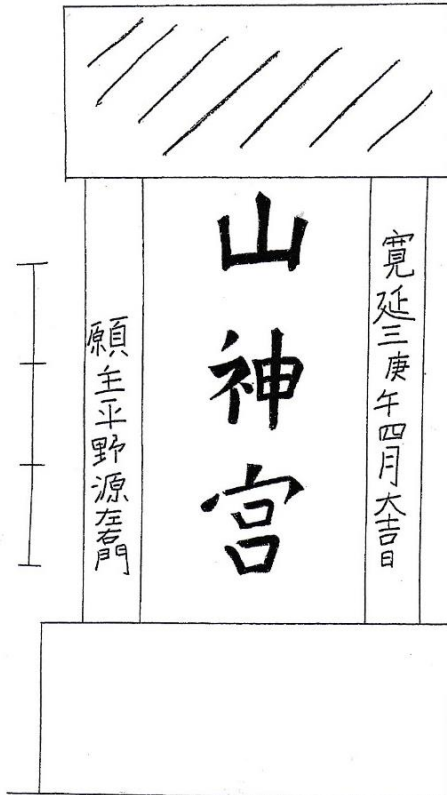


寛文元年 (1661)

28^{増林}

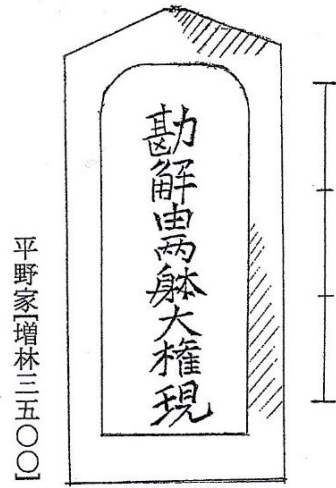
「山神宮」文字塔

平野家「増林三五〇〇」



寛延3 (1750)

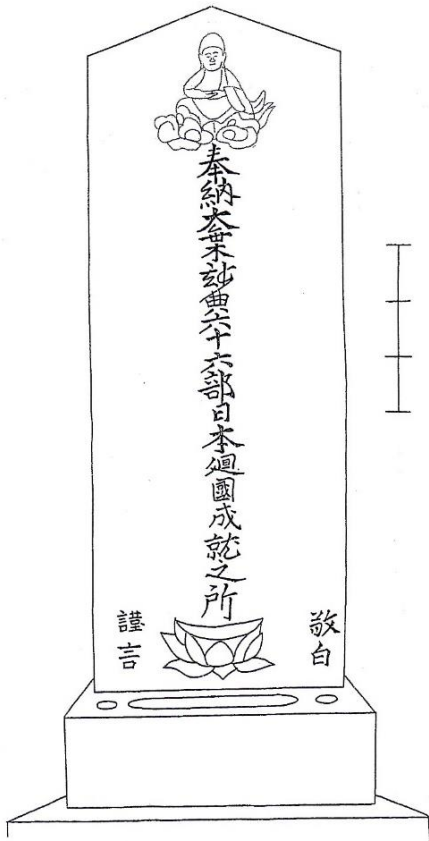
29^{増林} 「勘解由両体大権現」 文字塔



平野家[増林三五〇〇]

寛政2 (1790)

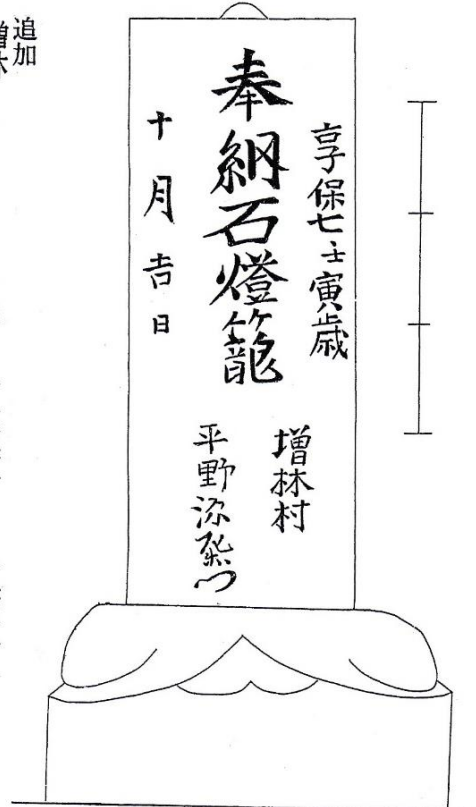
30^{増林} 六十六部廻国塔



平野家個人墓地

享保5 (1720)

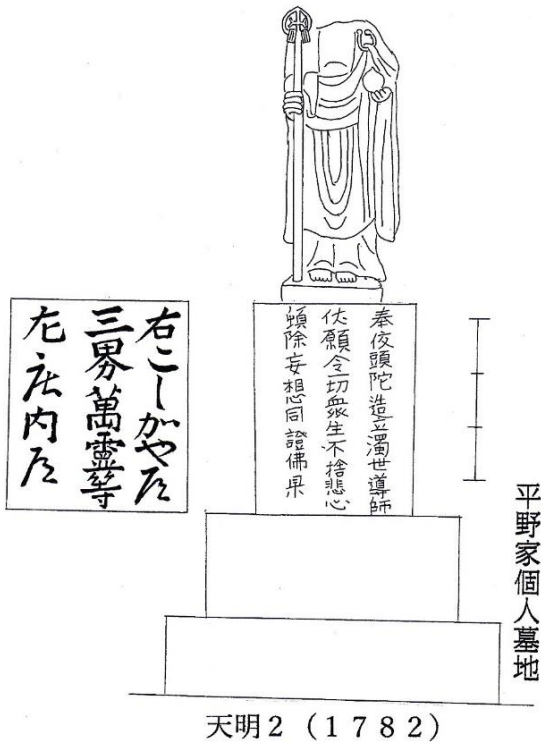
31^{増林} 石燈籠供養塔



平野家個人墓地

享保7 (1722)

32^{増林追加} 地藏像及び道標付き墓塔



平野家個人墓地

天明2 (1782)

増林 33

文字庚申塔

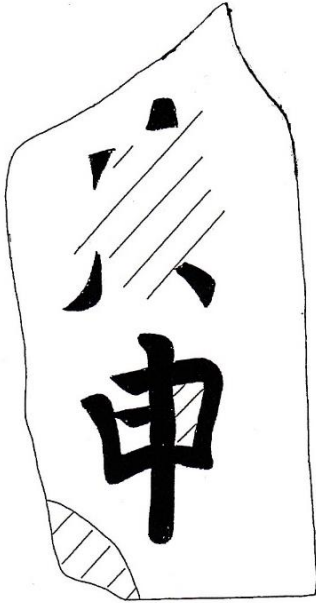


赤土製作所の三百以西の路傍

文政13 (1830)

増林 34

文字庚申塔

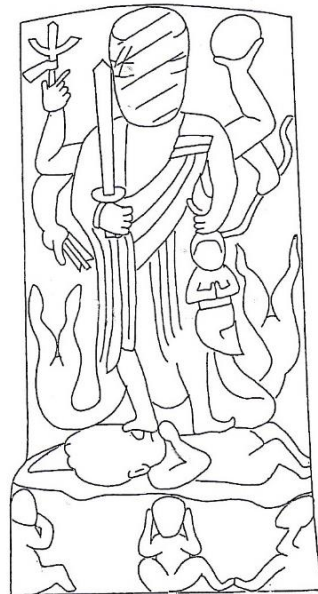


赤土製作所の三百以西の路傍

文化3 (1806)

増林 35

青面金剛像庚申塔



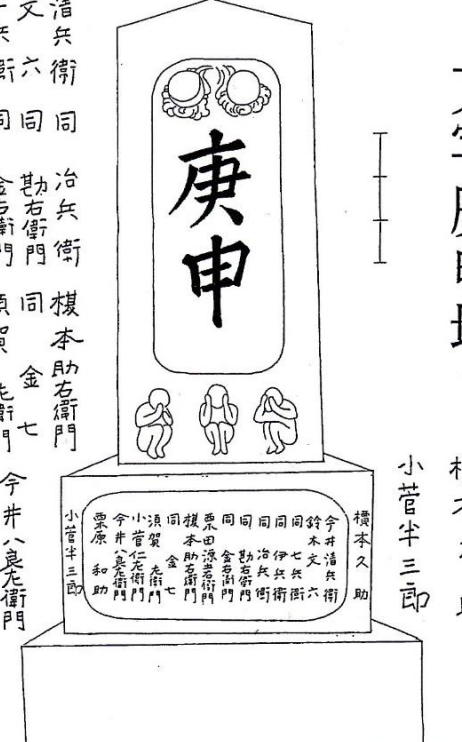
赤土製作所の三百以西の路傍

文化3 (1806)

増林 36

文字庚申塔

今井清兵衛 同 治兵衛 榎本助右衛門
 鈴木文六 同 勘右衛門 須賀金七
 同 伊兵衛 同 栗田源若衛門 小菅仁左衛門
 同 伊兵衛 同 栗田源若衛門 小菅仁左衛門
 同 伊兵衛 同 栗田源若衛門 小菅仁左衛門



鈴木家「増林三七六三」路傍

榎本久助

小菅半三郎

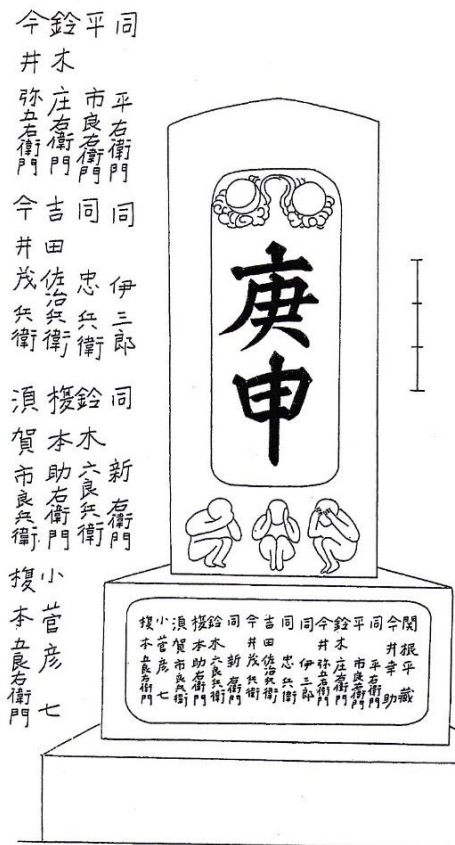
天保7 (1836)

37 増林

文字庚申塔

今井家「増林三七二」路傍

関根平藏
今井幸藏

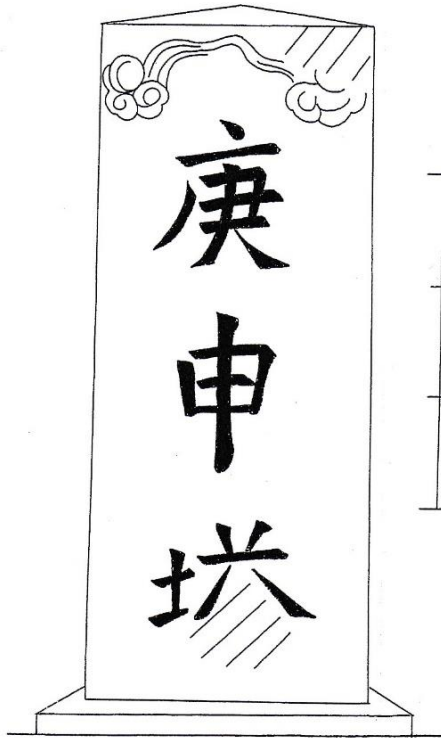


天保7 (1836)

38 増林

文字庚申塔

護郷神社(旧「浅間神社」)

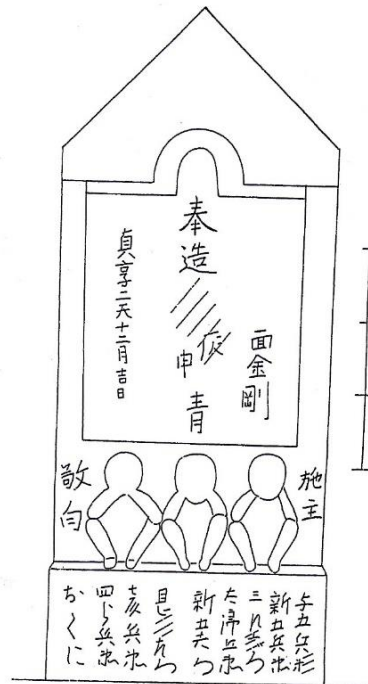


文政7 (1824)

39 増林

板碑型三猿庚申塔

護郷神社(旧「浅間神社」)



貞享2 (1685)

40 増林

石階・敷石供養塔

護郷神社(旧「浅間神社」)

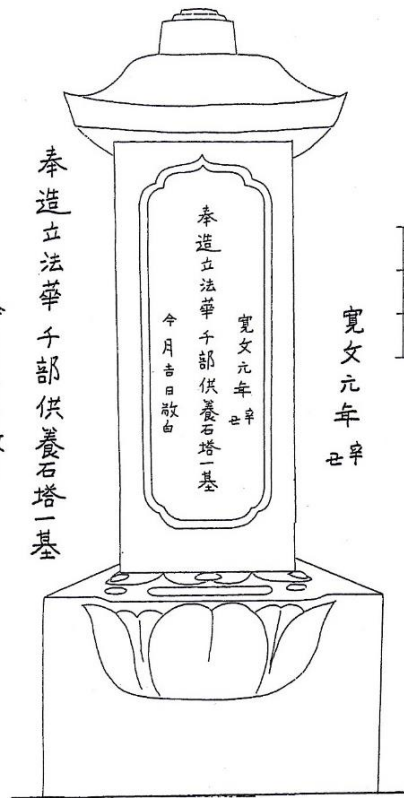


天保10 (1839)

41 増林

法華經供養塔

護郷神社(旧「浅間神社」)

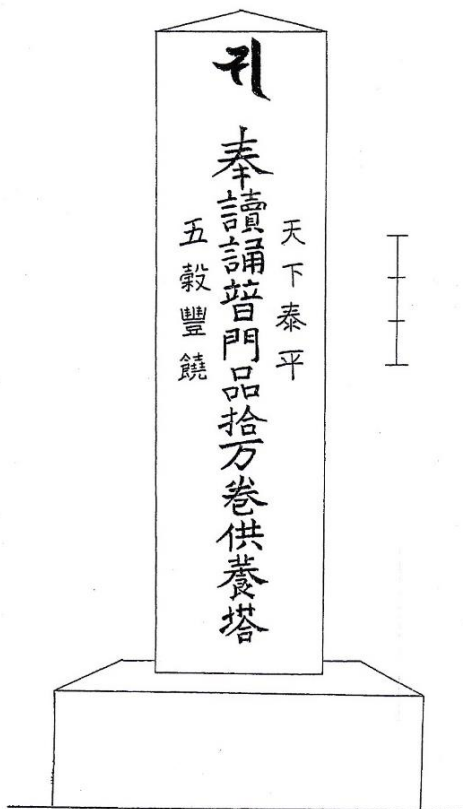


寛文元 (1661)

42 増林

普門品供養塔

福寿院跡墓地



享和2 (1802)

43 増林

弘法大師像

福寿院跡墓地



安永8 (1779)

44 増林

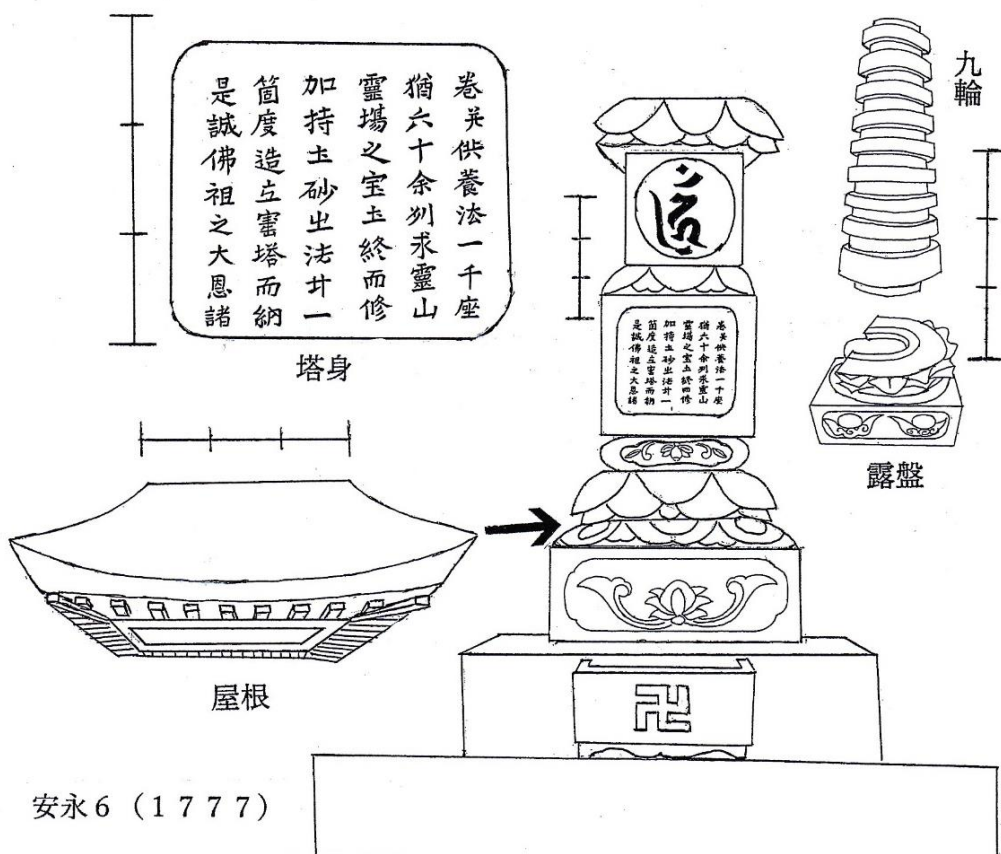
不動明王像

福寿院跡墓地



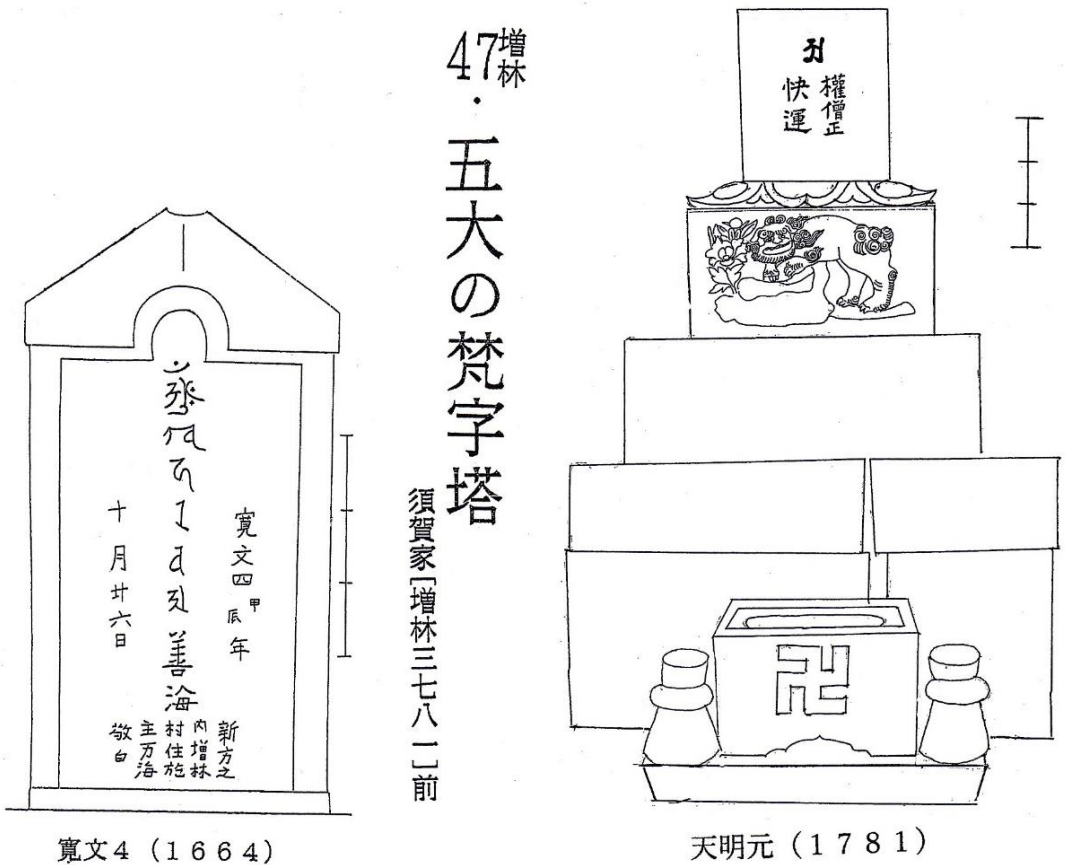
安永7 (1778)

追加
増林
45
・
ほうぎょういんとう
宝篋印塔



福寿院跡墓地

追加
増林
46
・
ごんそうじょう
権僧正快運の碑

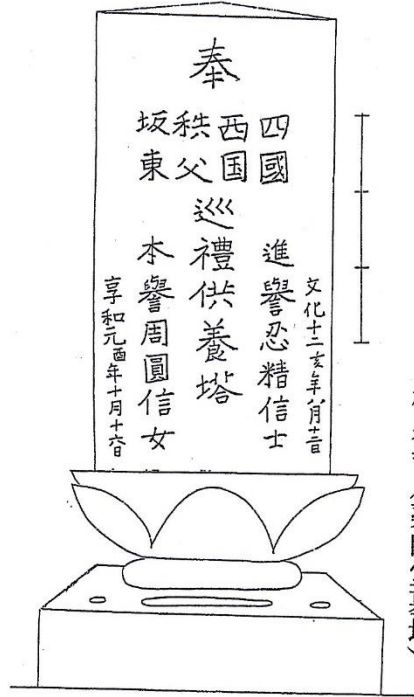


福寿院跡墓地

48^{増林}

百観音・八十八箇所巡礼塔

林泉寺 (薬師堂墓地)

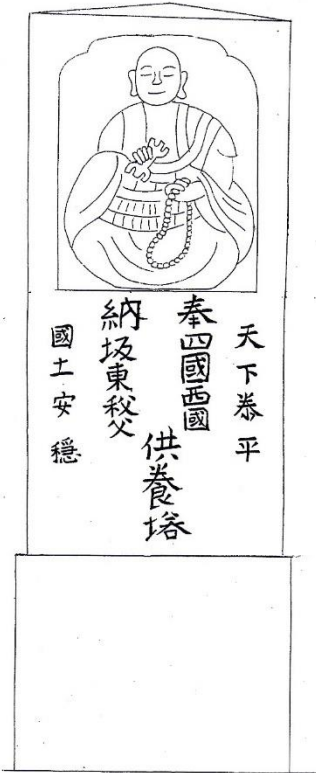


文化12 (1815)

49^{増林} 追加

百観音・八十八箇所巡礼塔

林泉寺 (薬師堂墓地)



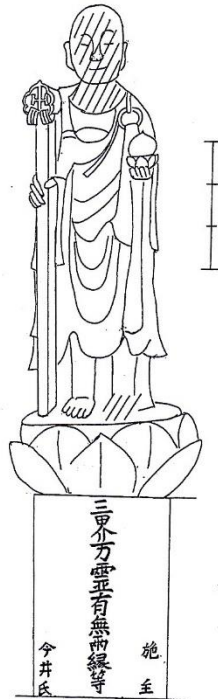
49文政5 (1822)

[参考](14)須賀家前
ごだい 五大の梵字塔

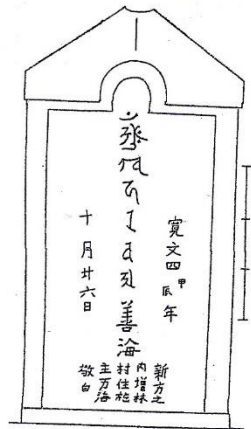
50^{増林} 追加

地藏像付き三界万霊塔

林泉寺 (薬師堂墓地)



延享4 (1745)

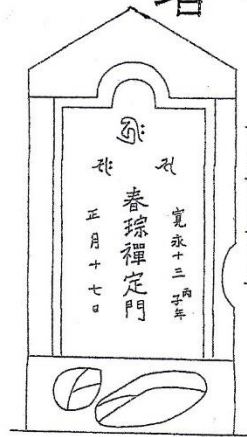


寛文4 (1664)

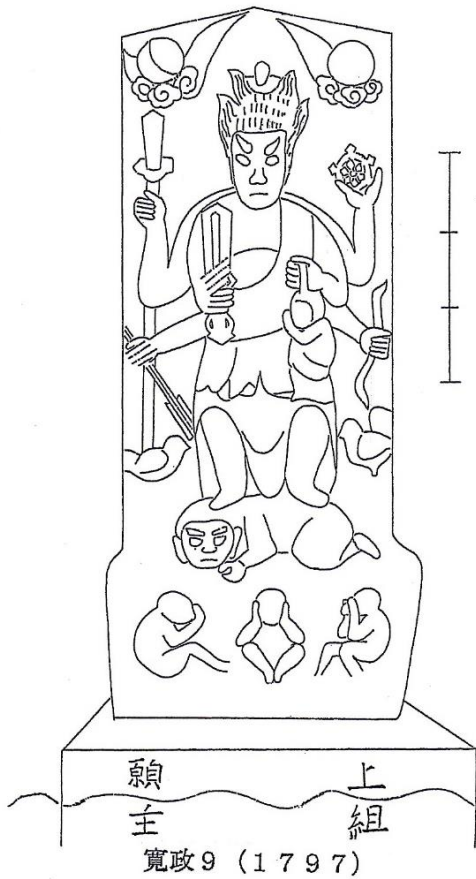
※「アインク」は大日如来。
※「五大」とは、「キヤ・カ・ラ・バ・ア」の五つをさす。

51^{増林} 板碑型墓塔

林泉寺 (薬師堂墓地)



寛永13 (1636)

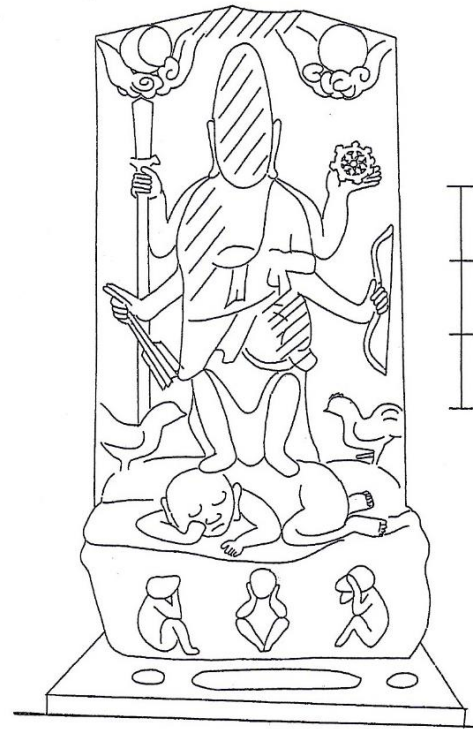


53^{増林}

青面金剛像庚申塔

林泉寺 (入口)

寛政9 (1797)



52^{増林}

青面金剛像庚申塔

林泉寺 (入口)

明和5 (1768)

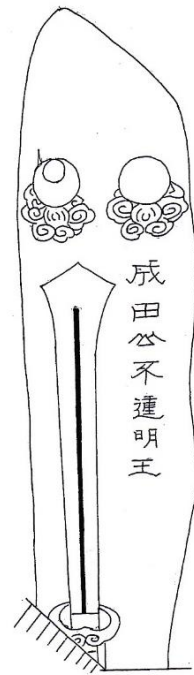


55^{増林}

地蔵像付き念仏塔

林泉寺 (参道)

嘉永2 (1849)



54^{増林 追加}

「不動剣」石仏

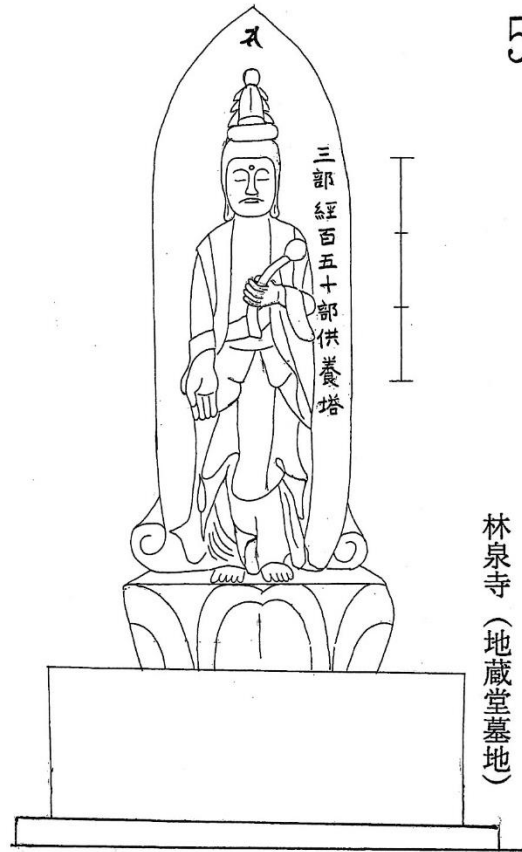
林泉寺 (不動堂裏)

明治14 (1881)

56^{増林 追加}

「三部經」供養塔

林泉寺 (地蔵堂墓地)



57^{増林}

地蔵像付き念仏塔

林泉寺 (参道南東側墓地)



寛文7 (1667)

58^{増林}

利劍名号塔 (浅間山噴火 供養塔)

朝廷賜十當寺 初恩寺主字之

勅許

疫癘除 直刀偏利幻名號者為除滅天災地妖灾癘

肥

直刀偏利幻名號者為除滅天災地妖灾癘

朝廷賜十當寺

初恩寺主字之

吉譽歌音

南無阿彌陀佛

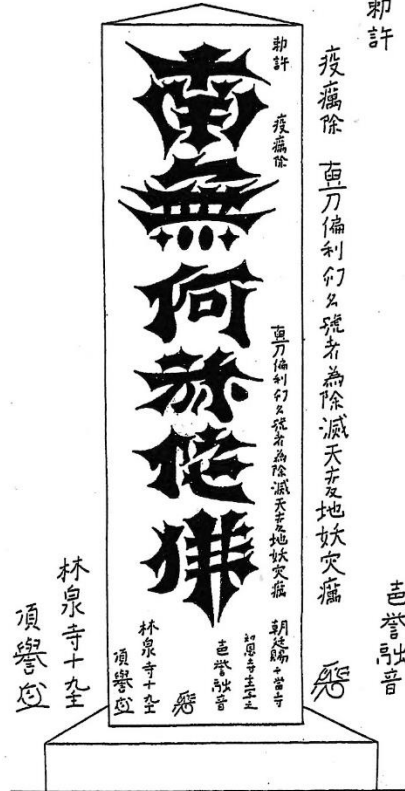
林泉寺十全

頂譽

林泉寺十九全

頂譽

林泉寺 (山門前)

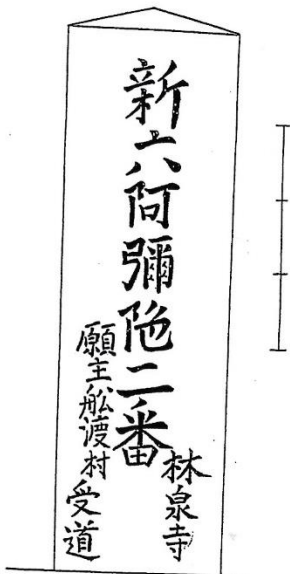


天明4 (1784)

59^{増林}

『新六阿彌陀二番』標識石塔

林泉寺 (山門前)

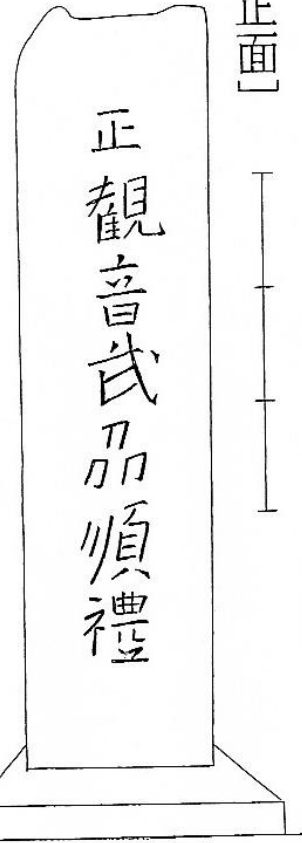


天明8 (1788)

60. 増林 『御殿境内』文字付き巡礼標識石塔

〔側面〕 増林村林泉寺

林泉寺（山門前）



〔正面〕

〔側面〕 第三十一番

〔裏面〕 御殿境内

61. 増林 阿弥陀像付き 林泉寺（僧侶の墓地）

開山僧「本誉上人」 供養塔



寛文5 (1665)

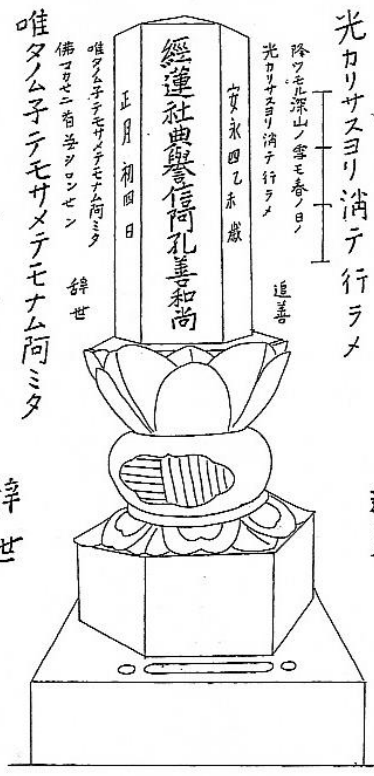
62. 増林 辞世の句付き僧侶の墓塔

降ッモル深山ノ雪モ春ノ日ノ

光カリサスヨリ消テ行ラメ

追善

林泉寺（僧侶の墓地）



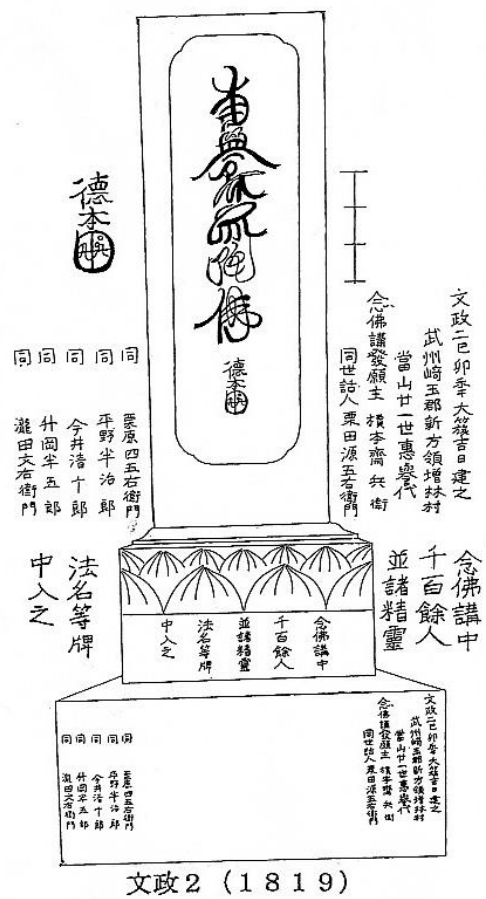
安永4 (1775)

佛ツカセニ者ヲシロンセン

辞世

63. 増林 とくほんぎょうじや 徳本行者の名号塔

林泉寺



文政2 (1819)

文政二巳卯年大慈喜日建之

武州崎玉郡新方領増林村

當山廿一世惠譽代

念佛講發願主 横手高兵衛

同世話人 栗田源五右衛門

念佛講中 千百餘人

並諸精靈

法名等牌

中人之

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

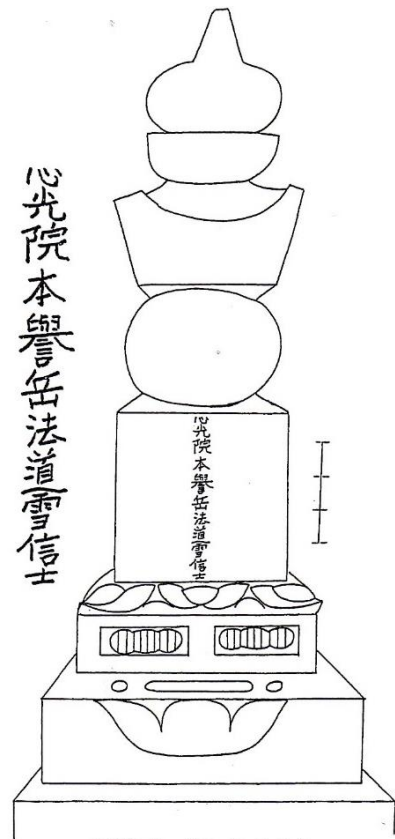
栗田源五右衛門
平野半治郎
今井清十郎
井岡半五郎
瀧田大右衛門

文政二巳卯年大慈喜日建之
武州崎玉郡新方領増林村
當山廿一世惠譽代
念佛講發願主 横手高兵衛
同世話人 栗田源五右衛門
念佛講中 千百餘人
並諸精靈
法名等牌
中人之

64^{増林}

増林関根氏始祖の五輪塔

林泉寺 (関根家墓地)



万治3 (1660)

65^{増林}

文字庚申塔

今井家「増林三八九四」



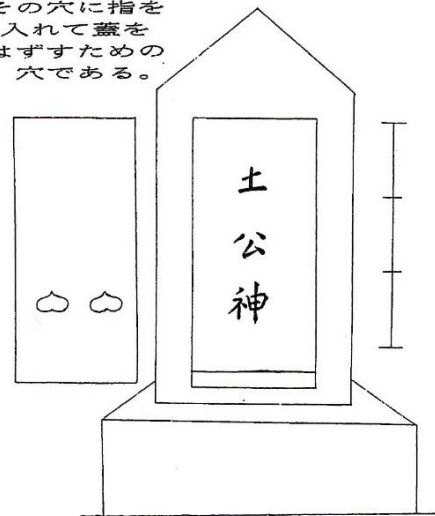
天保3 (1832)

66^{増林}

「土公神」文字塔

須賀家「増林二一四三二」

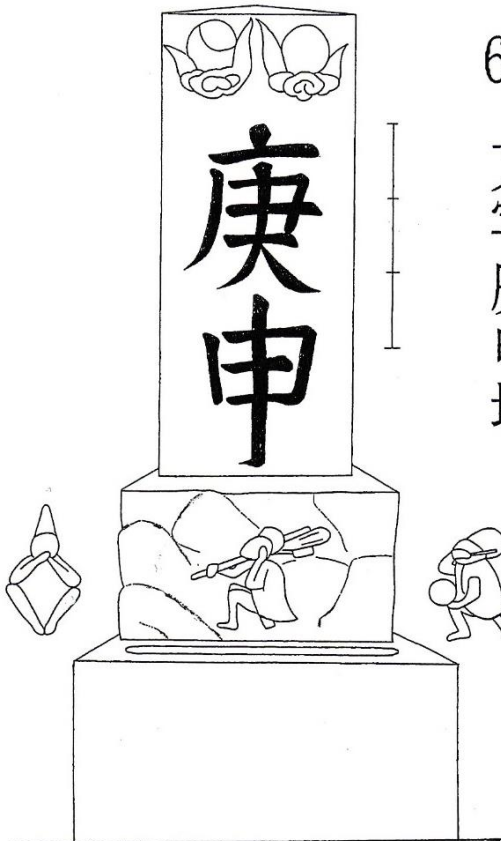
石塔の蓋
蓋の下部にある
二つの穴は、
その穴に指を
入れて蓋を
はずすための
穴である。



67^{増林}

文字庚申塔

須賀家「増林二一四三二」

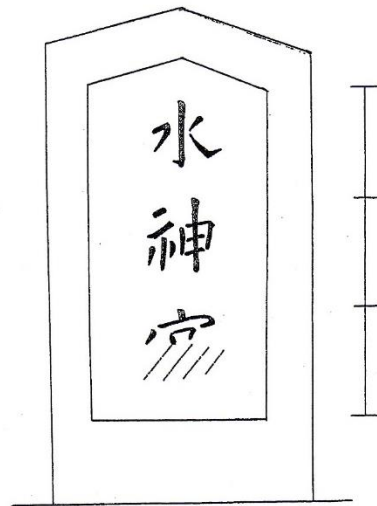


文化2 (1805)

68^{増林}

「水神宮」文字塔

須賀家「増林二一四三二」

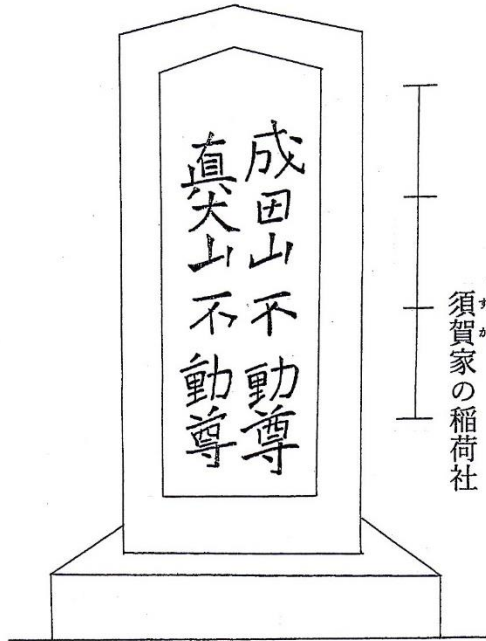


嘉永7 (1854)

69^{増林}

「成田山・真大山不動尊」文字塔

須賀家の稲荷社

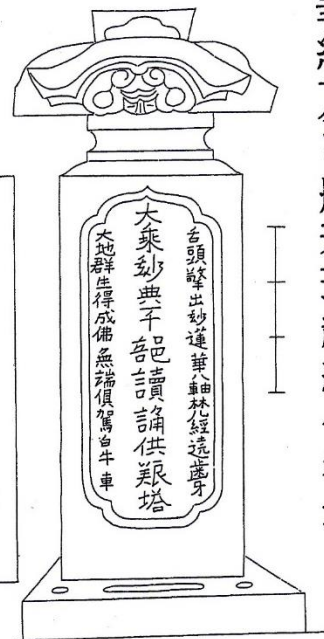


嘉永6 (1853)

70^{増林}

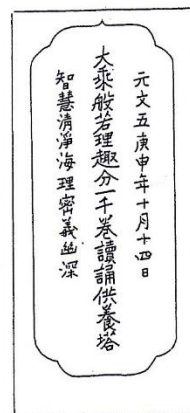
法華経及び般若理趣経供養塔

「正面」



享保14 (1729)

「裏面」



勝林寺北西の「とうかん山」
現在、勝林寺に移転

71^{増林}

不動三尊梵字付き成田山供養塔

須賀家路傍



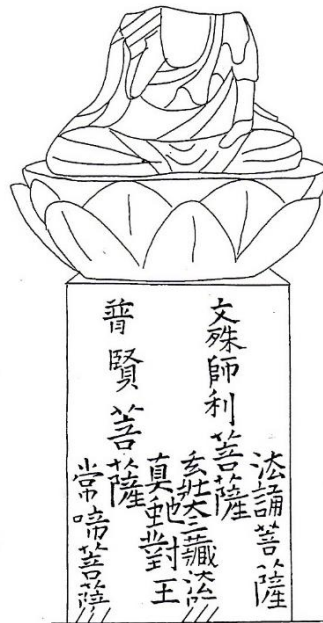
天保13 (1842)

※勝林寺「越谷観音」より真西に二五〇肘の地点

72^{増林}

釈迦三尊十六善神塔 ぜんじん

須賀家路傍



※勝林寺「越谷観音」より真西に二五〇以上の地点

延享2 (1745)

73^{増林}

普門品供養塔

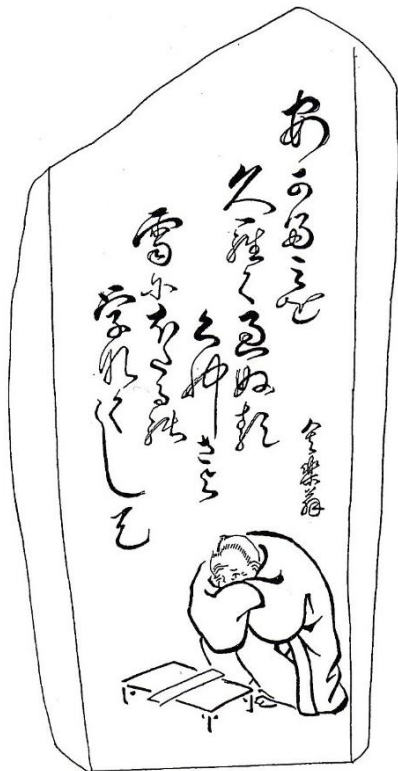
勝林寺



享和3 (1803)

〔参考〕

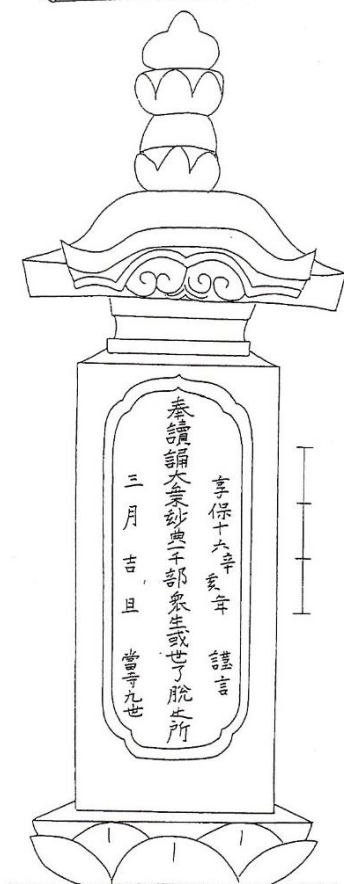
勝林寺近くの天神宮にある記念碑
和歌と人物像が刻まれている



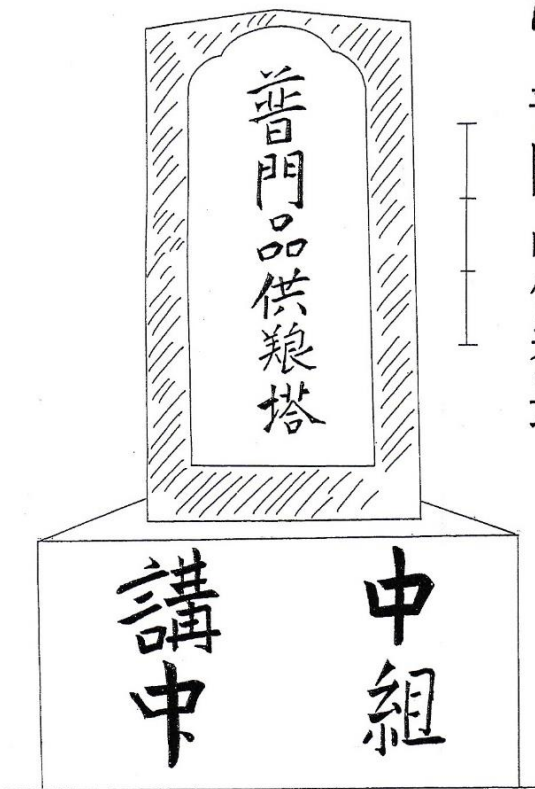
74^{増林}

大乘妙典供養塔

勝林寺



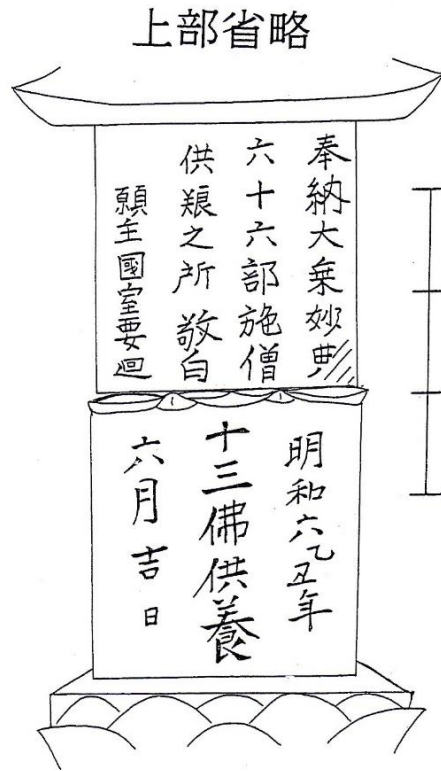
享保16 (1731)



76^{増林}・普門品供養塔

勝林寺

文政8(1825)

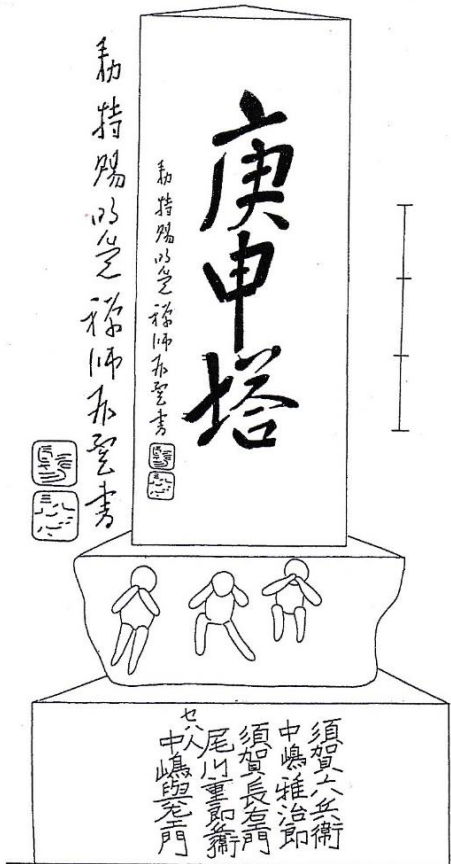


75^{増林}・六十六部及び十三仏供養塔

勝林寺

下部省略

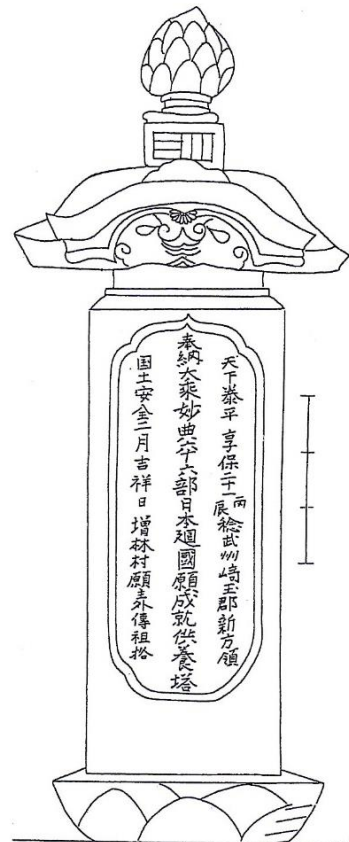
上段：正徳元(1711) 下段：明和6(1769)



78^{増林}・明覚禪師の文字庚申塔

勝林寺

万延元(1860)



77^{増林}・六十六部廻国塔

勝林寺

享保21(1736)

79^{増林}・地蔵像付き百観音等巡礼塔



勝林寺

享保16 (1731)

80^{増林}・文字庚申塔



勝林寺

文政7 (1824)

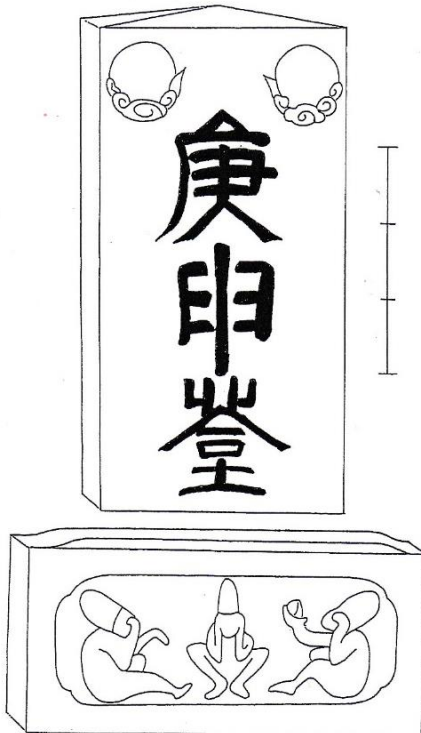
81^{増林}・文字庚申塔



勝林寺

天保7 (1836)

82^{増林}・文字庚申塔



勝林寺

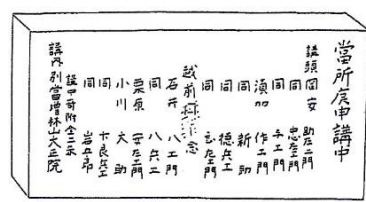
文化4 (1807)

83^{増林} 道標付き文字庚申塔 勝林寺

〔側面〕
己たがハ乃

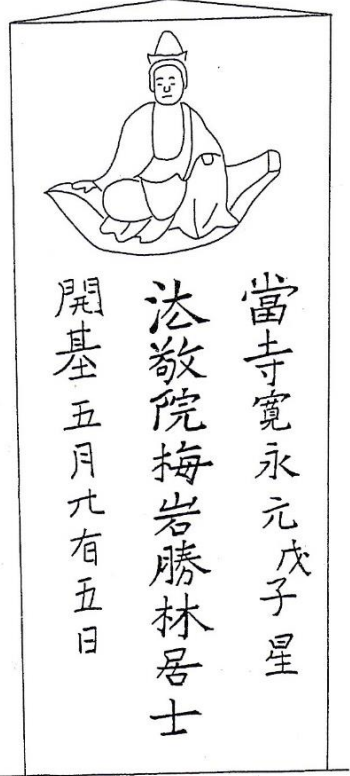


〔側面〕
寛政十年戊午三月吉日
心ごう乃
小川十吉



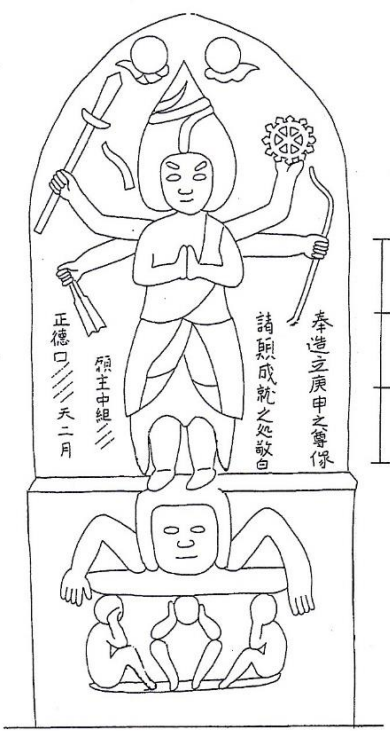
寛政10 (1798)

85^{増林} 一葉観音像付き開基塔 勝林寺



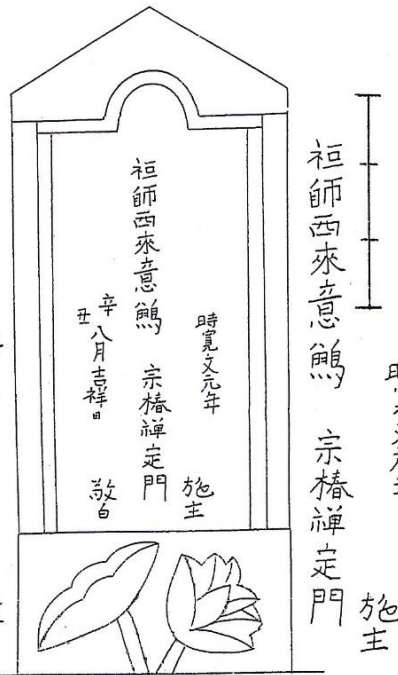
寛永元 (1624)
造立年代: 寛政9 (1779)

84^{増林} 青面金剛像庚申塔 勝林寺



正徳4 (1714)

86^{増林} 「祖師西来意」文字塔 勝林寺



寛文元 (1661)

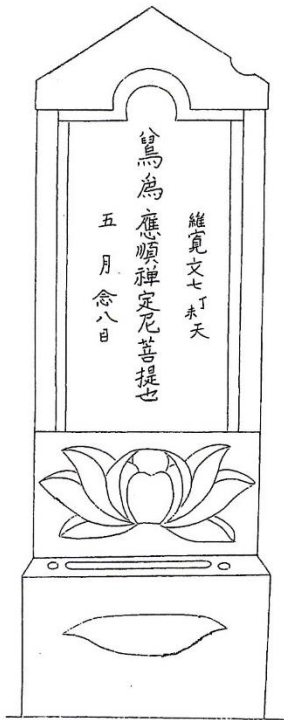
87^{増林}・六十六部廻国塔



勝林寺

宝曆5 (1755)

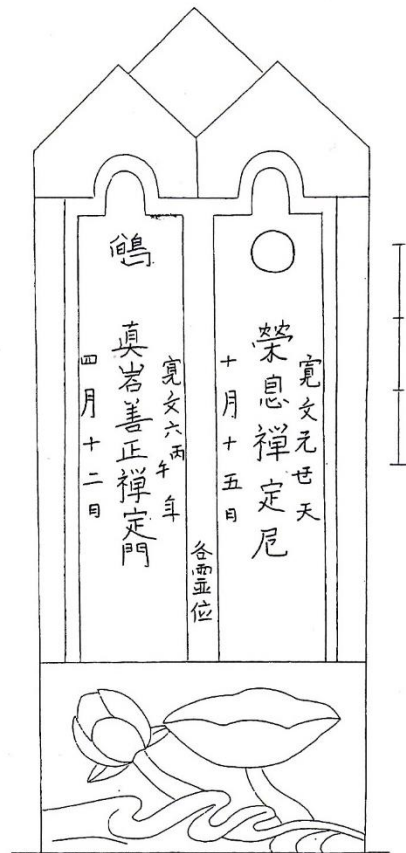
88^{増林}・烏八臼の墓塔



勝林寺

寛文7 (1667)

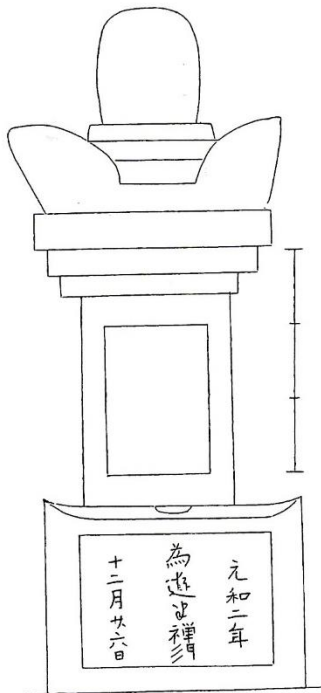
89^{増林}・烏八臼の墓塔



勝林寺

寛文6 (1666)

90^{増林}・元和二年の宝篋印塔墓塔



勝林寺

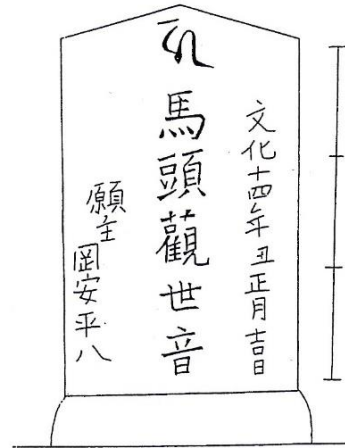
元和2 (1616)

越谷市内最古の墓塔

91^{増林}

「馬頭観音」文字塔

岡安家「増林二七〇七」路傍



文化14 (1817)

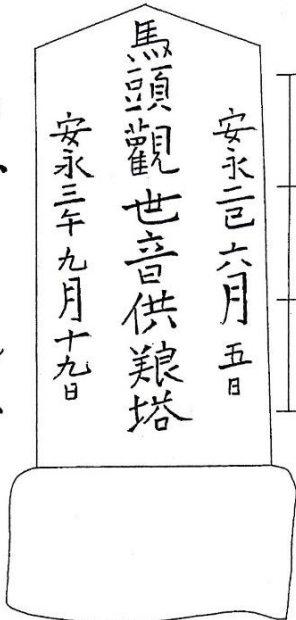
92^{増林}

道標付き「馬頭観音」文字塔

岡安家「増林二一三六九」路傍

〔側面〕

右こしかや



安永3 (1774)

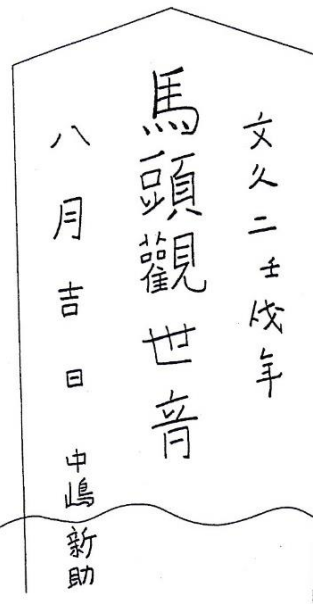
〔側面〕

左ふとろそん

93^{増林}

「馬頭観音」文字塔

宮川家「増林三一七四」路傍



文久2 (1862)

94^{増林}

「馬頭観音」文字塔

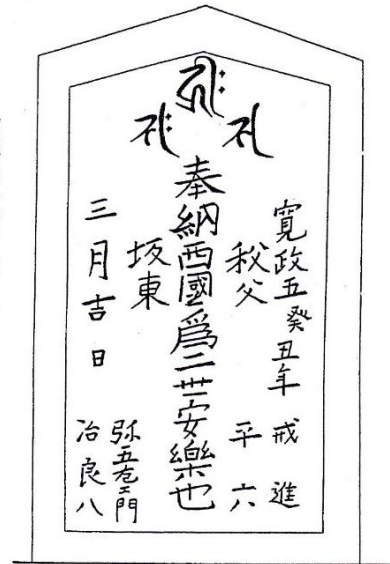
増林下組地藏堂



文化4 (1807)

95^{増林}

百観音巡礼塔



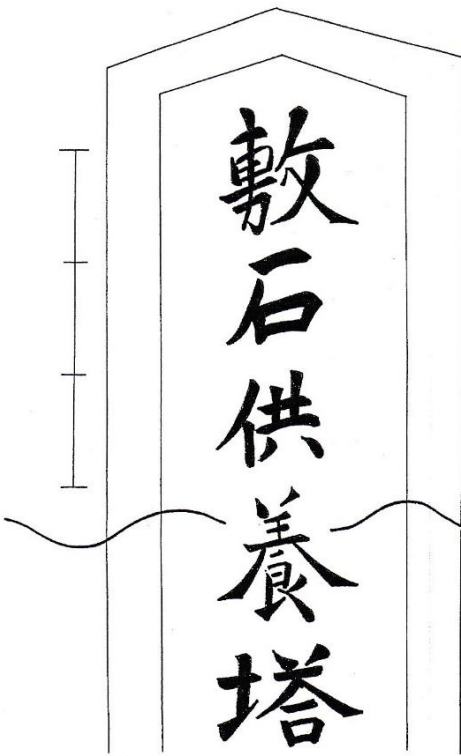
寛政5 (1793)

山崎家「増林三一一九〇」

道路反対側路傍

96^{増林}

敷石供養塔

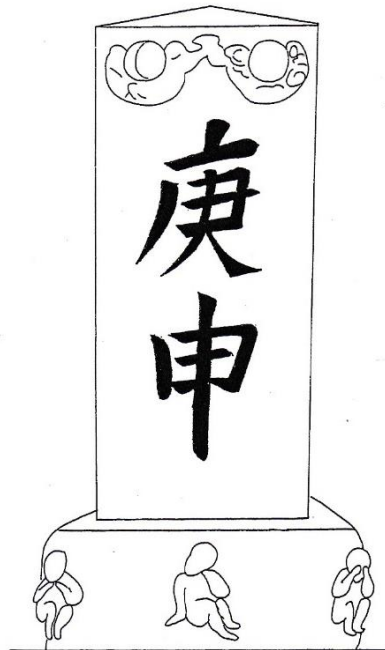


嘉永5 (1852)

増林下組香取神社

97^{増林}

文字庚申塔

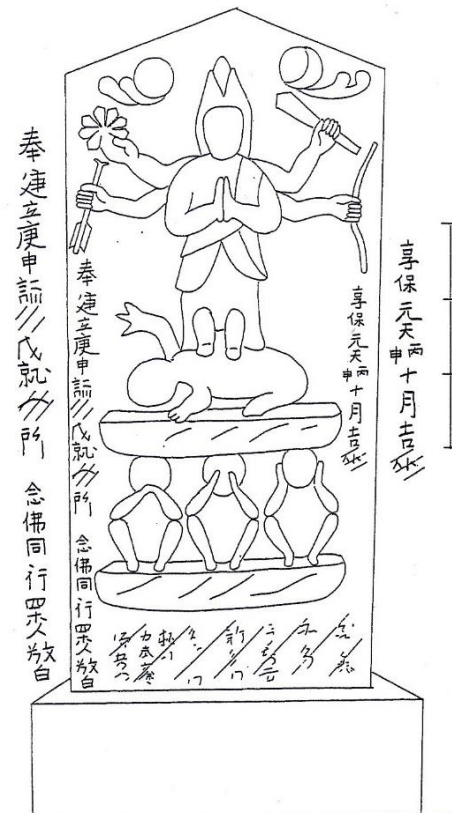


文化8 (1811)

下組集会所

98^{増林}

青面金剛像庚申塔



享保元 (1716)

下組集会所

〔側面〕

是より内ボンげん



100^{増林}・道標付き「白山権現」文字塔

白山神社

明和8 (1771)

99^{増林}・

青面金剛像庚申塔

下組集会所

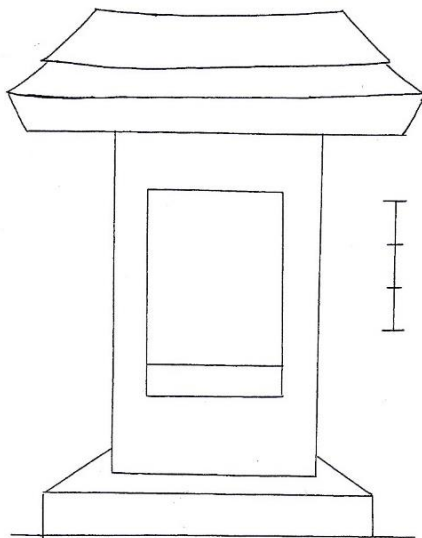


寛政2 (1790)

102^{増林}・

水神宮石塔祠

名倉家「増林四三三七」



正徳4 (1714)

101^{増林}・

向かい夫婦の奉納石塔

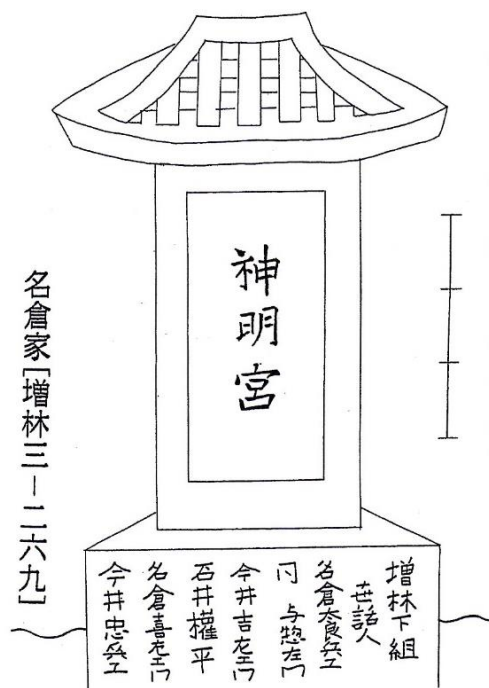
白山神社



天保9 (1838)

103^{増林}

「神明宮」文字塔



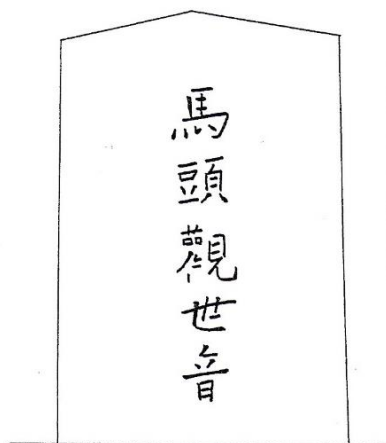
名倉家「増林三一二六九」

寛政8 (1796)

104^{増林}

「馬頭観音」文字塔

千代田橋



天保13 (1842)

105^{増林}

道標付き「水神宮」文字塔

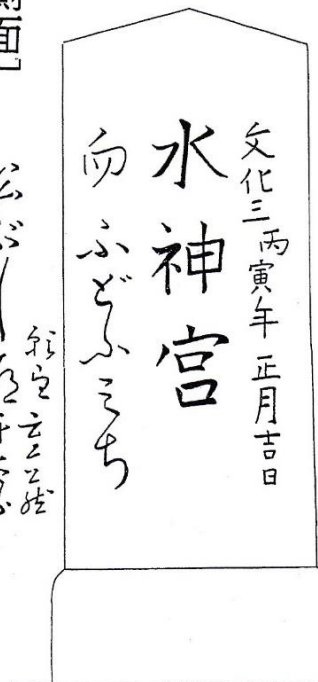
「側面」

松ぶらり

千代田橋

「側面」

松ぶらり 松ぶらり 松ぶらり



文化3 (1806)

106^{増林}

文字庚申塔

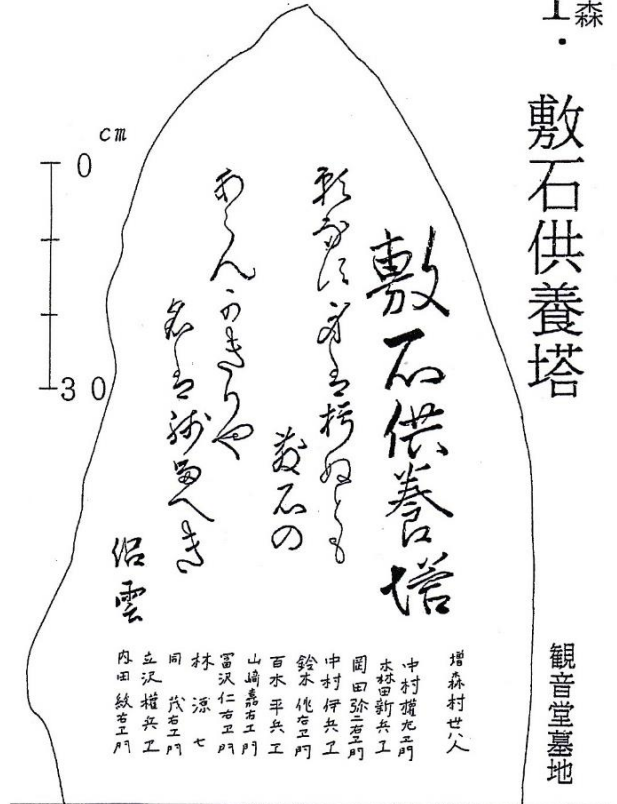
城ノ上稻荷神社



寛政12 (1800)

1. 増森

敷石供養塔



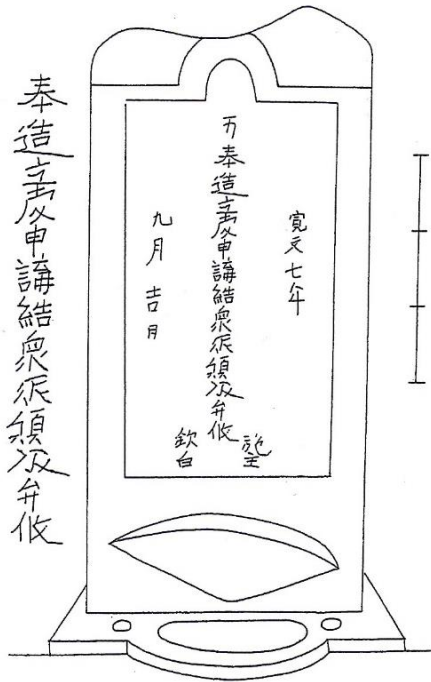
観音堂墓地

天保11 (1840)

2. 増森

板碑型文字庚申塔

河原崎の内田稻荷

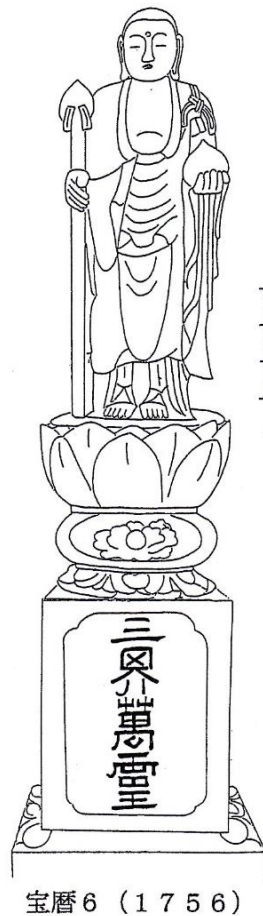


寛文7 (1667)

3. 増森

『高地蔵尊』石仏

宝正院

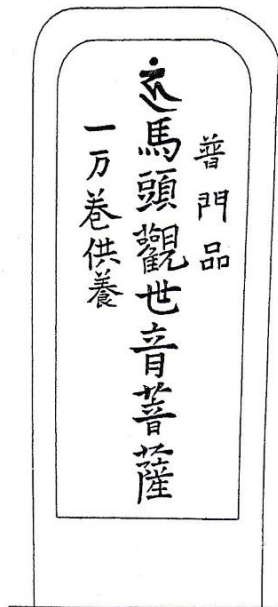


宝曆6 (1756)

4. 増森

「馬頭観音」文字塔

宝正院

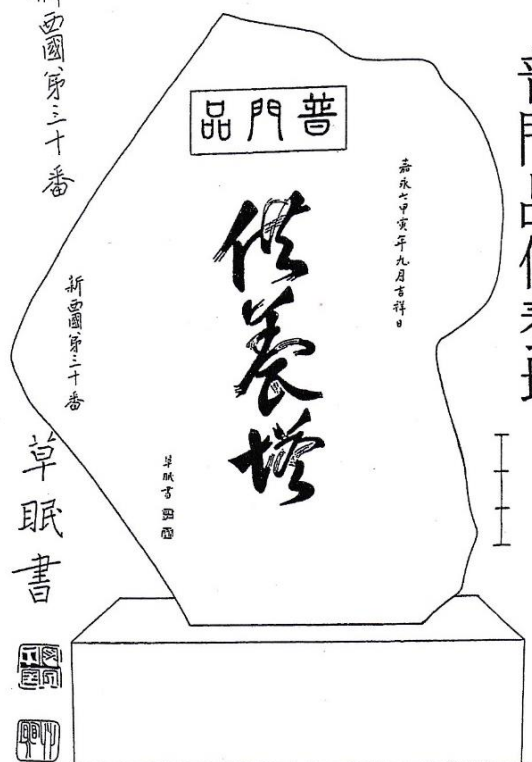


延享2 (1745)

5. 増森

普門品供養塔

嘉永七甲寅年九月吉祥日



嘉永7 (1854)

6. 増森

『大日様』石仏

「消防団増林分団第七部」路傍



寛文3 (1663)

7. 増加 増森

三界万霊塔

薬師堂

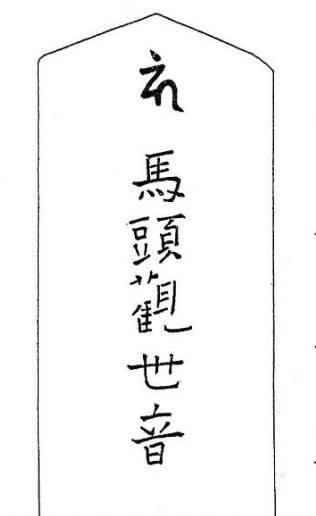


延享5 (1748)

8. 増森

「馬頭観音」文字塔

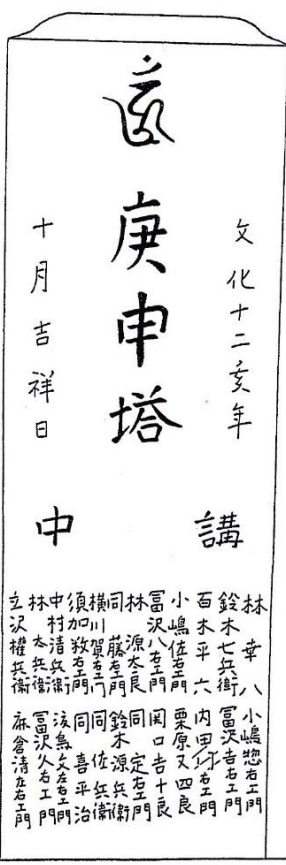
薬師堂



天保12 (1841)

13^{増森} 道標付文字庚申塔越ヶ谷

[側面] 赤岩 〓〓〓乃 [裏面] 不動 道



[側面] 摺戸己〓〓〓 薬師堂

文化12 (1815)

14^{増森} 道標付き 「成田山不動明王」文字塔 薬師堂

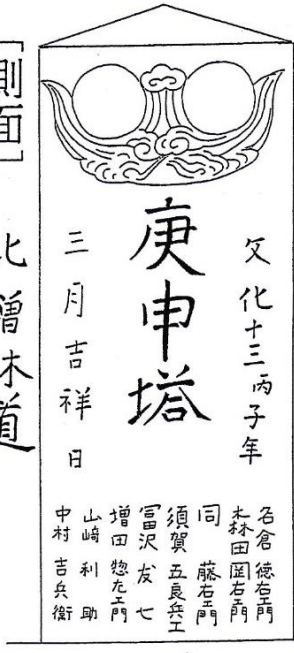
[側面] 嘉永元戊申九月廿日
西 二〓〓加や
大〓〓心〓〓
赤岩〓〓
の〓〓



嘉永元 (1848)

15^{増森} 道標付き文字庚申塔 増森神社

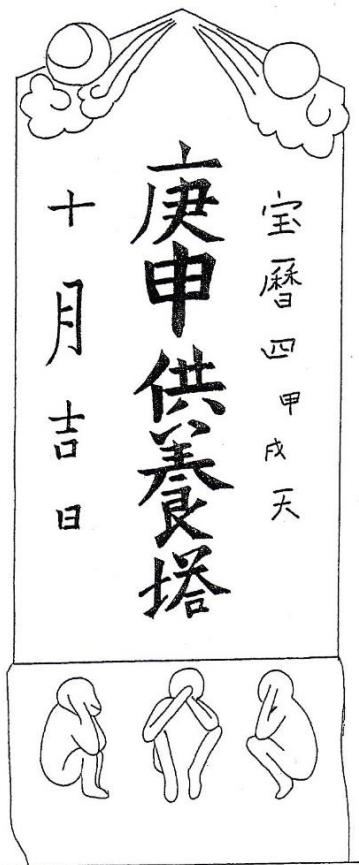
[側面] 南吉川道 増森村三町飛組世話 須賀傳衛



[側面] 北増林道 比方みちる

文化13 (1816)

16^{増森} 文字庚申塔 中村家[増森二一四七]

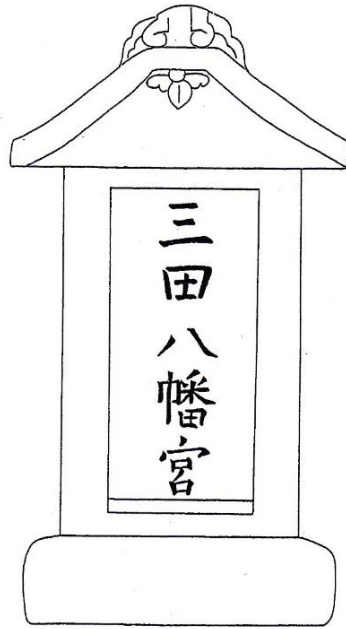


宝暦4 (1754)

17^{増森}

「三田八幡宮」文字塔

中村家「増森二一四七」



天保12 (1841)

18^{増森}

青面金剛像庚申塔

増森新田の稻荷社

惣ちん 傳ちん 坊ちん 与ちん 坊ちん 次を承 停を承 安ちん

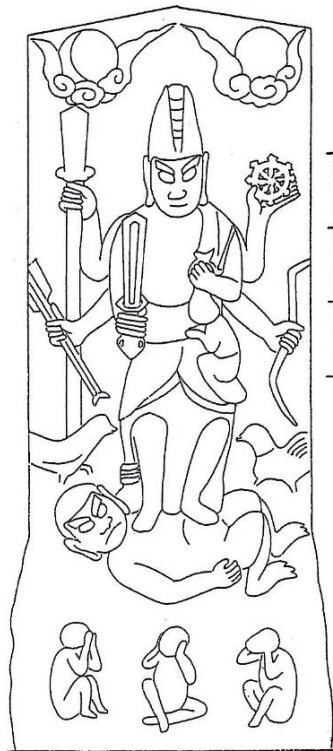


享保18 (1733)

19^{増森}

青面金剛像庚申塔

増森新田の稻荷社

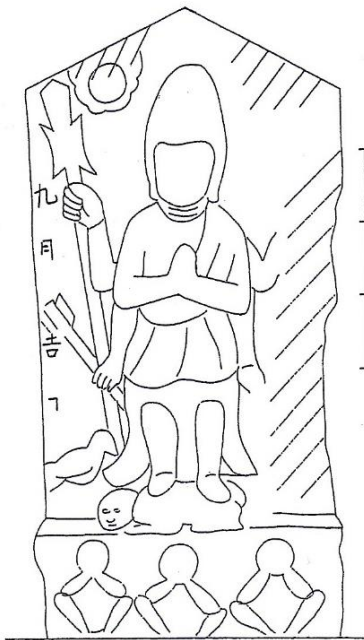


明和7 (1770)

20^{増森}

青面金剛像庚申塔

増森新田の稻荷社



21^{増森}

道標付き青面金剛像庚申塔

増森新田の稻荷社

〔側面〕

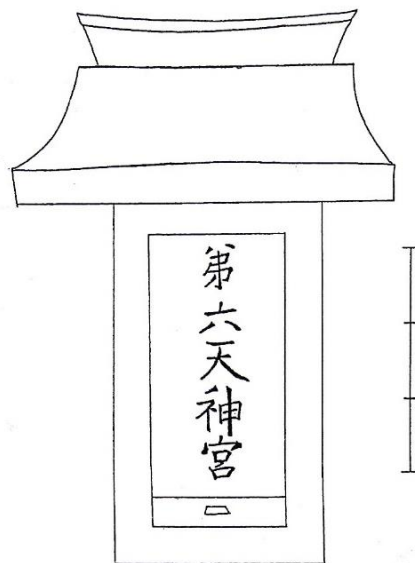
右まゝ
左まゝ
乃



寛政11 (1799)

23^{増森}

「第六天」文字塔 増森新田の稻荷社

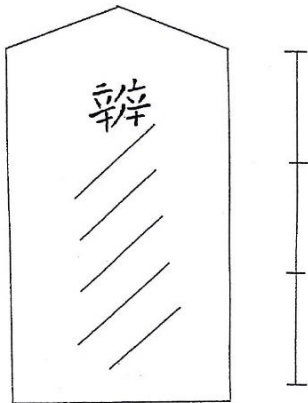


宝暦6 (1756)

22^{増森}

「弁財天」文字塔

増森新田の稻荷社

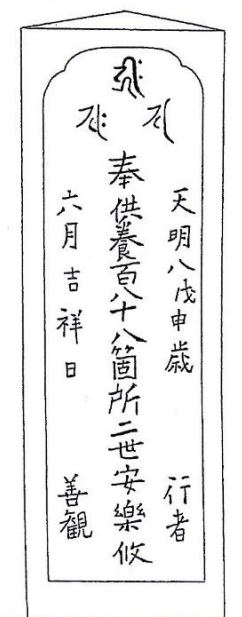


天保9 (1838)

24^{増森}

百観音八十八箇所巡礼塔

増森新田センター



天明8 (1788)

25<sup>追加
増森</sup>

光明真言供養塔

増森新田センター



寛延元戊辰天
奉建立光明真言供養佛
十一月吉禪日

寛延元年 (1748)

26<sup>追加
増森</sup>

青面金剛像庚申塔

増森新田センター

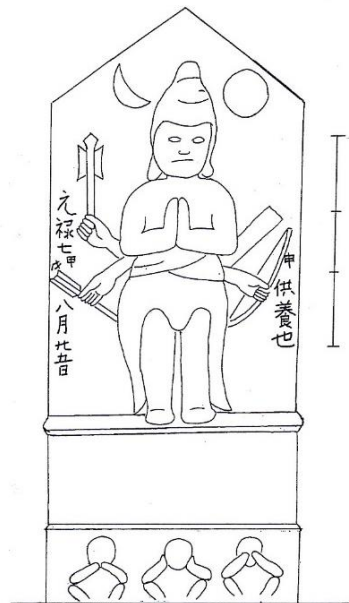


元禄13年 (1700)

27<sup>追加
増森</sup>

青面金剛像庚申塔

増森新田センター

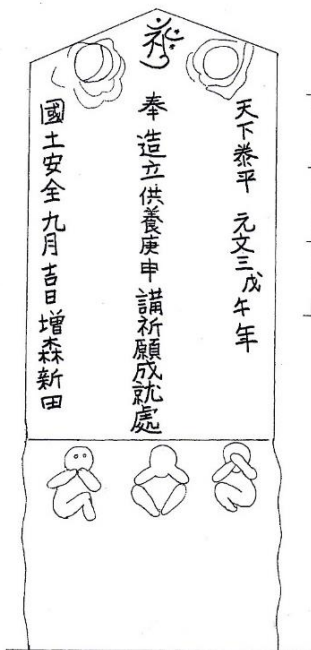


元禄7年 (1694)

28<sup>追加
増森</sup>

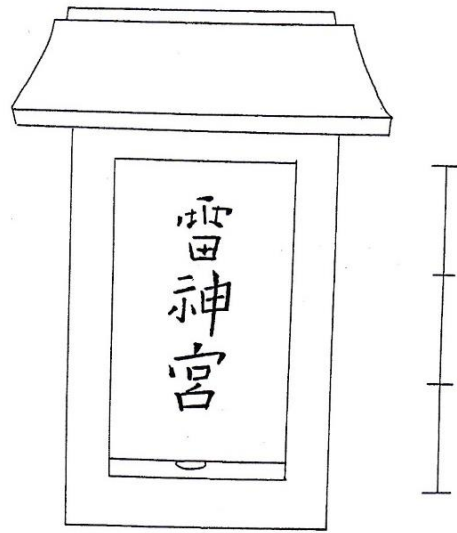
文字庚申塔

増森新田センター



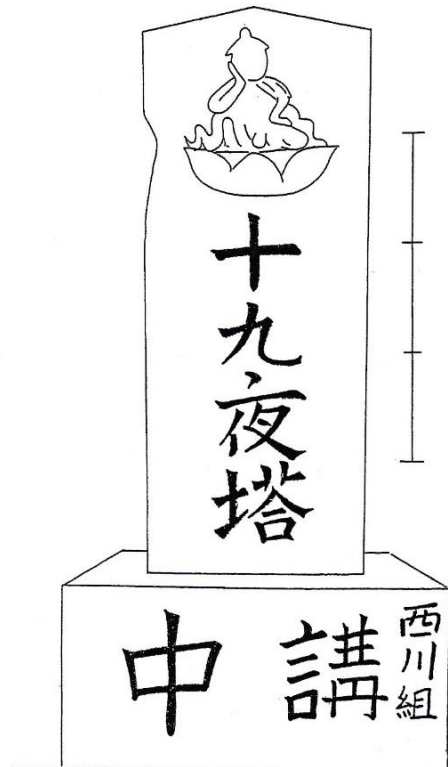
元文3年 (1738)

29^{増森}・「雷神宮」文字塔 吉田家〔増森二四八四〕



安永2 (1773)

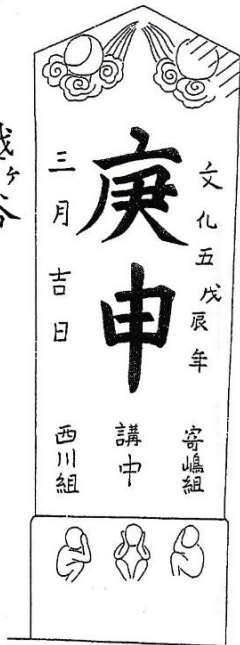
31^{増森}・十九夜念仏塔 森西川集会所



嘉永6 (1853)

30^{増森}・道標付き文字庚申塔 森西川集会所

〔側面〕 吉川道



文化5 (1808)

32^{増森}・名号塔



寛文10 (1670)

〔側面〕 越ヶ谷 大相模不動道
〔裏面〕 榎戸 渡のた乃 赤岩

在家結衆七百八
結衆寮坊主淨譽依心大徳

成蓮社轉譽上人天圓和尚

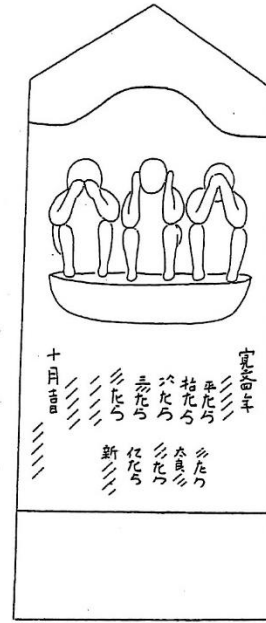
願誓頒放比丘
十誓久念比丘

森西川集会所

33 増森

三猿庚申塔

森西川集会所



寛文四年
 平九方
 拾九方
 六九方
 三九方
 新九方
 十月吉日

寛文四年
 平九方
 拾九方
 六九方
 三九方
 新九方
 十月吉日

寛文四年
 平九方
 拾九方
 六九方
 三九方
 新九方
 十月吉日

寛文4 (1664)

34 増森

青面金剛像

庚申塔

森西川集会所



新光寺
 傳た人
 平を米
 七右人
 忠右人

新光寺
 伝た人
 平を米
 七右人
 忠右人

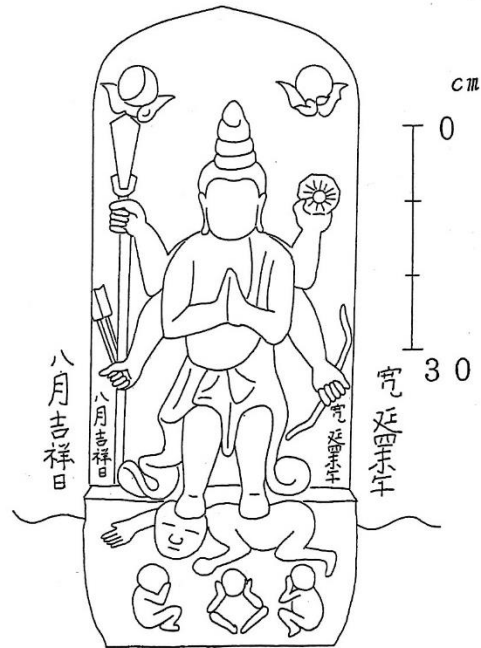
新光寺
 伝た人
 平を米
 七右人
 忠右人

貞享4 (1687)

1 中島

青面金剛像庚申塔

林家「中島一七九」

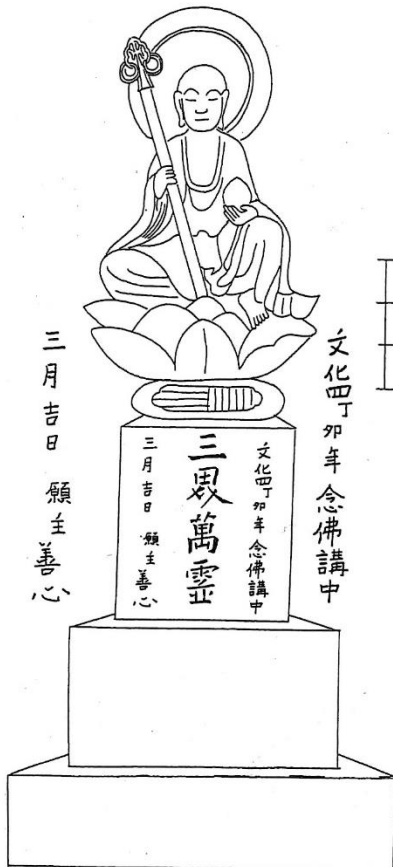


寛延4 (1751)

2 中島

地藏像付き三界万霊塔

中島神社

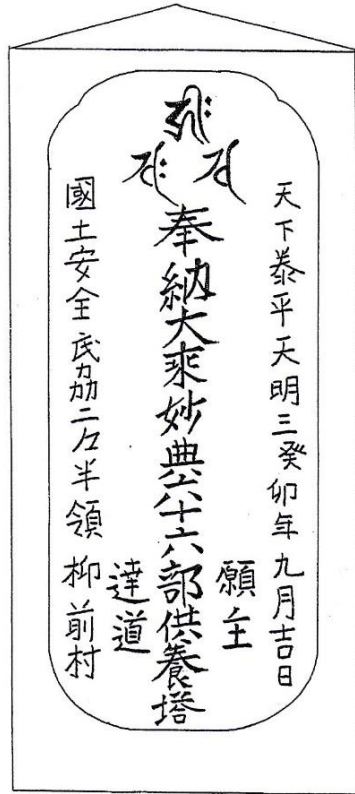


文化4 (1807)

3^{中島}

六十六部供養塔

正福寺管轄の共同墓地

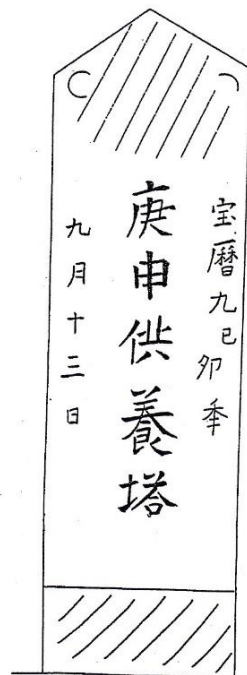


天明3 (1783)

5^{中島}

文字庚申塔

小川家「中島二一八九」



宝曆9 (1759)

4^{中島}

地藏像付き念仏塔

正福寺管轄の共同墓地



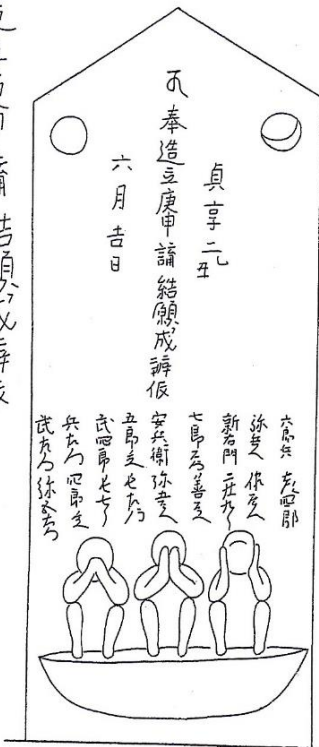
宝曆6 (1756)

6^{中島}

三猿庚申塔

奉造立庚申論結願成辨仮

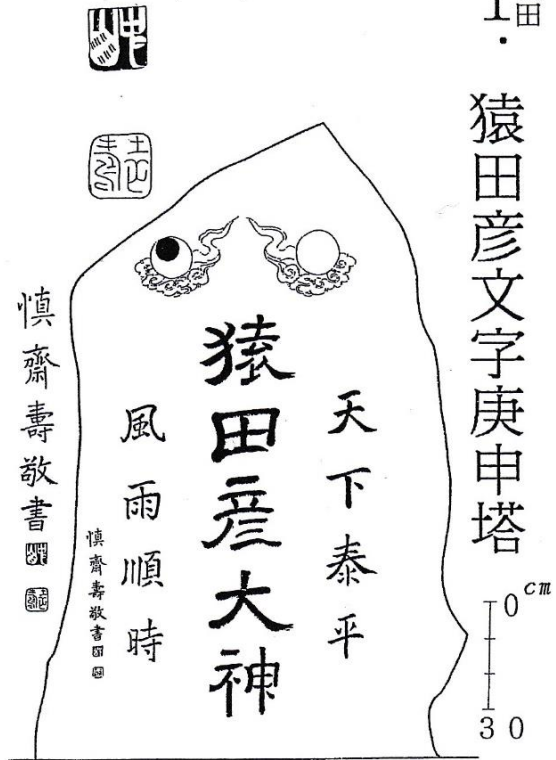
小川家「中島二一八九」



貞享2 (1685)

1. 花田

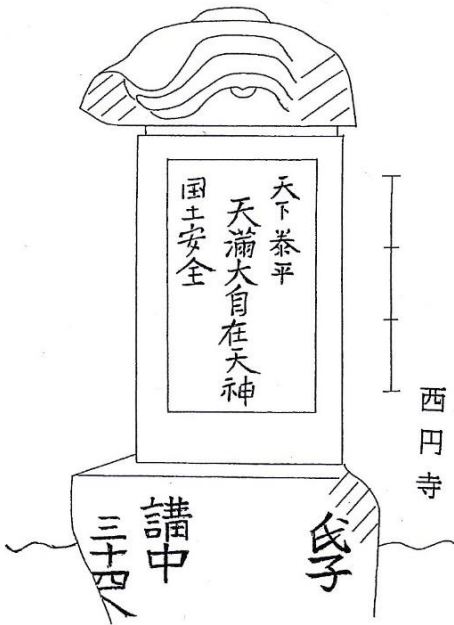
猿田彦文字庚申塔



安政5 (1858)

2. 花田

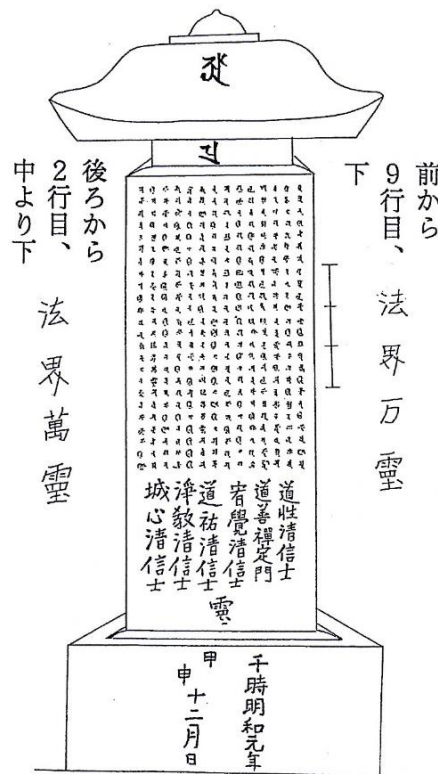
「天満大自在天神」文字塔



安政12 (1800)

3. 花田

「大随求陀羅尼」梵字文供養塔 西円寺



明和元 (1764)

4. 花田

十九夜念仏塔



文政元 (1818)

5^{花田}

十九夜念仏塔

西円寺



宝永7 (1710)

7^{花田}

阿弥陀像付き念仏塔

西円寺



寛文6 (1666)

6^{花田}

十九夜念仏塔

カ

西円寺

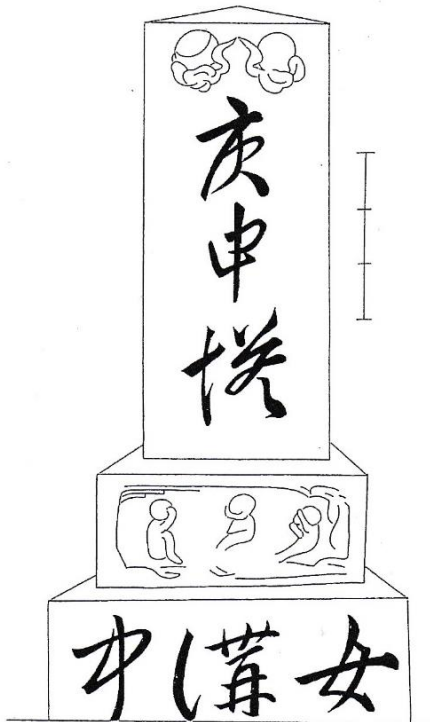


明和5 (1768)

8^{花田}

文字庚申塔

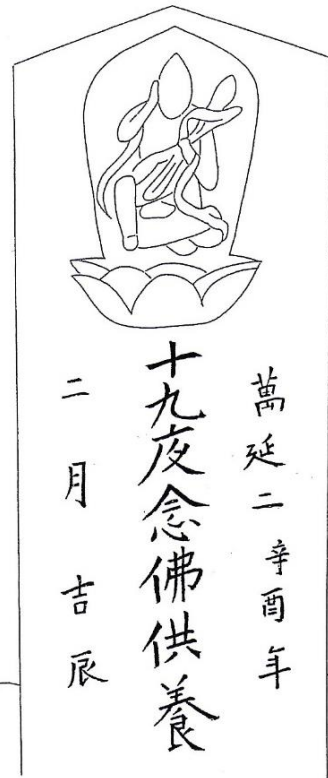
西円寺



文久3 (1863)

9^{花田}

十九夜念仏塔



西円寺

万延2 (1861)

10^{花田}

文字庚申塔

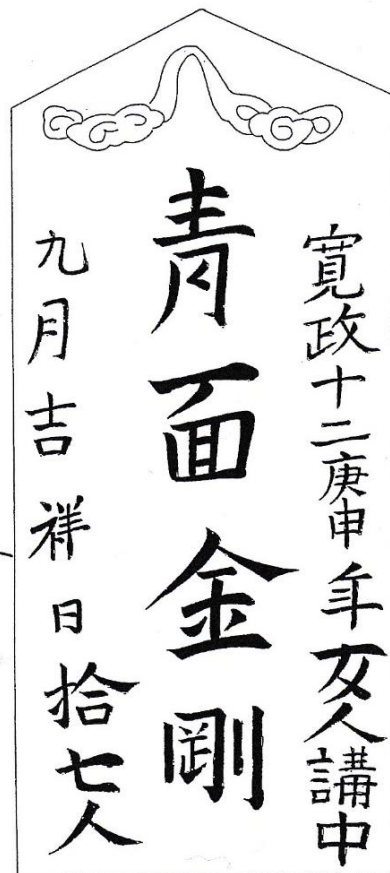


西円寺

文政7 (1824)

11^{花田}

文字庚申塔



西円寺

寛政12 (1800)

12^{花田}

文字庚申塔



西円寺

天保14 (1843)

13^{花田}

道標付き文字庚申塔

西円寺



寛延3 (1750)

15^{花田}

「淡島明神」文字塔

山本家「花田四一三一」

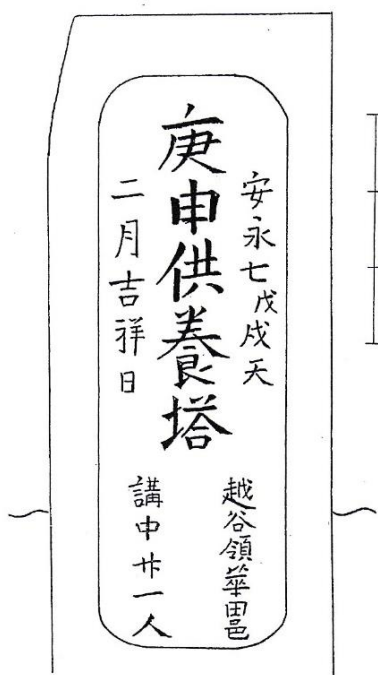


寛政5 (1793)

14^{花田}

文字庚申塔

西円寺



安永7 (1778)

16^{花田}

青面金剛像庚申塔

佐藤家「花田四一三〇一三」

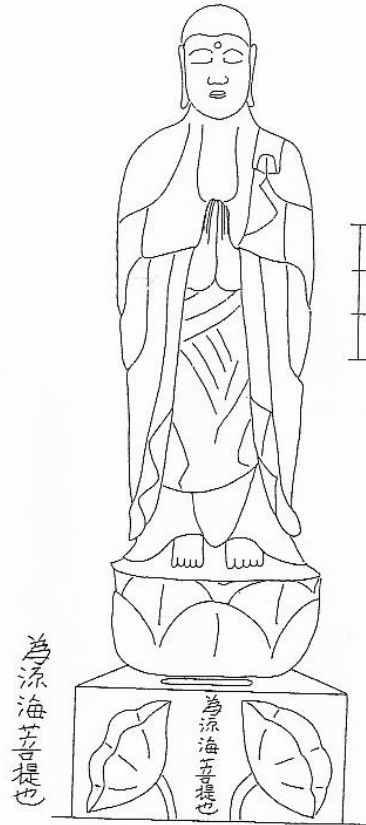


安永3 (1774)

17^{花田}

『花田の地蔵』石仏

佐藤家「花田四一二〇一三三」



承応4 (1655)

18^{花田}

青面金剛像庚申塔

佐藤家「花田四一二〇一三三」

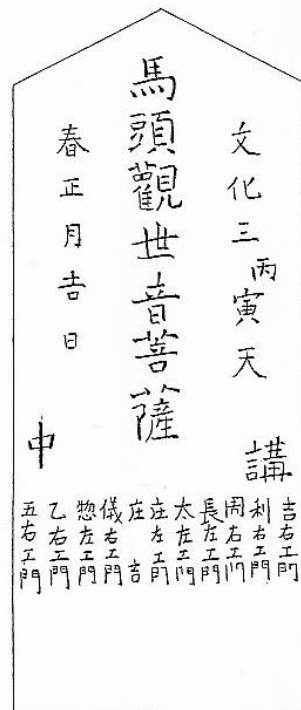


正徳5 (1715)

19^{花田}

「馬頭観音」文字塔

佐藤家「花田四一二〇一三三」



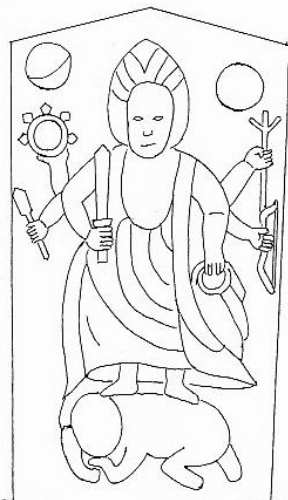
文化3 (1806)

35^{追加}
増森

青面金剛像庚申塔

宝正院

無縁仏群の最前列

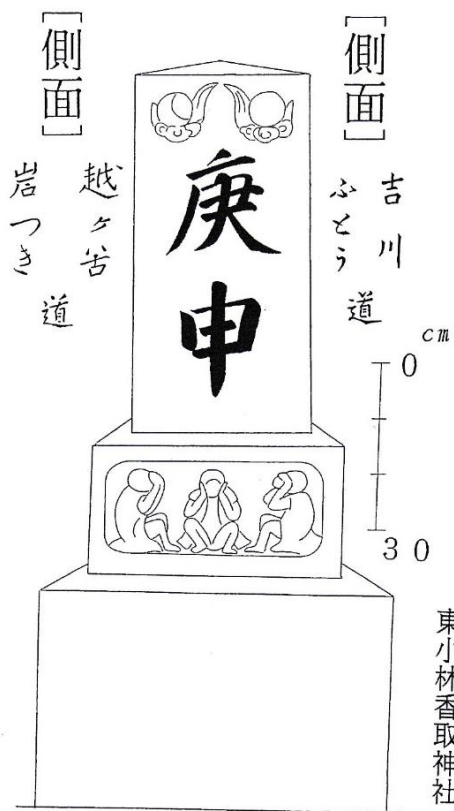


年代不詳

【増森の宝正院の追加】

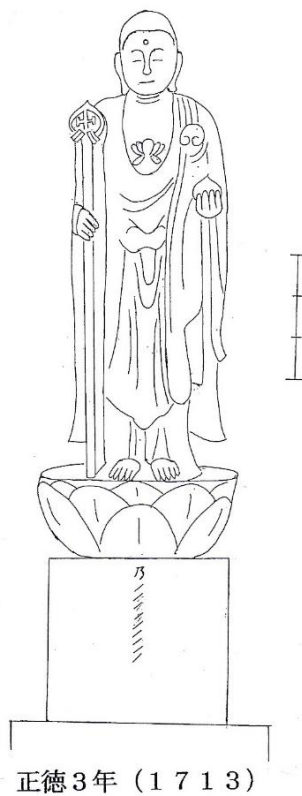
※無縁仏群に追加された駒型の石仏である。
南向きで、高さは小、年号は側面を含めどこにも刻まれていない。

1. ^{小林}道標付き文字庚申塔



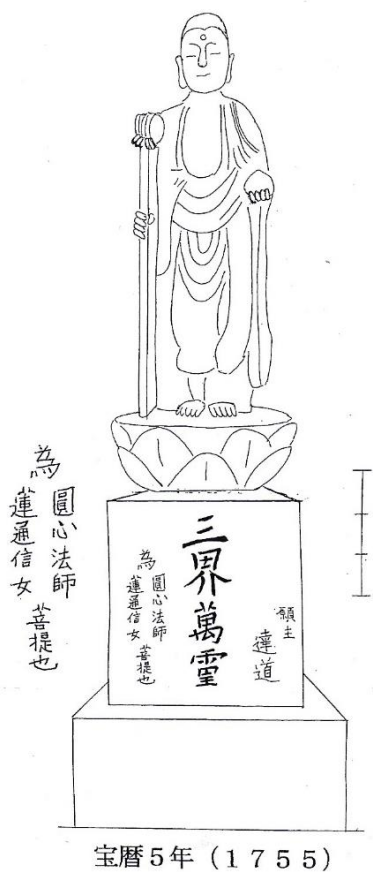
文化11 (1814)

3. ^{追加}地蔵像付き六十六部供養塔



正徳3年 (1713)

2. ^{追加}地蔵像付き三界萬霊塔



宝暦5年 (1755)

4. ^{追加}地蔵像付き念仏塔



寛文2年 (1662)

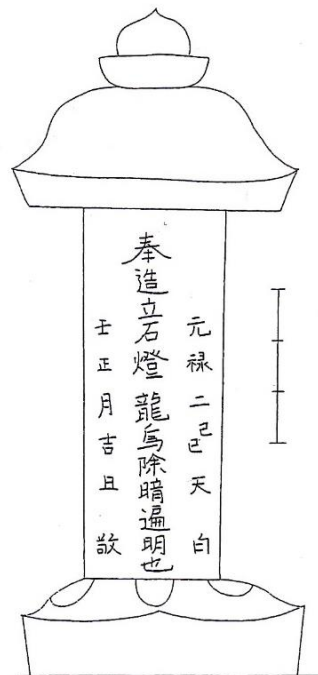
奉造立地蔵菩薩念佛講人敷二世安樂処諸主妙蓮社尼

東福寺

5. 小林

石燈籠供養塔

東福寺



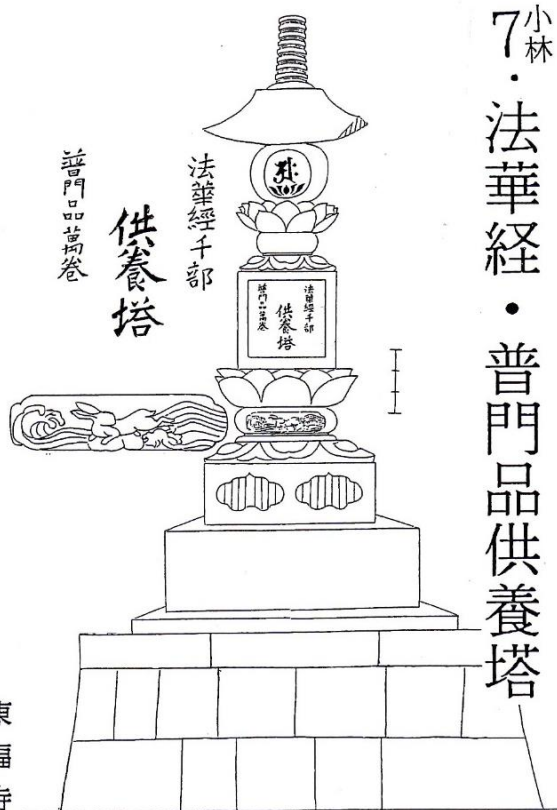
元禄2 (1689)

奉造立石燈籠
 元禄二己巳天白
 龍鳥除暗遍明也
 壬正月吉且 敬

7. 小林

法華經・普門品供養塔

東福寺



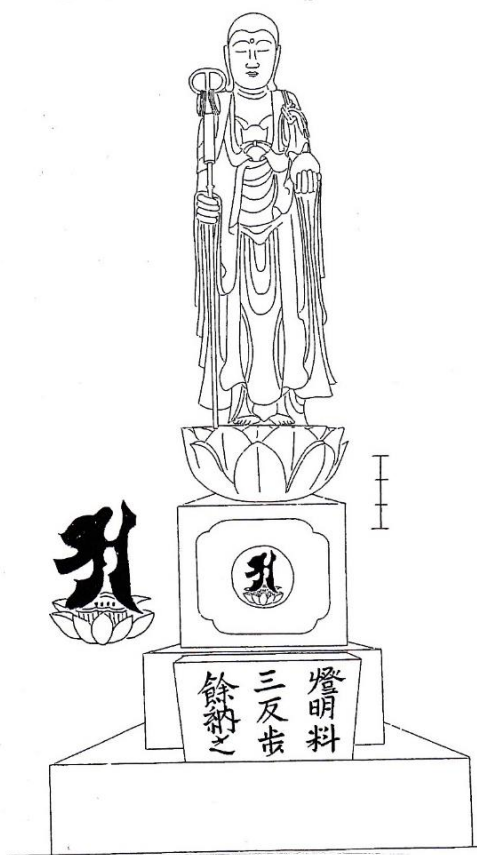
文化12 (1815)

法華經千部
 普門品
 供養塔

6. 小林

地藏像付き三界萬靈塔

東福寺



享保12 (1727)

燈明料
 三反歩
 餘納之

8. 小林

十九夜念仏塔

東福寺



享保7 (1722)

施主五拾人
 十九夜女念佛講中
 奉造之
 享保七壬
 十月十九日

9^{小林}

観音像付き念仏塔



東福寺

延宝元 (1673)

10^{小林}

青面金剛像庚申塔

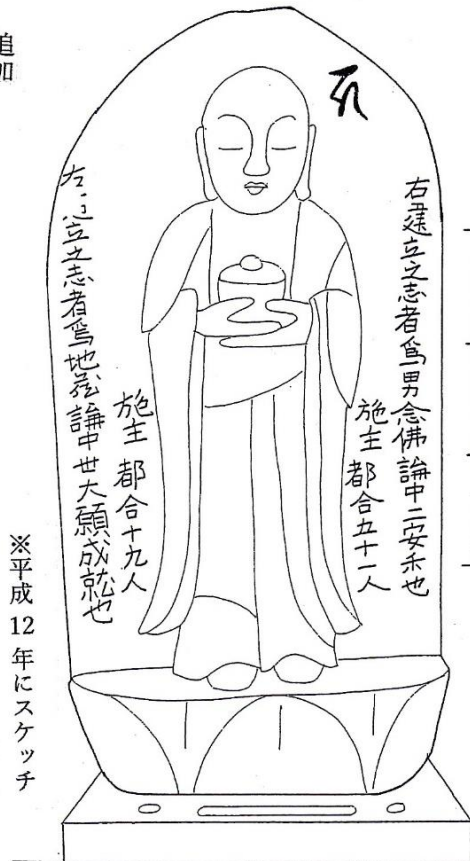


東福寺

享保5 (1720)

11^{小林}

地藏像付き念仏塔



東福寺

※平成12年にスケッチ

12^{小林追加}

地藏像付き供養塔

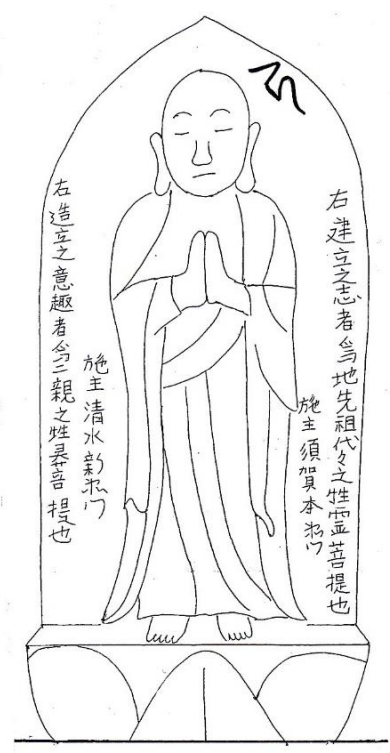


東福寺

享保3年 (1718)

13小林^{追加}

地蔵像付き供養塔



東福寺

14小林^{追加}

地蔵像付き供養塔



東福寺

享保3年(1718)

15小林

地蔵像付き念仏塔



東福寺

※平成12年にスケッチ

16小林^{追加}

地蔵像付き供養塔



東福寺

享保3年(1718)

享保3年(1718)

17^{小林}

大日如来像付き光明真言塔

東福寺

奉造立供養大日如来

光明真言百万遍二世天願成九



宝永8 (1711)

19^{小林}

十九夜念仏塔

力

東福寺

念佛講中

天明四辰二月吉日



天明4 (1784)

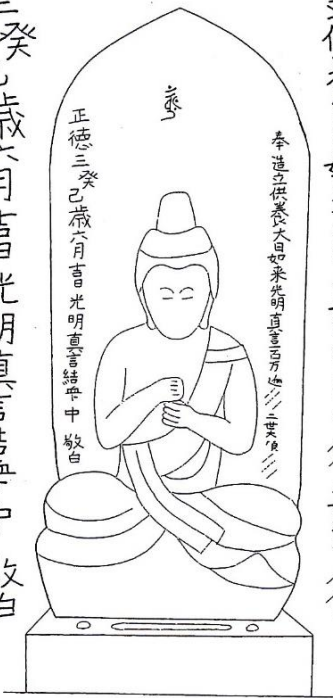
18^{小林}

大日如来像付き光明真言塔

東福寺

奉造立供養大日如来光明真言百万遍二世天願成九

正徳三癸巳歳六月吉日光明真言結衆中敬白



正徳3 (1713)

20^{追加 小林}

地藏像付き供養塔

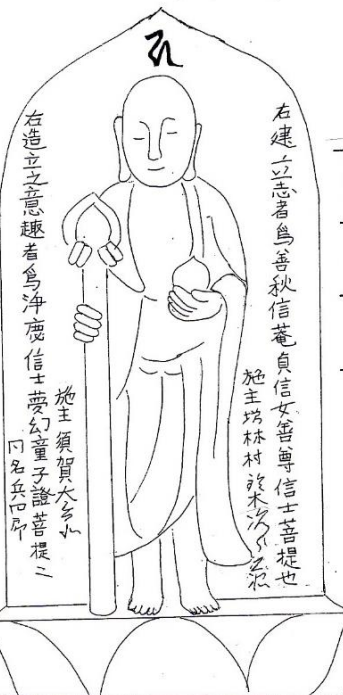
東福寺

右建立志者爲善秋信菴負信女善尊信士菩提也

施主坊林村致木次子之松

右建立志者爲善秋信菴負信女善尊信士菩提也

施主坊林村致木次子之松

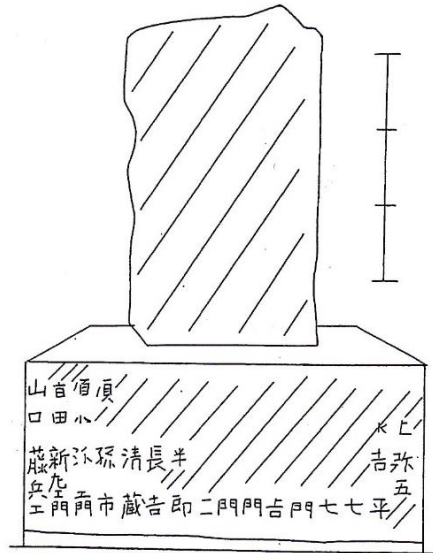


右造立之意趣者爲淨慶信士夢幻童子證菩提二
施主須賀大寺山
同名兵四郎

21^{小林}

道標付き『庚申様』石仏

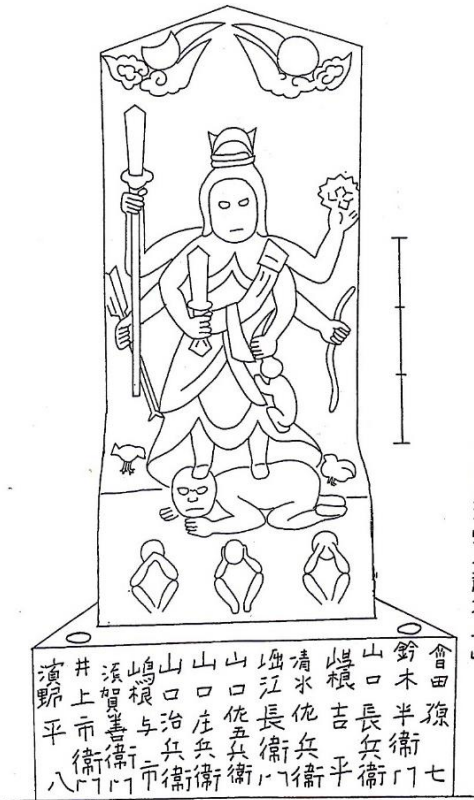
会田家「東越谷二」



22^{小林}

青面金剛像庚申塔

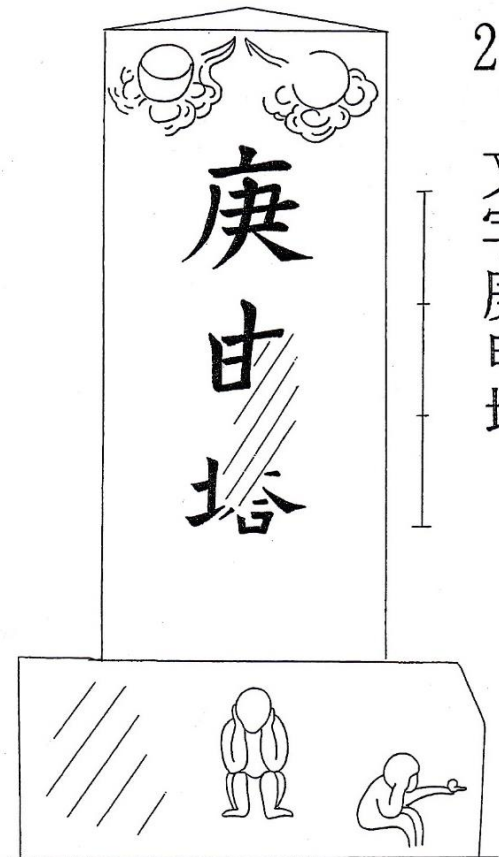
山田家「東越谷一」



天明4 (1784)

23^{小林}

文字庚申塔 会田家「東越谷三」

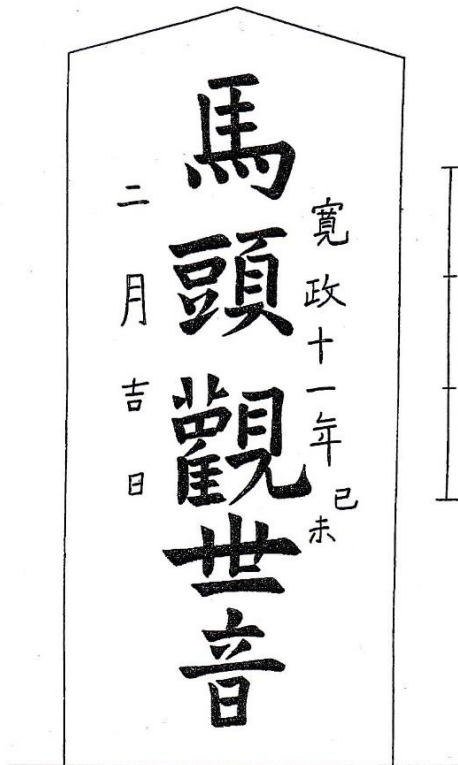


嘉永2 (1849)

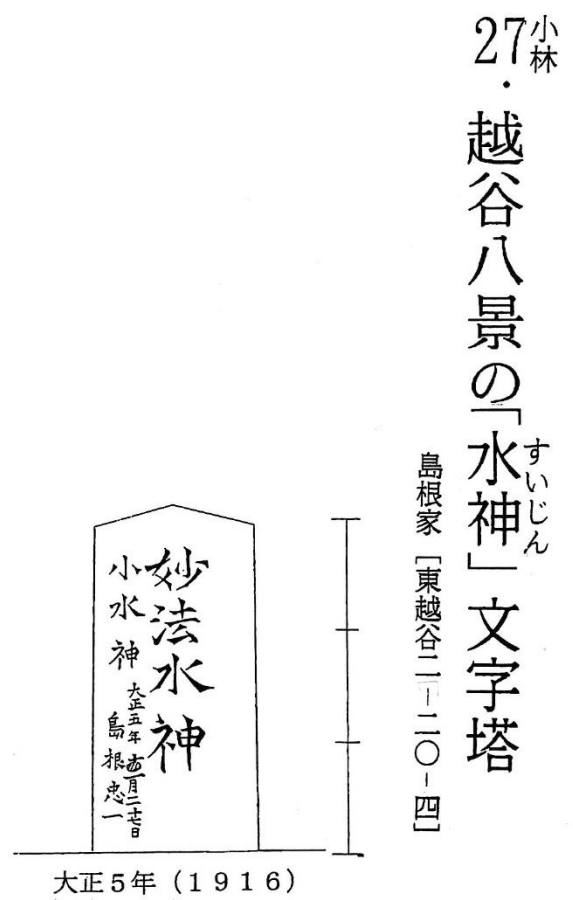
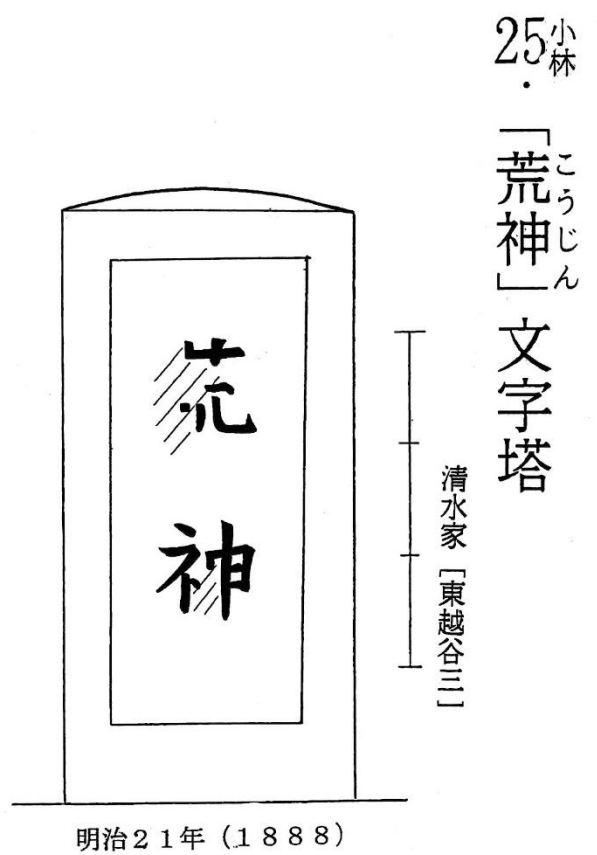
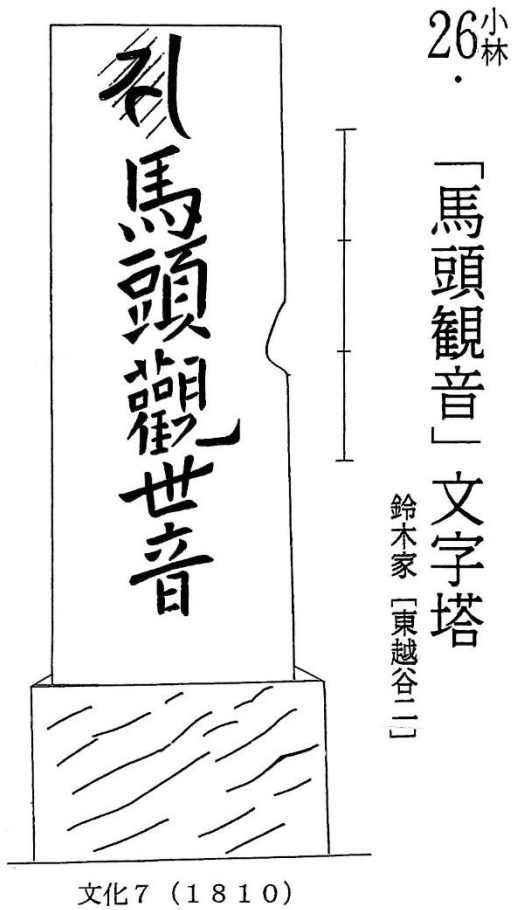
24

「馬頭観音」文字塔

清水家「東越谷三」



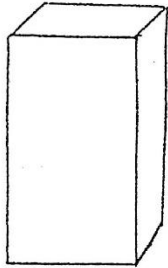
寛政11 (1799)



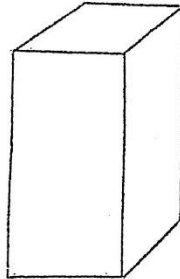
塔型分類

当資料では、石塔の型式の分類を以下のようにする。

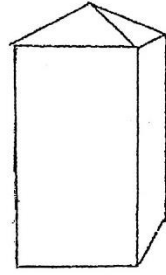
かくがた
角型



かくちゅうがた
角柱型

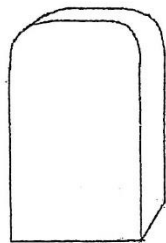


とうぶ
やまじょう
山状角型・角柱型



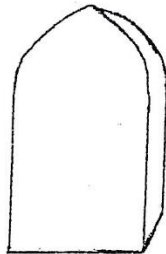
(せんとう)
尖頭角型

じょうぶ
上部
すみまるかくがた
隅丸角型

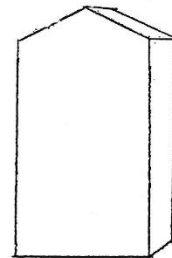


(えび)
楕型

ふながた
舟型

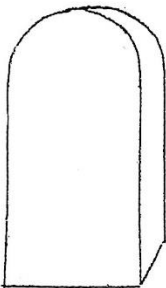


こまがた
駒型

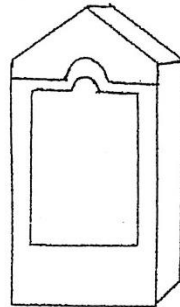


※石仏石塔の図版は、文字や像のスケッチは正確さを重視、回りの輪郭は塔型が分かるようにアレンジして描いた。

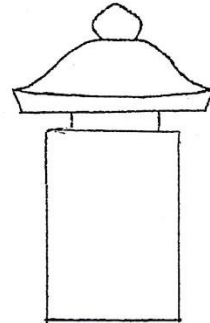
じょうぶまるがた
上部丸型



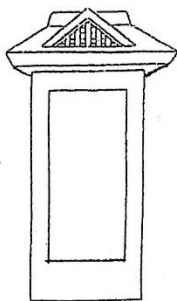
いたびがた
板碑型



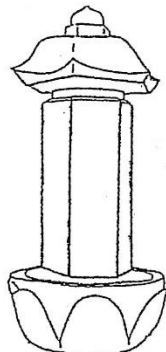
かさつきかくがた
笠付角型



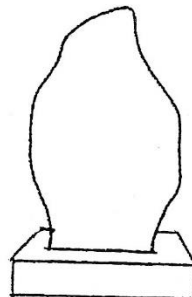
ほこらがた
祠型



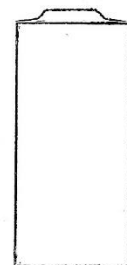
ろくめんせきどう
六面石幢



しぜんせき
自然石



きゅうじょう
頭部丘状角型



また、石塔の高さの目安を以下のようにする。

「低」は ~50cm

「中」は 50cm~120cm

「高」は 120cm~270cm

「超高」は 270cm~

旧増林村の石仏

(1) 増林前波の水神宮

かつては七月七日の夜宮と呼ばれる夜祭りや露天商も十程みられ賑わった。
1. 道標付き普門品供養塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 増林・前波(『増林』)の水神宮
石塔型式 頭部山状角型(北向き・高さは中)
年号 文化十二年(一八一五)

〔左側面〕
ひがし こやすくわんをんみち

〔正面〕

文化 十二乙亥 全波組

普門 口品 供養

中 講

※この石塔は、本来は水神社
そばの丁字路の角(現在の
「ヘアーサロンナカノ」の
地点にあつて、南向きに設置
されていたと思われる。

二月 吉祥 日

〔右側面〕
みなみ こしがや江戸

きた のださしま みち

願 主要 心
世話人 源右工門

※左側面に刻まれた道標には、「ひがし こやすくわんをんみち」(東、
子安観音道)となっている。
林泉寺には、現在でも観音堂(大慈殿)に子安観音を安置している。
かつては「子安観音」の寺院として大変有名であったことがわかる。

2. 敷石供養塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)
所在地 増林・前波の水神宮
石塔型式 頭部山状角型(北向き・高さは低)

年号 嘉永六年(一八五三)

〔左側面〕

セ □良兵衛

ハ 大助

人 平六

〔正面〕

嘉永六 癸 丑 癸願主 (良)

半五

敷石

(奇) □

二月 吉 □

川岸船持中 ※「敷石寄付」カ
大吉巳之七
川崎仲吉工門

〔右側面〕

前波組氏 □ 中

粕カベ新町石工實 □

3. 道標付き成田山供養塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)
所在地 増林・前波の水神宮

石塔型式 角型(北向き・高さは中)
年号 慶応三年(一八六七)

〔左側面〕

右 □ □ や二十丁

左の だ 二里

〔正面〕

増林 □ 張 是 〇 丁

世 三郎右衛門

成田山

話 儀右衛門

人 弥兵衛

〔右側面〕

慶応 □ □ 年

4. 普門品供養塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)
所在地 増林・前波の水神宮

石塔型式 自然石(東向き・高さは高)
年号 嘉永元年(一八四八)

〔正面〕

〔台石〕
戸張佐治右工門
平野源八
岡安又左衛門
平野権左工門
中山重三郎
同 儀右衛門
中笠平八
岡安新五右工門
平野吉五郎

普門 口品 供養

鑑章斎于時謹書

〔裏面〕

嘉永元 戊申 年 六月 建焉

増林邑前波組講中

※焉之

◎ 弘法大師像の石の祠堂

普門品供養塔そばにある石の祠の前に「太子講」と書かれた木札が置かれ、中に太子講が奉納した弘法大師座像の石像(高さ31cm)が安置されている。祠の中をのぞいてみると弘法大師座像の脇に文字が書かれた扇の木板の掛軸のようなものが置かれている。『越谷ふるさと散歩(下)』(本間清利)では「祠堂の外に掲げられていたものであろう。」としている。掛軸には「御遠忌 第十一番水神宮 御詠歌 くもはれて またくもかゝる すいじんの みづにすむのもの のちのよのため 昭和九年 七月廿一日」との歌が墨で記されている。昭和九年の弘法大師千百年遠忌の奉納である。

(2) 定使野橋そば水神宮

この水神宮は増林村の北東の端にある定使野の地に祭られている。もとは個人の敷地内に祭られていたものである。

5. 百八十八箇所巡礼塔(『越谷市金石資料集』諸国廻国二番)

所在地 増林・定使野橋そば定使野公園内の水神宮
石塔型式 頭部山状角柱型(南々東向き・高さは中)
年 号 寛政五年(一七九三)

〔左側面〕

越後国三嶋郡出雲崎

願主市川惣右衛門

〔正面〕

天下泰平

(梵字ア)奉納 秩父坂東 順礼供養宝塔
西国四国 国家安全

〔右側面〕

寛政五 癸 丑 天四月吉日

6. 地藏菩薩像付き念仏供養塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)
所在地 増林・定使野橋そば定使野公園内の水神宮
石塔型式 特殊型(南々東向き・高さは中)
年 号 宝永八年(一七二一)

〔正面〕

奉造立念佛同行三十二人信心 施主

(地) 蔵 菩薩 立 像)

宝曆八 〇 天正月吉日 敬白

(卯)

7. 宝篋印塔

所在地 増林・定使野橋そば水神宮
石塔型式 宝篋印塔(南南東向き・高さは中)
年 号 寛永十三年(一六三六)

〔正面(塔身)〕 「白石(基礎)」

寛永十三年

(不明)

内海行人

※各地を信仰のために旅する行者がこの地で亡くなった墓塔であろうか。

8. 「水神宮」文字塔

所在地 増林・定使野橋そば水神宮
石塔型式 駒型(南南東向き・高さは中)
年 号 嘉永二年(一八四九)

〔左側面〕

嘉永二酉 〇

〔正面〕

〇 神 宮 ※「水神宮」カ

〔右側面〕

六月吉祥 〇 ※〇は「目」

※花田二二七の戸張喜藏氏からの水神宮に関する聞き取り調査によると、次の通りである。

本来の水神宮(現在の水神宮の南に30m先にあった)の地に、古くは小沢家が住んでいてその敷地内に祀っていた。北には逆川が流れていた。小沢家が現在の花田二二七に移転するとしばらく空き地となっていた。

その後、大正十二年の関東大震災の翌年あたりに増林の前波の水神社そばに住んでいた戸張喜藏氏の父がこの空き地(旧住所・増林四六九)に移転してきた。裏(北側)には逆川が流れ、旧・定使野橋(現在の定使野橋とは別)の土橋がその逆さ川に架かっていたが、ここが公園化することによって、逆川の流路が変わり土橋は消滅する。戸張家は、現在の花田二二七に移転する。

その水神宮は、逆川を改修する前の本来の逆川筋の南側にあったものが、逆川の流路筋が北寄りに移り、公園化することによって大きく変貌し、水神宮は元あった場所から北に30m先の現在地に移った。つまり移転された水神宮のすぐ南側に本来の逆川が流れていたのである。

水神宮の行事は七月七日の「夜宮(よみや)」と呼ばれる夜祭りがあり、水神宮に二つの提灯を掲げるのはかつては花田二一七一の小沢家で、翌日には「御神酒(ごじんしゅ)」「(お神酒)が地元(お神酒)の定使野(じょうつかいの)の有志によって行なわれていた。場所はかつては小沢家であったが、その後は花田二丁目自治会館となる。

(33) 定使野共同墓地

現在は宮野橋の新方川下流六十メートル先の右岸にあるが、もとは宮野橋の上流六十メートル先の拡幅された川の中程から右岸の岸辺あたりに「宝珠庵」と呼ばれた寺院跡地であった。昭和五十九年から六十年にかけて現在地に移転したのである。

9. 道標付き三界万霊塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)
所在地 増林・定使野共同墓地路傍
石塔型式 駒型(東向き・高さは中)
年号 寛延四年(一七五二)

[左側面]

ふしこう道

[正面]

右こしがや道

願主増林村懸誉放山慈光尼

(一仏) 三界萬霊有無縁等

寛延四年 未 天三月吉祥日

左さしま道

[右側面]

のだほうし花道

※不動道(大相模の不動尊に参詣する道)、越ヶ谷道、猿島道、野田・宝珠花道を示す道しるべを兼ねた石塔で、元は猿島道(現在の野田街道)にあった。現在の「花田交差点」の北東角地である。

10. 青面金剛像庚申塔(『越谷市金石資料集』庚申塔一四七番)
所在地 増林・定使野共同墓地路傍
石塔型式 駒型(東向き・高さは中)
年号 安永四年(一七七五)

[左側面]
奉建立庚申供養

[正面]

(日月)青面金剛像(二鵝)(三猿)

[右側面]

安永四乙 未 正月吉日

定使野村 講中
※定使野は増林村の一部であるが、かつては単独の村であったことが裏付けられる貴重な石仏である。

11. 馬頭観音文字塔(『越谷市金石資料集』馬頭三〇番)
所在地 増林・定使野共同墓地
石塔型式 駒型(西向き・高さは低)
年号 嘉永六年(一八五三)

[正面]

嘉永六丑五月吉日

馬頭観音世立

定使野

12. 観音像付き普門品供養塔(『越谷市金石資料集』普門品五番)
所在地 増林・定使野共同墓地
石塔型式 浮彫仏像付角柱型(西向き・高さは高)
年号 天明九年(一七八九)

[正面]

[台石]
願主

天明九己 酉 歳増林定使野

(観音菩薩座像) 奉読誦普門品二万巻供養

二月吉祥日 講中二十人

門助

[右側面]

文化六年

外 二万巻供養

巳 九月吉日

13. 筆子塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)
所在地 増林・定使野共同墓地(中村家墓所)
石塔型式 笠付角型(西向き・高さは中)
年号 不詳

〔左側面〕

當所 小沢門 助

會田八郎兵エ

滝田和 吉

横川半四郎

平野藤 吉

島田与 市

中村又 市

赤岩 山崎与兵衛

松伏 鈴木又右衛門

粕壁 丸八いつ女

前波 中山儀右エ門

升岡庄 蔵

〔台石〕

筆

子

中

彌十郎村

嶋田平録

白鳥辰五郎

澤初太郎

同 柳右衛門

同 國次郎

染谷利 助

新戸亀次郎

松沢源太郎

尾ヶ井長左エ門

同 平左エ門

同 音次郎

高畑

花田

彌十郎村

嶋田平録

白鳥辰五郎

澤初太郎

同 柳右衛門

同 國次郎

染谷利 助

新戸亀次郎

松沢源太郎

尾ヶ井長左エ門

同 平左エ門

同 音次郎

高畑

花田

彌十郎村

嶋田平録

白鳥辰五郎

澤初太郎

同 柳右衛門

同 國次郎

染谷利 助

新戸亀次郎

〔台石〕

筆

子

中

彌十郎

石井松五郎

尾ヶ井岩蔵

島田定 七

鈴木市五郎

須賀茂兵エ

尾ヶ井熊次郎

同 与市

高橋庄太郎

同 □蔵

同 久次郎

清水忠兵衛

加藤市太郎

岡安磯五郎

同 幸次郎

松沢孫左エ門

神明下

大沢

前波

大吉

野島幸次郎

増森くら女

原右エ門

□次郎

直次郎

當所

當所

當所

當所

當所

當所

當所

當所

當所

當所

當所

〔最下段の台石の右側面〕

彌十郎

石井松五郎

尾ヶ井岩蔵

島田定 七

鈴木市五郎

須賀茂兵エ

尾ヶ井熊次郎

同 与市

高橋庄太郎

同 □蔵

同 久次郎

清水忠兵衛

加藤市太郎

岡安磯五郎

同 幸次郎

松沢孫左エ門

神明下

大沢

前波

大吉

野島幸次郎

増森くら女

原右エ門

□次郎

直次郎

當所

當所

當所

當所

當所

當所

當所

當所

當所

當所

當所

當所

當所

當所

14. 筆子塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 増林・定使野共同墓地 (中村家墓所)

石塔型式 丘状頭角型 (南向き・高さは中)

年 号 明治元年 (一八六八)

〔左側面〕

法印保榮者下野國足利郡山下郷普門院任職中島俊長二〇

也弘化元年來於此地而襲於梅香院二十八世矣嘉永二〇〇

歴於大倭國箕面葛城大峯諸山樹下石上〇〇艱苦以究頭密

法同時上京洛遂被許淺黄色法服歸郷而後以餘〇〇國詩自

稱梅園香守吟詠不尠矣當時入門而受學業者〇百有餘人豈

可不謂盛乎于時明治元年四月五日〇享年五十有七歲也

〔正面〕

明治元戊辰年四月五日

前准年行事無怨院保榮法印

運 壽 妙 順 大 姉

〔右側面〕

むさしのの ちくさに宿る

月かけも

はかなくきゆる

風のしら露

〔正面〕

15. 光明真言曼荼羅塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 増林・定使野共同墓地

石塔型式 舟型 (南向き・高さは中)

年 号 不詳

〔正面〕

(梵字「カーン」) 嚴説清信士

(梵字「ウン」) 嚴智清信女

※カーンは不動明王、ウンは降三世明王

※中村家の屋号は「梅光院」。梅光院は宮野橋よ

り千間堀の上流百メートル先の左岸にあった

寺院。江戸時代はこの寺院と宝珠院は陸続き、

千間堀は梅光院の東側を迂回して流れていた。

16. 六十六部供養塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 増林・定使野共同墓地

石塔型式 円柱型(南向き・高さは高)

年号 天保四年(一八三三)

〔左側面〕

清祐 禪定尼 元禄十一寅年十一月 一六九八

泰嶽 春芳信士 文政二卯二月二十一日 一八一九

霜岩 智白信女 文政二酉十二月初日

回念 本向信士 寛政六寅三月七日 一七九四

道雲 自照信士 明和九子八月十二日 一七七二

要山 道機沙彌 文政八乙酉天十月八日 一八二五

祖山 妙眼比丘尼 天保四巳十月八日 一八三三

〔正面〕

六十六部供養塔

〔右側面〕

先祖代々一切精霊

妙開 信女 享保廿卯七月十日 一七三五

淨室 妙光信女 文化十酉四月廿二日 一八一三

幻夢 童子 寛政九巳十月十二日 一七九七

道學 智照童子 文化十酉九月三日 一八一三

(4) 島田家(花田二一三三七)稲荷社

17. 百箇所巡礼塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 花田(大字増林字定使野)・島田家(花田二一三三七)稲荷社

石塔型式 笠付き角柱型(東向き・高さは中)

年号 弘化二年(一八四五)

〔左側面〕

弘化二乙巳三月吉日

〔正面〕

施主

文内

秩父

奉順禮西国百番供養塔

坂東

源治良

田

〔台石〕

35.9110、139.7979

※こここ定使野の島田家を含む産業道路(越谷八潮線)の東西の広い地

(ヨークマートやダイレックス)には、このあたりの土豪である島田

帯刀(たてわき)の「帯刀屋敷」と呼ばれた陣屋があったという江戸

時代以前のことである。(「大沢猫の爪」)。

18. 「荒神」文字塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 花田(大字増林字定使野)・島田家(花田二一三三七)稲荷社

石塔型式 祠型(北向き・高さは低)

年号 元禄七年(一六九四)

〔左側面〕

元禄七甲戌年

〔正面〕

芒尻 神

〔右側面〕

九月十五日

※荒神とは、三宅荒神(さんぼくこうじんの)こと、カマドの神である。

※この石塔は、もとは花田二一六一五の島田家の北隣にある「逆さ川」

の対岸、北岸伝いの道の路傍にあった。このあたり一帯の地を地元で

は「こうじん耕地」と呼んでいた。「こうじん」との耕地名は、この

石塔から由来するのであろう。

(5) 「かけい堀」そば十字路

19. 道標付き文字庚申塔(『越谷市金石資料集』庚申塔二九三番)

所在地 増林・野田街道東側の「かけい堀」そば十字路南東の路傍

石塔型式 頭部山状角柱型(西向き・高さは中)

年号 嘉永七年(一八五四)

〔左側面〕

左ふどろ道

〔正面〕

〔目見〕庚申塔(三猿)

〔右側面〕

右のだみち

〔裏側〕

嘉永七年六月吉日樹之

〔台石〕

※もとは猿島道(野田道)にあった。

「左不動道」とは、南に進む猿島道が

不動方面の道を意味している。

「右野田道」とは、北に進む猿島道が

野田方面の道を意味している。

35.9132、139.8033

20・青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔三五番）
所在地 増林・野田街道東側の「かけい堀」そば十字路南東の路傍
石塔型式 駒型（西向き・高さは高）
年 号 元禄十七年（一七〇四）

〔左側面〕

おひつ
おまん
おけさ
おけさ
おふし
おふく

奉 供 養 庚 申 講 諸 願 成 就

〔正面〕

〔台石〕
平野源左工門
岡安□右工門
岡安孫□郎
関根五兵衛
平野源兵衛
中野□□衛門
中野□□衛門
岡安権四郎
中山久四郎
中野三郎右衛門
□□義兵衛
おせん
おつま
おせん

（日月）（青面金剛像）（二鶏）（鬼）（三猿）

〔右側面〕

おたつ
おこ□（け）
おふう
おけさ
おとら
おまん

元禄十七 甲 卯月吉日

※山本泰秀氏の調査によると、「かけい堀」と県道とが交差する南側角地にかつては高さ五尺の西方の不動尊への道しるべの石塔があり、野田道と不動道の文字が刻まれていたという。五尺とはこの20番をさし、道しるべの石塔とは19番をさすと思われる。

※猿島道（現在の野田街道）から掛樋堀（かけいぼり）沿いに入り、現在の宮前橋方面に通じる古道は、大相模の不動尊への近道と地元ではいわれた。

（6）清涼院院墓地

山本泰秀氏（増林二一四九四）によると、廃寺となった清涼院のお堂は元はここより西方百六十メートル先かけい（懸樋）堀と県道とが交差する南側の一帯にあったという。このあたりが清涼院の境内地であろう。ここは清涼院（清了院）の境内から離れた清涼院の墓地である。

21・石燈籠供養塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地 増林・清涼院墓地

石塔型式 頭部半球付角型（東南東向き・高さは中）

年 号 享保七年（一七二二）

〔正面〕

（七）壬寅年 増林村
享保□□寅年
奉納工石燈籠籠念心佛
七月吉日 講中

22・十三仏像容塔（『越谷市金石資料集』十三仏三番）

所在地 増林・清涼院墓地

石塔型式 笠付角型（東南東向き・高さは中）

年 号 明和七年（一七七〇） 天明七年（一七八七）

〔左側面〕

明和七 庚 寅 二月吉日

〔正面〕

「台石」
講中 おはな
妙空 おはち
真光 おはつ
おしけ おきわ
おかく おいか
久栄 おかち
おまん お七
おさい お七
おさわ おろく

（大日）（薬師）（弥勒）（不動） 天明七未天
（阿闍）（観音）（地藏）（釈迦） 江天旭潭
（虚空蔵） 二月廿七日
（阿弥陀）（勢至）（普賢）（文殊）

※宝珠と剣を持っている虚空蔵菩薩、智拳印を結んでいる大日如来、阿闍地印は結んでいないが配置からして推定できる阿闍如来、阿弥陀說法印を結ぶ阿弥陀如来、薬蓋を持つ施無畏・与願印の薬師如来、蓮の花を持つ観音菩薩、合掌する勢至菩薩、両手の手のひらに宝珠を載せた弥勒菩薩、宝珠と錫杖を持つ地藏菩薩、配置から推定して蓮の花を持つ普賢菩薩、羅索と剣を持つ不動明王、施無畏・与願印の釈迦如来、經典を上に載せた蓮の花を持つ文殊菩薩、以上合計十三の仏の像容が見られる。

23・十九夜念仏を兼ねた三界万霊塔（『越谷市金石資料集』月待四番）
所在地 増林・清涼院墓地
石塔型式 駒型（東南東向き・高さは中）
年号 寛延四年（一七五二）

〔左側面〕 講中三十人
拾九夜念佛供養塔
願主平野源八

〔正面〕
〔如意輪観音像〕二田介萬雷笠守
〔右側面〕
武州崎玉郡新方領増林村

寛延四 辛 未 年十月吉日上全波

※十九夜の月の出を待つ行事を行った記念の石塔である。十九夜月は月の出を覆て待つ頃の月なので、「寝待月」とも呼ばれる。この石塔の上部には、十九夜月の主尊の如意輪観音菩薩が描かれている。

24・出羽三山及び百観音巡礼塔（『越谷市金石資料集』出羽三山六番）
所在地 増林・清涼院墓地
石塔型式 頭部山状角型（東南東向き・高さは高）
年号 文化七年（一八一〇）

〔左側面〕

増林村 鈴木甚右衛門 今井清右衛門
世話 中野平兵衛 同 六右衛門
小島平兵衛 同 幸助
須賀市良兵衛 深谷重右衛門
榎本才兵衛 中村林庵
鈴木勘右衛門 岡安又兵衛
中野源蔵 同 勝右衛門
関根孫七 鈴木岡右衛門
中村孫右衛門
会田惣七
生誉浄心法師
〇本五良兵衛
須賀長右衛門
渡辺庄八
鈴木権八
実権

文化七庚午年

〔正面〕

湯殿山 坂東 天下泰平
羽黒山 秩父 奉順禮百番供養塔
国土安穩

〔右側面〕

大吉村 向畑村 藤塚村
世話人 染谷長右衛門 鈴木利左衛門 遠藤七良治
同 久右衛門 山田小左衛門 中井村
中山佐兵衛 松伏村 杉村與右工門
元木五良兵衛 鈴木彦左衛門 向畑村
加藤久兵衛 長 小左衛門 鈴木栄蔵
大沢下宿 赤岩村 同上文 七
中山五良左衛門 染谷兵右衛門 川崎村 鈴木佐七

十二月吉日

〔裏面〕

増林村
中野浅右工門
関根七右衛門
中村武助
岡安寿右衛門
同 清右衛門
戸張長四郎
平野茂吉
戸張弥右衛門
向畑村
松崎五右衛門

25・清涼院庵主供養塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地 増林・清涼院墓地
石塔型式 上部隅丸角型（東南東向き・高さは中）
年号 元禄十年（一六九七）

〔正面〕

元禄十丁 丑 歳

風呂屋嶺順庵主

十一月八日

※庵主（あんじゅ）とは、庵を構えている僧侶のこと、特に尼僧をさす。清涼院の女性住職の供養塔であろうか。

26・「厩住塔」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地 増林・清涼院墓地

石塔型式 自然石（東南東向き・高さは中）

年号 不詳

〔正面〕

厩住塔（篆書）

〔裏面〕

前〇平〇鳳十九世千舟海鱗大和尚
清涼院而造立之者也

※「厩住塔」とは、代々の住職の標識塔という意味であろう。

◎関根内蔵助家の『祖師西来意文字塔』

所在地 増林・清涼院墓地（北西塀側の墓所）
石塔型式 板碑型（東南東向き・高さは中）
年号 寛文八年（一六六八）

〔正面〕

寛永十 年 癸 甲
西 辰 年 寛文四 年

銘春禪定門 道忠禪定門 各壺
三月十日 四月十八日

祖師西来意□（鶴々）

元和六年 寛文八 年 戊 申 年

妙祐禪定尼 妙忠禪定尼 敬白

□九月四日 六月廿日 関根内蔵助

※この祖師西来意文字塔の中に、世代が違ふ二組の夫婦の戒名が刻まれている。つまり、寛永十年（一六三三）と元和六年（一六二〇）没の夫婦の戒名とそれがれと嫁と思われ寛文四年（一六六四）と寛文八年（一六六八）没の夫婦の戒名である。元和の元号が刻まれているのは珍しい。現在、関根内蔵助の子孫は他所に転居している。「祖師西来意」についての解説は、86番の項を参照のこと。

27 地藏像付き念仏塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地 増林・清涼院墓地
石塔型式 舟型（北北東向き・高さは中）
年号 寛文元年（一六六一）

〔正面〕

奉造立石地藏一鉢念佛誦衆為二世也發願六右門同行 拾 人

（梵字力）（地 蔵 菩 薩 立 像）

于時寛文元年 辛 今月吉日 敬白
丑

(7) 平野家（増林三五〇〇）邸内
28 「山神宮」文字塔（『越谷市金石資料集』山神一番）
所在地 増林・平野家（増林三五〇〇番）邸内
石塔型式 角型（北東向き・高さは中）
年号 寛延三年（一七五〇）

〔正面〕

寛延三 庚 午四月大吉日
山 神 宮

願主平野源左右門

※もとは、大吉香取神社（現在は古利根堰公園）そばの平野家所有「平野稻荷社」（現在は平野家邸内に移転）前の野田道（猿島道）路傍にあった。平野家はかつては代々源左衛門を名乗り、地元では「源左衛門」がなまって「ゲンゼム様」と呼ばれ、寿橋の凡そ五十メートル下流の古利根川右岸にあった増林河岸（源左衛門河岸、ゲンゼム河岸）を差配していた。

29 「勘解由両体大権現」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地 増林・平野家（増林三五〇〇）邸内
石塔型式 駒型（北東向き・高さは低）
年号 寛政二年（一七九〇）

〔左側面〕

寛政二 庚 戌 年 増林村

〔正面〕

勘解由両体大権現

〔右側面〕

信心施主

仲春吉祥日 平野氏

※高さ四〇センチ、幅三二センチの自然石の「馬頭観世音」文字塔あり。裏面には「大正十五年六月 平野茂吉 建之」と刻まれている。
※嘉暦三年（一三二八）の板碑（高さ五五センチ、幅二五センチ）あり。主尊が蓮座の上に梵字「キリーク」（阿弥陀如来）で刻まれている。
※また、警後用水（葛西用水、逆さ川）に架かる新方橋の東詰めの南側近く、野田街道（猿島道）西側路傍に昭和四年六月廿五日に建立した自然石の『有縁無縁一切仏』と刻まれた石塔がある。

(8) 平野家個人墓地

かつて「ゲンゼム様」と呼ばれた平野家(増林三五〇〇)の個人墓地である。「源左衛門庵」と呼ばれたお堂があった。

30. 六十六部廻国塔(『越谷市金石資料集』六十六部五番)

所在地 増林・平野家(増林三五〇〇番) 個人墓地

石塔型式 駒型(南東向き・高さは高)

年号 享保五年(一七二〇)

〔左側面〕

願主圓心

于時享保五 庚 子 霜月吉日

施主平野氏

〔正面〕

敬白

(一 一 仏) 奉納大乘妙典六十六部日本廻国成就之所

謹言

〔右側面〕

夫以武陽散人圓心僧久有廻国望于貳當村施主平野氏源左衛門

為蜜敵光顯法師相積壽圓大姉并有縁無縁三界萬靈平等

利益有金錢之助力右之僧成三月〇廻国日本六拾六ヶ国奉納

大乘妙典諸国行脚之内諸人他力善根請庚子十月古郷帰

去故供養塔造立者也 敬白

※「于貳」は「ときに」と読む。「貳」は「之(こ)の(日)」という意味。

武陽散人の雅号をもつ僧侶圓心が、戌年(享保三年)の三月より子年

(享保五年)の十月までの二年七カ月をかけて六十六部廻国を成就し

ている。それを記念して翌月の十月に増林三五〇〇の平野家(屋号は

「げんぜむ」の先祖、平野源左エ門が建立したものである。大松の平野

家(大松二七五)路傍にある六十六部廻国塔にも圓心の名が見える。

31. 石燈籠供養塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 増林・平野家(増林三五〇〇番) 個人墓地

石塔型式 頭部半球付角型(北西向き・高さは中)

年号 享保七年(一七二二)

〔正面〕

享保七 壬 寅歳 増林村

奉納納一口燈籠籠

十月吉日 平野源左衛門

35.9149、139.8060

32. 地藏像及び道標付き墓塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 増林・平野家(増林三五〇〇)の個人墓地

石塔型式 角柱型(南東向き・高さは高)

年号 天明二年(一七八二)

〔正面〕

〔台石〕

奉伎頭陀造立濁世導師

(丸彫地藏立像) 伏願令一切衆生不捨悲心

頓除妄想同證佛果

〔右側面〕(正しくはこれが正面)

右こしがや道

三界萬靈等

左庄内道

等II塔

〔裏面〕

〔台石〕

天明二 寅年

同會 貞松童女

十一月十七日

(9) 笹原組の庚申塔 赤土製作所の三百以西、北側路傍

33. 文字庚申塔(『越谷市金石資料集』庚申塔二五八番)

所在地 増林・増林三五五番地の角の路傍

石塔型式 角型(南東向き・高さは中)

年号 文政十三年(一八三〇)

〔左側面〕

文政十三 庚 寅年

〔正面〕

〔台石〕

庚 申 (三猿)

組 原 笹

〔右側面〕

二月吉祥日

35.9152、139.8070

34 文字庚申塔 (『越谷市金石資料集』庚申塔三三四番)
所在地 増林・増林三五五番地の角の路傍
石塔型式 型は不明(南東向き・高さは低)
年号 文化三年(一八〇六)

〔左側面〕
〔文〕(寛文)

〔正面〕
〔化三〕
庚申

〔右側面〕
□家
女人講中

35 青面金剛像庚申塔 (『越谷市金石資料集』庚申塔二二七番)
所在地 増林・増林三五七二番の角の路傍
石塔型式 駒型様角型(南東向き・高さは低)
年号 年代不詳(『金石資料集』によると「文化三・一二・吉」)

〔正面〕
(青面金剛像)(鬼)(三猿)

※笹原組の住民によって毎年五月一日に庚申塔の前で行なわれている。

(10) 鈴本木家 (増林三七六三) 路傍

36 文字庚申塔 (『越谷市金石資料集』庚申塔二七一番)
所在地 増林・鈴木家(増林三七六三番) 路傍
石塔型式 駒型(南西向き・高さは高)
年号 天保七年(一八三六)
〔正面〕
「椎の木組の庚申塔」
「台石」
榎本久助

35.9136、139.8124

(日月) 庚申 (三猿)

- 今井清兵衛
- 鈴木文六
- 同 七兵衛
- 同 伊兵衛
- 同 治兵衛
- 同 勘右衛門
- 同 金右衛門
- 栗田源五右衛門
- 榎本助右衛門
- 同 金七
- 須賀左衛門
- 小菅(左衛門)
- 今井八良左衛門
- 栗原和助
- 小菅半三郎

〔右側面〕
天保七丙申二月吉日

※地元では二ヶ月に一回程度の「かえ」講が平成八年(一九九七)まで行なわれた。
※こ鈴木家より百メートル西にある消防小屋の跡地(増林三六五九一)は、かつては増林村の役場があった所である。また、ここに「増林村道路元標」がある。村役場があった名残である。

(11) △7 井井家 (増林三七一一) 路傍
37 文字庚申塔 (『越谷市金石資料集』庚申塔二七〇番)
所在地 増林・今井家(増林三七一一番) 路傍 元は護郷神社入口付近
石塔型式 駒型様角型(南西向き・高さは高)
年号 天保七年(一八三六)
〔正面〕
「上組(かみぐみ)の庚申塔」
「台石」
関根平蔵
今井幸助

35.9129、139.8110

(日月) 庚申 (三猿)

〔右側面〕
天保七丙申二月吉日

※地元では、二カ月に一回(庚申の日とは限らない)の割合で「かえ講」(庚申講のこと)が上組一区の中で持ち回りで行なわれていたが、戦後廃止されたようだ。

- 同 平右衛門
- 同 市良右衛門
- 鈴木庄右衛門
- 今井弥五右衛門
- 同 伊三郎
- 同 忠兵衛
- 吉田佐治兵衛
- 今井茂兵衛
- 同 新右衛門
- 鈴木六良兵衛
- 榎本助右衛門
- 須賀市良兵衛
- 小菅彦七
- 榎本五良右衛門

(12) 護郷神社 (旧「浅間神社」)

浅間神社が大正二年(一九一三)に周辺のいくつかの神社を合祀して護郷神社と改称したもの

38 文字庚申塔 (『越谷市金石資料集』庚申塔二五四番)
所在地 増林・護郷神社 (旧「浅間神社」) 西端路傍
石塔型式 頭部山状角型 (南向き・高さは中)

〔左側面〕

文政七年(一八二四)
申 三月吉日

〔正面〕

(日月) 庚申 塔

39 板碑型三猿庚申塔 (『越谷市金石資料集』庚申塔一六番)

所在地 増林・護郷神社 (旧「浅間神社」) 西端路傍

石塔型式 板碑型 (南向き・高さは中)

〔正面〕

施主

面金剛

奉造 □ 庚申 青 (三猿)

貞享二年十二月吉日

敬白

与五兵衛
新五兵衛
三左衛門
太郎兵衛
新五衛門
基左衛門
彦兵衛
四郎兵衛
おくに

(立)

※板碑型をした初期の庚申塔である。「奉造 □ 庚申青面金剛」と刻まれている。

40 石階・敷石供養塔 (『越谷市金石資料集』普請供養二四番)
所在地 増林・護郷神社 (旧「浅間神社」)
石塔型式 角型 (北東向き・高さは中)

年 号 天保十年(一八三九)

〔正面〕

石階
敷石
供養塔

石台
鈴木伊左門
中嶋村
林源太郎
増森
黒田嘉兵衛
西川
須賀弥平治
山崎七郎右門
増森新田
平林嘉右門
江河助右門
大谷七郎兵衛
大谷
石渡四郎兵衛
向畑
鈴木初右門
鈴木久左門
戸張久左門
鈴木八郎右門
岡田金右門
鈴木七郎兵衛
川崎
木邑与八

〔右側面〕

天保十 己 亥歳十一月 石工龜五郎作
當山 現住 太賢代

41 法華経供養塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)
所在地 増林・護郷神社 (旧「浅間神社」)
石塔型式 笠付角柱型 (南東向き・高さは高)

年 号 寛文元年(一六六一)

〔左側面〕

綏養道雪禪定門為菩提也

〔正面〕

寛文元年 辛 丑

奉造立法華千部供養石塔一基

今月吉日敬白

(13) 福寿院跡墓地

42 普門品供養塔 (『越谷市金石資料集』普門品一番)

所在地 増林・福寿院墓地

石塔型式 頭部山状角型 (西向き・高さは高)

年 号 享和二年(一八〇二)

〔左側面〕

享和二年 戌年式月吉祥日
当所上組 講中 二拾五人

〔正面〕

天天下去泰立平

〔梵字サ〕 奉誦誦誦並目門口印拾拾卷供養塔石

五叔叙典豆饒

〔右側面〕

新四国八拾五番

願主

正觀世音

當院

子大権現

同 七郎兵エ
同 茂兵衛

43・弘法大師像（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地 増林・福寿院墓地

石塔型式 特殊型（南向き・高さは中）

年号 安永八年（二七七九）

〔正面〕

（弘法大師像）

〔裏面〕

奉造立弘法大師為令法

久住利益人天富井山住

法印快秀代施主小林

会田伊右衛門敬白于時

安永八年 亥 極月之吉

44・不動明王像（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地 増林・福寿院墓地

石塔型式 浮き彫り型（南向き・高さは高）

年号 安永七年（二七七八）

〔正面〕

（不動明王像）

〔裏面〕

于時

安永七 戊 四月八日

（梵字カーン）富井山現住法印

快秀造立之者也

◎この墓地には天正六（一五七八）の貴重な二十一仏板碑がある。

また下部が欠けて上部だけの板碑もある。

45・宝篋印塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地 増林・福寿院墓地

石塔型式 舟型（南向き・高さは高）

年号 安永六年（二七七七）

〔左側面〕

卷并供養法一千座

猶六十余州求靈山

靈場之宝土終而修

加持土砂之法廿一

箇度造立寶塔而納

是誠佛祖之大恩諸

〔正面〕

天中□之□威徳年

来之諸願今正成就

自他法界同證此福

于時安永六龍輯丁

西冬大呂旬富井山

現住法印快秀謹言

〔右側面〕

若有有情能於此塔

一番一花礼拝供養

八十億却生死重罪

一時消滅生免災殃

死生佛家若有應隨

阿鼻地獄若於此塔

〔裏面〕

或一礼拝或一右邊

塞地獄門開菩提路

廣説云云 爰某宝

曆九己卯二月四日

自入當院發願而宝

篋印陀羅尼 十万

※一七五九



※この梵字の石と銘文の石との間の部分に隙間がある。石塔の中心部の空洞の中に経文を入れるためか。

龍輯 龍集 ※一七七七

この墓地に「快秀」の卵塔あり

※この石塔のあるあたりは周囲よりも50cm高く盛り上がっていて、石塔の場所は更に高かったようだ。この石塔は戦後数年たつて倒れ、その後少し南にずらして積み替えた。その時に、最上部の屋根やその上に載る露盤、九輪、宝珠の部分が組み込まれずにそばに置かれた。令和4年2月に、石塔全体が傾いていたので、木村榮氏ら三人により土台から積み直し傾きをなおした。

46. 権僧正快運の碑（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地 増林・福寿院墓地

石塔型式 舟型（南向き・高さは高）

年号 天明元年（二七八一）

〔左側面〕

當寺現任

法印快充代

〔正面〕

権僧正

（梵字ア）

快運

〔右側面〕

和尚諱快運字音識

安永乙未年□

台命補豊山職位依

幕下執奏

敕任權僧正後再營

小池坊堂宇高建法

〔裏面〕

權利濟□衆于時天

明元辛丑浪於院職

同七丁未年三月十

四日掩化矣

豊山三十七世

47. 「子権現」塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地 増林・福寿院墓地

石塔型式 特殊型（南向き・高さは低）

年号 不詳

〔正面〕

子大権現

（巻物と数珠を持つ僧侶形の座像・「子の権現」像か）

因位御影

※「子の聖大権現」とも呼ばれ、子年（天長九年）の子日子刻に生まれた子

とい、足腰を治す神仏。聖つまり僧侶の姿をしているのであろうか。

※因位・菩薩の地位。

（14）須賀賀家（増林三七八一）前

〔参考〕五大の梵字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地 増林・須賀家（増林三七八一）前

石塔型式 板碑型（南西向き・高さは中）

年号 寛文四年（一六六四）

35.9132、139.8127

〔正面〕

寛文四甲辰年

（梵字イ）（梵字キヤ・カ・ラ・バ・ア）善海

十月廿六日

敬白

主万海

村住施

内増林

新方領之

〔右側面〕

寄附連名

平野茂吉

鈴木芳太郎

竹ノ内清次郎

山崎貞次郎

鈴木作次郎

今井善五郎

鈴木春藏

須賀傳之丞

須賀秋口郎

尾川祐吉

岡安徳太郎

関根和吉

平野豊吉

◎なお増林駐在所裏の路傍に

「馬頭観世音」、裏面に「大正

二年十一月廿三日」と刻まれた

自然石の馬頭観世音文字塔がある。

地面からの高さは一五cm、

幅は六五cmである。

台石に書かれた人名は以下の通り。

（15）薬師堂墓地

48. 百観音・八十八箇所巡礼塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地 増林・泉道沿いの薬師堂墓地

石塔型式 頭部山状角柱型（西北西向き・高さは中）

年号 文化十二年（一八一五）

〔左側面〕

夏山童子 文化三寅 癸天三月十三日

妙音童子 享和三癸 天三月廿三日

〔正面〕

文化十二亥 年八月十二日

進誉忍精信士

西国

秩父 巡 礼 供 養 塔

坂東 本誓周圓信女

享和元西 年十月十六日

※「増林 48」の図版は平成 11 年に描かれた

ものである。蓮台や台石がみられるが、

現在はその蓮台や台石はなくなっている。

※この巡礼塔は、薬師堂墓地（今井家墓地）入口入って右端にある屋号

「油医者」の墓所に見られる石塔である。薬師堂の開帳は4月8日。

屋号「油医者」は、薬種油の販売と開業医から呼ばれたようだ。

この墓所には他に、次にあげる 49 や 50 の石塔もある。

35.9128、139.8136

49・百観音・八十八箇所巡礼塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地 増林・薬師堂墓地

石塔型式 山状角柱型（西北西向き・高さは中）

年号 文政五年（一八二二）

〔左側面〕

江都横山町二丁目

住吉屋新助母

行者 さく

施主 笠原組 今井清右エ門

〔正面〕

天下泰平

奉 四国西国

（弘法大師像）

納 坂東秩父

国土安穩

供養塔

〔右側面〕

文政五 壬 年二月 午

50・地藏像付き三界万霊塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地 増林・薬師堂墓地

石塔型式 角型（西北西向き・高さは中）

年号 延享四年（一七四五）

〔左側面〕

「台石」

〔正面〕

「台石」

施主

（丸彫り地藏菩薩立像）三界万霊有無兩縁等

※等々塔

今井氏

〔右側面〕

「台石」

乗誉迎雲大徳

51・板碑型墓塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地 増林・薬師堂墓地

石塔型式 板碑型（西北西向き・高さは中）

年号 寛永十三年（一六三六）

〔正面〕

寛永十三 丙 子 年

（観音梵字）

（阿弥陀梵字）

（勢至梵字）

春 琮 禅 定 門

三月十七日

※寛永年間の墓塔は珍しい。平成十一年の調査ではここ薬師堂墓地にあった。その後、墓地全体が大きく改葬されて整然となったが、現在は残念ながら所在不明となっている。

〔参考〕

※墓地の正面奥に今井家の大きな墓所（屋号が「おおいまい」大今井の意味）がある。そこに万治二年（一六五九）と刻まれた江戸初期の高さ87cmの板碑型の墓塔がある。干支は「庚子」と刻まれている。庚子は万治三年をさす。年号と干支とが矛盾しているが、当時は「干支」は生活に密着して人々の間で使われているので、万治三年が正しいことがわかる。このように江戸初期は、刻まれた年号に誤りが見られることがある。

（サ） 皆万治二 庚 子 年 ※皆々とき

（キリク） 壽清 禅 定 門

※万治三年の誤り。

（サク） 九月 十一 日

※屋号が「大今井」と呼ばれた今井家は、かつての敷地は広く（増林三〇九九番地）、若くして県会議員になった今井晃氏が出るほどの家柄である。

(16) 林泉寺

林泉寺は江戸時代「子安観音」の寺として知られ、その子安観音は本堂向かって左側の観音堂に安置されている。

52. 青面金剛像庚申塔 (『越谷市金石資料集』庚申塔一三七番)
所在地 増林・林泉寺 (県道そば)
石塔型式 駒型 (北西向き・高さは中)
年号 明和五年 (一七六八)

〔左側面〕
奉造 立庚申供養

〔正面〕
〔日月〕(青面金剛像)(二鶏)(鬼)(三猿)

〔右側面〕
願主
明和五 戊子四月吉日

譚中

53. 青面金剛像庚申塔 (『越谷市金石資料集』庚申塔一八五番)
所在地 増林・林泉寺 (県道そば)
石塔型式 駒型 (北西向き・高さは中)
年号 寛政九年 (一七九七)

〔左側面〕
寛政九 丁巳四吉祥日

〔正面〕
上組
〔台石〕

〔日月〕(青面金剛像)(二鶏)(鬼)(三猿)

54. 「不動剣」石仏 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 増林・林泉寺の不動堂裏
石塔型式 自然石 (南西向き・高さは中)
年号 明治十四年 (一八八二)

〔正面〕

(日) 成田山不動明王

(月) () 不動 剣 ()

〔裏面〕

明治十四年辛巳歳□月□
増 劔 講 拜 中

55. 地藏像付き念仏供養塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)
所在地 増林・林泉寺裏の土手下 (後に、林泉寺参道に移転)
石塔型式 舟型 (西向き・高さは高)
年号 嘉永二年 (一八四九)

35.9127、139.8138

〔正面〕

奉造立地藏尊 發起 當山開管代
(地 蔵 菩 薩 立 像)
于時嘉永二西星四月檀志萬人講

〔台石〕
世話人 女
※歳神(木星)の年
講 回りによる記銘と
中 して「星」と記載。

※越谷市郷土研究会理事の小原勤三郎氏によると、次のように紹介されている。(平成四年の「第十八回越谷市民まつり」の「増林の地藏尊」)

なお、文中にある「お姫講」は現在は廃止されている。
上組のこの場所は、溺死者・疫病死者の火葬場跡ともいわれている。
市内には、かつて女性の講の発達が著しく、娘講・嫁さん講・おかみさん講・念仏講と、女性のみ年齢階層による講が多かった。台石に「女講中」とあるのは、定かでないが、林泉寺に今も続く女性の念仏講(お姫講ともいう)とつながりがあるのかも知れない。

平成十四年十二月に林泉寺参道に移転。

56. 「三部経」供養塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 増林・林泉寺の地藏堂そば関根家墓地
石塔型式 舟型 (南東向き・高さは高)
年号 年号不詳

〔正面〕

三部経百五十部供養塔

(梵字サ) (観 音 菩 薩 立 像)

※表面が薄く削られた跡がある。秀作の観音像の墓石を再利用したのかもしれない。

57. 地藏像付き念仏供養塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 増林・林泉寺 (参道南東側墓地)
石塔型式 舟型 (南東向き・高さは高)
年号 寛文七年 (一六六七)

〔正面〕

奉造立地藏為菩提也念佛講

(梵字カ) (地 蔵 菩 薩 立 像)

寛文七 丁未年八月廿四日同行二十人 ※皆は「ときに」

※この石仏は元は増林三八九四の今井家北東隣の榎本家敷地内にあった。昔、この地で起きた切り合いによる死者を弔うために造立したと言い伝えがある。

58・利剣名号塔（浅間山噴火供養塔）（『越谷市金石資料集』名号一四番）
所在地 増林・林泉寺（山門前）
石塔型式 山状角型（南西向き・高さは高）
年号 天明四年（二七八四）
※天明三年七月七日の浅間山の噴火のちようど一年後に造立された石塔

〔左側面〕

子 観世世音 天明四甲辰歳
安 七月初七日

〔正面〕

勅許 疫癘除 □□偏利劔名號者為除滅天変地妖災癘 朝廷賜于當寺 知恩寺主写之

南 無 阿 弥 陀 仏 □(舎)普融音 (花押) 林泉寺十九主 頂誉(花押)

〔右側面〕 新西国三十一番

正 観 音 正 林 山 願主 宣 然 中妻 清兵衛

上 州 願主 宣 然 中妻 清兵衛

信 州 為横死流転志霊皆蒙解脱也 (七霊)

行 倒 鐵鬼施主定使野組中

※疫癘除の疫癘とは疫病のことで、悪性の流行病。知恩寺とは京都市左京区百万遍にある由緒ある浄土宗寺院、「百万遍知恩寺」としても知られる。「正林山」とは林泉寺の山号。「中妻」は地元中妻組のこと。

※林泉寺には子安観音が安置されていて、かつては子安観音の信仰が盛んであった。江戸への出開帳も行われ、江戸との関係が見られた。

※林泉寺は、武蔵三十三箇所（観音霊場）札所巡りの三十一番にあたる。

※この名号塔の正面の名号「南無阿弥陀仏」の文字は、文字の先端が剣のように尖っている「利剣名号」である。利剣名号は、後醍醐天皇

の時代に宮中より浄土宗本山の知恩寺（総本山の知恩院とは違う）に

下賜されたものといわれる。この名号の文字の周囲に刻まれた金石文には「天皇の許可 疫病除け・・・利剣名号は天変地妖や災害・疫病を取り除く 朝廷より当寺に賜る知恩寺の住職である声普融音がこれを書き写す 林泉寺 第十九世の頂誉」。裏面には「横死の為、流転亡霊、皆解脱を蒙る也」というような内容が刻まれているようだ。

天明三年七月七日に発生した浅間山の噴火による死者を弔う供養塔は当時よく見られたが、このような由緒ある利剣名号塔の供養塔はここだけかもしれない。

59・「新六阿弥陀二番」標識石塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地 増林・林泉寺（山門前）
石塔型式 頭部山状角型（南西向き・高さは中）
年号 天明八年（二七八八）
〔左側面〕 天明八戊申年

〔正面〕 林泉寺 願主船渡村 受道

〔右側面〕 五月廿五日

※59番は六阿弥陀参りのために寺院に建てた標識である。「六阿弥陀参り」とは阿弥陀如来を安置している六ヶ所の寺院を春と秋の彼岸に巡拝する信仰である。江戸の町で盛んに行われた。この越谷地域にも江戸の六阿弥陀参りをまねて「新六阿弥陀参り」として行われたのであろう。現在、増林の林泉寺に「新六阿弥陀二番」、ここ林西寺に四番、大泊の安国寺に五番、大松の清浄院に六番の標識が残っている。願主はすべて船渡村の受道である。なお、一番は不明であるが、当時勢力のあった天岳寺であろう。また三番は従来は登戸の報土院とされてきたが、平成十八年五月の調査により、江戸時代の本来の三番は松伏町赤岩の源光寺であることが判明した。以上の寺院はすべてが阿弥陀仏を本尊とする寺院である。

60・「御殿境内」文字付き巡礼標識石塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地 増林・林泉寺境内（山門前向かつて左脇）
石塔型式 角型（南東向き・高さは中）
年号 不詳

〔左側面〕
増林村 林泉寺

〔正面〕

正観音 武州順禮

〔右側面〕

第三十一番

〔裏面〕

御殿 境内

〔越谷市史統史料編(一)〕の一〇四頁「西方村旧記」から石杭に関する文章を抜粋して紹介する。「増林村御殿跡と申し候は、当時(現在)の意味、文政年間か)右村(増林村)林泉寺境内三正(しよう)観音建て置き候場所、御殿跡と申す石杭(いしぐい)二記し有之由(これあるよし)、右村役人榎本氏(増林の榎本家先祖)より承り伝え置き候」とある。つまり、林泉寺境内の「正観音堂」(現在の「観音堂」)のそばに「御殿跡」と刻まれた石杭があると、西方村の人が増林の榎本氏から聞いていたとしている。この頃は既にあったのである。鷹場御殿を意味する「御殿境内」の石塔には造立年が刻まれていないのが残念である。増林村の榎本氏が伝えた「御殿境内」を西方村側では「御殿跡」として記録に残し、つまり「御殿跡と申す石杭」とはこの現存する「御殿境内」の石塔のことをさすと思われる。

一方「正観音武州巡礼第三十一番」と表面に刻まれ、両側面には所在地「増林林泉寺」や「第三十一番」と刻まれた時期は、武蔵国三十三ヶ所観音霊場が開創されたという元禄十年(一六九六)以降と思われる。いづれにしても、かつては豪華さを極めたであろうと思われる越ヶ谷御殿と共に林泉寺は家康が鷹狩りで立寄った寺院の一つであり、恐れ多くも「御殿」の言葉が使われたことから、仮御殿として愛された家康ゆかりの由緒ある寺院だったのではないであろうか。

61. 阿弥陀像付き開山僧「本誉上人」供養塔

(『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 増林・林泉寺(歴代住職の墓地)

石塔型式 舟型(南東向き・高さは高)

年号 寛文五年(一六六五)

〔正面〕

法界平等利益林泉寺住持

(梵字キリシタ)阿弥陀如来像

寛文五年七月十五日開山本誉上人

※この「林泉寺」を開山した本誉上人の供養塔である。本誉上人の遷化した年は、新編武蔵風土記稿によると文正元年(一四六六)である。

62. 辞世の匂付き僧侶の墓塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 増林・林泉寺(歴代住職墓地の南東端)

石塔型式 頭部六角柱状六角柱型(南東向き・高さは中)

年号 安永四年(一七七五)

〔左側面〕

降ッモル深山ノ雪モ春ノ日ノ

追善

光(ひ)カリサスヨリ消テ行ラメ

〔左側面〕

安永四乙未歳

〔正面〕

奴柱蓮社典菅信阿孔善和尚

〔右側面〕

正月初四日

〔右側面〕

唯タノムねテモサメテモナム阿ミタ

辞世

仏マカセニ有無ラロンセン

〔裏面〕

林泉寺寛大嘗弟子生国丁子口村

受生 在住三十六年 六一寂

◎林泉寺の歴代住職墓地の南東隣に一列に並べられた石仏石塔群がある。向かって右端の石仏(地藏菩薩立像)を除くすべては、清伝寺の跡地(現、増林二一四の須賀家あたり)より移転してきたもの。向かって右より紹介すると次の通り。この62番はこれらの中の一つである。

地藏菩薩立像(人の背丈くらいの高さがある、年代不詳)

僧侶の墓塔・「経蓮社典菅信阿孔善和尚」(安永四年正月四日)

僧侶の墓塔・卵塔「心誓」(年代不詳)

僧侶の墓塔・「天蓮社」菅智「和尚」(享保四年)

僧侶の墓塔・「寛蓮社相誉上人吟説和尚」(天明七年十二月廿二日)

僧侶の墓塔・「迎蓮社相誉上人玄教和尚」(文政八年十二月廿四日)

僧侶の墓塔・「念蓮社称菅教存和尚」(元禄六年五月廿日)

僧侶の墓塔・「真蓮社性誓春祭和尚」
三界万霊塔・ (寛保元年五月十二日)

明和九壬 辰天
岩船 三界萬靈
地藏 十二月吉日

63・徳本行者の名号塔 (『越谷市金石資料集』名号二〇番)
所在地 増林・林泉寺境内 (本堂そば)
石塔型式 角柱型 (南東向き・高さは 高)
年号 文政二年 (一八一九)

〔左側面〕

- 〔台石〕
- 同 山崎与兵衛
- 同 加藤喜太郎
- 同 下赤岩村
- 同 榎本幸左衛門
- 同 下広嶋村
- 同 岡田武右衛門
- 同 拾壹軒村
- 同 松永伊右衛門
- 同 松伏村
- 同 川尻弥右衛門
- 同 川尻喜左衛門
- 同 長作右衛門
- 同 上赤岩村
- 同 四 人
- 同 下内川村
- 同 六 人
- 同 国崎玉郡越ヶ谷領花田村
- 同 松沢初右衛門
- 同 国郡新方領大沢町
- 同 石工 戸張八五郎
- 同 亀五郎
- 〔台石〕
- 同 文政二己卯季大族吉日建之
- 同 武州崎玉郡新方領増林村
- 同 當山廿一世恵當代
- 同 念仏講発願主 榎本斎兵衛
- 同 同世話人栗田源五右衛門

〔正面〕

南無阿弥陀仏 徳本(臺)

念仏講中
千百餘人
並諸精靈
法名等牌
中人之

※名号の六文字は、筆順がわかる
ように刻まれている。

〔右側面〕

- 同 同 同 同 同
- 同 栗原四五右衛門
- 同 平野半治郎
- 同 今井清十郎
- 同 升岡半五郎
- 同 瀧田文右衛門
- 〔台石〕
- 同 渡辺伝右衛門
- 同 戸張忠三郎
- 同 平野吉右衛門
- 同 栗原安左衛門
- 同 須賀吉右衛門
- 同 中嶋玄泰
- 同 山崎七郎衛門
- 同 山崎たに
- 同 是心
- 同 増森村
- 同 栗原又四郎
- 同 富沢倉右衛門
- 同 須賀多郎兵衛
- 同 岩井弥五左衛門
- 同 波谷伊左右衛門
- 同 中嶋村
- 同 杉山孫兵衛
- 同 弥十郎村
- 同 尾賀井源助
- 同 八木橋要助
- 同 大吉村
- 同 染谷長右衛門
- 〔台石〕
- 同 大沢町
- 同 高畑加藤
- 同 鷺後中村
- 同 中村彦左衛門
- 同 下間久里村
- 同 松崎勘兵衛

〔裏面〕

正面の文字「南無阿弥陀仏 徳本(壽)」の鏡文字が刻まれている。

- 小林村
- 同 嶋根安右衛門
 - 同 須賀多左衛門
 - 同 嶋根与右衛門
 - 同 山口惣左衛門
 - 同 会田嘉助
 - 同 同国同郡八條領西方村
 - 同 秋谷林右衛門
 - 同 瓦曾根村
 - 同 鈴木五郎右衛門
 - 同 同国葛飾郡松伏領川藤村
 - 同 鈴木もん
 - 同 増田佐次右衛門
 - 同 鈴木儀右衛門
 - 同 山崎源右衛門

正面の台石で、「季」は年を意味し、「大簇」は一月を意味する。
 ※徳本行者とは、宝暦八年(一七五八)の紀伊国(和歌山県)の生まれで、念仏を広め活躍した浄土宗の代表的な念仏僧。各地に独特の書体による名号塔が多く残されている。林泉寺にある名号塔は、徳本行者が没した文化元年(一八一八)の翌年のものである。徳本行者の独特の書体による名号と花押(サイン)が刻まれている。徳本行者の徳を慕って広範囲の地域の多くの人々によって建立され、林泉寺の当時の隆盛が窺える。人々は林泉寺を訪れ、石塔の後ろに設置した台に上って、その鏡文字を競って和紙に墨で石刷り(拓本)し、自宅の仏壇や中には床の間に飾って信仰を深めたのであろう。名号の書を通して地元の信仰に密着した石塔であり、掛軸の置物としての書としても利用でき、多くの人々の熱心な信仰が垣間見られる石塔です。

64 増林関根氏始祖の五輪塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)
 所在地 増林・林泉寺(境内西側)
 石塔型式 五輪塔(南東向き・高さは高)
 年号 万治三年(一六六〇)

「地輪の左側面」※「式」(二)は「三」の誤り。庚子は万治三年の為。
 于時万治 庚子年 干支は日常使用するので信頼性が高い。

「地輪の正面」
 心光院本誓岳法道雪信士

「地輪の右側面」
 十二月十五日

「地輪の裏面」

※関根家墓所

越前大守義景御旗卜

墓所入口には大沼景房が造立した

元祖朝倉氏

石灯笼が二基あり。正面向かって

従三田崎六郎入道景長

右は心光院(関根景行)、左はその

四代之□(孫カ)

妻の普心院(渡部)の灯笼である。

関根亦兵衛尉景行 塔

石灯笼には、カタバミ紋が見られる。

依當寺□引導死□□是 施主 大沼作右衛門尉景房

◎この墓地には、同形の五輪塔が二つ並んで造立されている。

向かって右側が、増林の関根氏の始祖となる万治三年十二月十五日没

の心光院の供養塔である。

向かって左側は、その妻である延宝八年(一六八〇)三月廿六日没の

普光院の供養塔である。

※林泉寺所蔵の文政十年(一八二七)三月作成の「分記関根氏一族過去

譜序」によると、主に次のことがわかった。

越前(今の福井県東部)の戦国大名朝倉義景(織田信長と対立し、

一乗谷で滅びる)によって三田崎「みたさき」の地を与えられたと

いう武将三田崎氏の子孫(現在の松伏町上赤岩九九二番地の三反崎

家)と言われる三田崎景行が増林村に移り、関根と改称したと推定。

これが関根氏の祖となる。初代関根景行は俗名を亦兵衛と称したが、

万治三年(一六六〇)十二月十五日に亡くなる。諡(おくりな)は、

心光院である。なお関根家二代目は景行の甥の景正で、諡は田誓

である。

(17) △井井家(増林三八九四) 略略傍
 65 文字庚申塔(『越谷市金石資料集』庚申塔二六二番)
 所在地 増林・今井家(増林三八九四番) 路傍
 石塔型式 角型(南西向き・高さは中)
 年号 天保三年(一八三二)

35.9116、139.8151

〔左側面〕
天保三壬辰歳
〔正面〕

〔台石〕

中妻組講中
榎本順蔵

※上部の左右に「日月」の図を描くのに、この

日月

庚申 (二猿)

清明

同 金兵衛 須賀基左衛門
同 新五兵衛 今井新兵衛
同 源左衛門 同 常治郎
同 栗原四五右衛門
小菅彦市 小沢定右衛門
世話人 今井三左衛門

〔右側面〕

三月 吉祥日

※地元の上二区の一部の人たちによって毎月一回程度持ち回り庚申講が行われていたが、平成十一年の初め頃に廃止された。

※上組地区には笹原講・椎の木講・中妻講・上組講の庚申講があった。

(18) 須賀家 (増林二四三二) 邸内

この地は、屋号を「六兵衛さま」と呼ばれ、地元有力者であった須賀家のかつての敷地内の一部であった。戦後、「六兵衛さま」は転居した。

66 「土公神」文字塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 増林・須賀家 (増林二四三二) 敷地内

石塔型式 駒型 (南東向き・高さは中)

年号 不詳

〔正面〕

土公神

※石塔正面の「土公神」の文字を保護するための石の蓋がついている。

67 「文字庚申塔」 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 増林・須賀家 (増林二四三二) 敷地内

石塔型式 頭部山状角型 (南東向き・高さは中)

年号 文化二年 (一八〇五)

35.9123、139.8164

〔左側面〕

講中世話人

〔台石〕

増林中組

(見猿)

〔正面〕

願主須賀六兵衛

(日月) 庚申

(聞か猿)

〔右側面〕

文化二五年九月吉日

(言わ猿)

※台石には三猿が描かれていて、正面は御幣のようなものをついでいる聞か猿、両側面には小太鼓とばちを持った見猿と両手で口をふさいだ言わ猿である。ここは元、「六兵衛様」と呼ばれた須賀家があった。

68 「水神宮」文字塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 増林・須賀家 (増林二四三二) 敷地内

石塔型式 駒型 (南東向き・高さは低)

年号 嘉永七年 (一八五四)

〔左側面〕

嘉永七寅三月吉日

〔正面〕

水神宮

※古利根川の「ばば渡し」からここに移された。

(19) 須賀家管理の稲荷社

69 「成田山・真大山不動尊」文字塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 増林・須賀家敷地内の稲荷社 (増林駐在所の東南東300M先)

石塔型式 駒型 (南西向き・高さは低)

年号 嘉永六年 (一八五三)

〔左側面〕

嘉永六丑九月吉日

〔正面〕

成田山不動尊

真大山不動尊

※須賀家管理の稲荷社の祠の近くに不動信仰に関する

石塔がある。これを見ると成田山新勝寺(成田不動)や地元の真大山大聖寺(大相模不動)への不動信仰が地元では幕末に盛んであったことがうかがえる。

35.9127、139.8163

(20) 勝林寺の北西の「とうかん山」

かつては畑の中に、地元では「とうかん山」と呼ばれた杉の木々が生えていた小山があった。現在の増林公園の公衆トイレの北側あたりである。山本泰秀氏によると増林四〇八一である。現在はこの小山はない。この小山の上にあったとされる70番の石塔は「とうかん山」の北方30メートルほどにあった。

「とうかん山」は漢字では「透関山」と書くようであるが、「稲荷」を「とうか」とも音読みするので、野ウサギや狐などがいたこの地域では稲荷と関係が深い狐のすみかがある小山から由来したと推測できる。

70・法華経及び般若理趣経供養塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）所在地 増林・勝林寺の北西二百米先畑の中 越谷市斎場の建設にともなう石塔型式 笠付角型（南西向き・高さは中） なって勝林寺に移転。年 号 享保十四年（一七二九）

〔左側面〕 皇風永爾帝道遐昌佛日增輝法輪常轉 国家安寧風調風順五穀豐登万民康樂

〔正面〕 舌頭擎出妙蓮華八軸梵經遠齒牙 大乘妙典一千部誦誦供養塔 大地群生得成佛無端俱駕白牛車

〔右側面〕 青山祖養造立焉 享保十四己酉年十月十五日

〔裏面〕 元文五庚申年十月十四日 大乘般若理趣分一千巻誦誦供養塔 智慧清浄海理密義幽深

※「大乘妙典」とは法華経のこと。「般若理趣分」とは般若經典の一つで、「理趣経」ともいう。密教化した般若經典である。

※右側面に刻まれた文字の中に、「青山」の名前が出てくる。この石塔を造立したのは、勝林寺の檀家である青山祖養である。彼は、中組の源六の伯父にあたり、享保十四年（一七二九）に大乘妙典誦誦供養のためこの石塔を造立した。その後、さらに元文五年（一七四〇）にも裏面に般若理趣分の誦誦供養を刻んでいる。彼は、宝暦十一年（一七六一）十二月十一日に亡くなっている。

35.9122、139.8186

※星野龍雄氏（勝林寺現住職の祖母の山本千代氏の弟）によると、「とうかん山」と呼ばれるこの小山には、

「勝林寺に落武者が訪れたので、寺では農夫の姿に着替えさせ、鎧や武者着の全てを透関山に埋没させた」との伝説があるという。

また、山本千代氏によると「落ち武者がここで自害した墳墓」との伝説があるともいう。

※山本泰秀氏（増林二一四九四）の研究によると、ここに葬られた人物は、この石塔を建立した青山祖養の先祖と考えられる矢場貞満であるという。貞満は寛政重修諸家譜巻第七十七によると、「慶安四年（一六五二）九月二十九日、常憲院殿（五代將軍綱吉）に附属せられ、神田の館に候し、のち落度の事ありて蟄居せしめられ、家た（絶）ゆ」と書かれている。また、勝林寺の過去帳によると「天和二年（一六八二）戌十月、性心院殿自安玄體居士、中・矢場一函」とある。中組の矢場家（家紋は五三の桐）の家系が絶えたことを示しているという。矢場貞満は格式の高い院殿号の戒名を持つ。

(21) 須賀家 南西路傍

71・不動三尊梵字付き成田山文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）所在地 増林・須賀家 南西路傍（勝林寺「越谷観音」より）石塔型式 頭部山状角型（南東向き・高さは中） 真西に二五〇メートル年 号 天保十三年（一八四二）の地点

〔左側面〕 天保十三 壬寅年十二月吉日

〔正面〕 (梵字タラ) 成田山 (梵字カーンマン) (梵字タ)

〔右側面〕 願 須賀勘左工門 主 同 市良右工門 同 彦三郎

※この石塔は祠の中に安置されている。

35.9111、139.8169

72・釈迦三尊十六善神塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地 増林・須賀家 南西路傍
石塔型式 丸彫り像付き角型（南東向き・高さは中）
年 号 延享二年（一七四五）

〔左側面〕

阿你嚕神王婆
提頭頼咥神王
印陀嚕神王
娑你嚕神王

〔正面〕

〔正面 台石〕

文珠師利菩薩
玄奘三蔵法師
真蛇對王
普賢菩薩

〔釈迦如来像〕

常啼菩薩

〔右側面〕

〔右側 面 台石〕

按折嚕神王
毘伽嚕神王
俱鞞嚕神王
真陀嚕神王

〔裏面〕

〔裏 面 台石〕

延享二年一月吉祥日
幻住二十傳青山祖養造立焉

※この石仏は、現在の70番の石塔の南方約三十メートルあたりにあった透闕山（今はない）の、さらに南西約三十メートルあたり（増林二八四九）あたりであった控え土手（俗に「中土手」ともいう。大正年間に古利根川の土手道と平行に作られた、今はない）の南側下にあったという。

※山本泰秀氏（増林二一四九四）の研究によると、裏面台石に刻まれた「幻住二十伝」とは、「幻住」は「仮の住まい」、「二十伝」は「先祖から代々受け継がれて二十代目」という意味であろうとのこと。そして、この石仏を造立した青山祖養（70番を参照）は、初代先祖（源家と推定される）から数えること二十代にあたり、透闕山に葬られたと推定される矢場貞満は、青山祖養の先祖代々の一人であるという。

※この石仏の正面は、釈迦如来、文珠菩薩、普賢菩薩の釈迦三尊をあらわしている。その下には、玄奘三蔵法師と真蛇對王（深沙）[じんじや]大将）、それに法誦菩薩と常啼菩薩の文字も刻まれている。

※この石仏の台石の左右側面に刻まれた十六人の神王は、釈迦を囲む武人である十六善神「ぜんじん」である。神王とは、仏教やその行者を守護する神で、多くは甲冑を身につけ怖い顔付きをしているという。十六の神王の中には薬師十二神將（薬師如来の家来である十二人の神王）の名前に由来すると思われるものがいくつか見られる。

〔左側面〕

阿你嚕神王（類你羅大将）
提頭頼咥神王
印陀嚕神王（因達羅大将）
娑你嚕神王
按折嚕神王（伐折羅大将）
毘伽嚕神王（毘羅大将）
俱鞞嚕神王（宮毘羅大将）
真陀嚕神王（真達羅大将）

阿你嚕神王
提頭頼咥神王
印陀嚕神王
娑你嚕神王
按折嚕神王
毘伽嚕神王
俱鞞嚕神王
真陀嚕神王

婆嚕神王（波夷羅大将？）
鈍徒毘神王
咩嚕神王（迷企羅大将？）
禁毘神王
跋嚕神王
迦嚕神王
麻依嚕神王
美嚕神王

〔右側面〕

按折嚕神王（伐折羅大将）
毘伽嚕神王（毘羅大将）
俱鞞嚕神王（宮毘羅大将）
真陀嚕神王（真達羅大将）

《八神宮にのりてのり記念心碑の紹介》

勝林寺の近くにある天神宮の本殿建物裏に、四基の記念碑などがある。向かって左から紹介すると次の通りである。

◎「忠勇義烈碑」記念碑

明治三十九年七月二十四日に建立され、『中心勇義烈碑』

と表面に刻まれた高さ九一センチの自然石の記念碑である。

裏面を見ると「明治三十七八年戦役ニ際シ出征軍人」の「凱旋記念」として建立されたことがわかる。

◎「古峯神社」記念碑

明治三十四年十月に建立され、表面にはある神社で、「こみねさん

とも呼ばれている。

六十九歳

竹洞(ちくどう)恭書

と刻まれた高さ一四五センチの自然石の記念碑である。

◎不詳の石塔

高さ八〇センチの角型様の石塔である。表面が摩耗していて一部の文字「大権現」がかるうじて判読できる程度で、何大権現の石塔か不明である。

◎和歌と人物像が刻まれた記念碑
和歌と人物像が線刻されている高さ一〇四センチの自然石の記念碑である。若い頃にもっと勉学に励めばよかったとの後悔の念が読み取れる。

舎楽翁

あかるミを

(短冊が置かれた机の前で)

くらく過ぬる

くやしさを

袖に涙する舎楽翁の

雪にはたるの

学なくして

しゃがんだ姿が刻まれている)

裏面をみると
文久元年(1861)正月
に建立したことが
わかる。

(22) 勝林寺

昭和五十年(一九七五)建立の大きな立像の「越谷観音」がある寺院。境内には市文化財の十三仏板碑(文明三年、一四七一年)がある。

73・普門品供養塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 増林・勝林寺参道

石塔型式 変形角型(頭部上面が平らな突部付・南東向き・高さは中)
年号 享和三年(一八〇三)

〔左側面〕

〔台石〕

享和三龍次癸亥年十月十八日

伊原村

越谷町

大沢町

大里村

七左新田

越巻村

萩嶋村

恩間村

関根又兵衛
増森 平太

大川戸村

赤岩村

川藤村

後新田

金杉村

田嶋村

上内川村

八子村

鍋小路村

普門品供養

〔右側面〕

当山現住叡山敬建

大崎玄仙居士

佐藤村

太田甚内

広嶋村

十一軒村

船渡村

大杉村

増林村

※「後新田(うしろしんでん)」とは、川藤村内にある新田村。

佐藤村は、加藤村(現、吉川市内)の誤りか。

※当時この勝林寺が、現在の越谷市・松伏町・吉川市にまたがる広範囲な地域からの信仰を受けていたことがわかる。

※なお、この普門品供養塔を造立した勝林寺第十九世の大仙叡山が残した直筆の古文書(正法眼蔵のうち帛依三室、現成公案などの十三巻の写し)が当寺に保管されている。

74・大乘妙典供養塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 増林・勝林寺参道

石塔型式 笠付角型(南東向き・高さは高)

年号 享保十六年(一七三二)

〔正面〕

享保十六年 亥年

奉読誦大乘妙典一千部衆生或世了脱出所

三月 吉旦 当寺九世

75・六十六部及び十三仏供養塔(『金石資料集』に掲載なし)

所在地 増林・勝林寺参道

石塔型式 不明(南東向き・高さは中)

年号 上段は正徳元年(一七一二)、下段は明和六年(一七六九)

〔左側面〕

須賀氏

俗名吉兵衛

〔正面〕

奉納大乗妙典
六十六部施僧
供養之所敬白
願主 国室要廻

〔右側面〕

〔左側面〕

覺心法師

十二月五日

廿三日

廿四日

朔日

一蓮宅生

十日

〔正面〕

明和六年乙丑年

十三仏供養

六月吉日

〔右側面〕

七日聖盃

十一月九日

四日

廿九日

廿一日

十九日

施主おまん

※六十六部と十三仏の二つの石塔は全く異質のもの。六十六部と十三仏の二つの石塔が後世に合わさり、現在に至ったものと思われる。

※念日とは二十日のこと

※この石塔で、明和六年が「乙丑」となっているが、「己丑」の誤り。

※願主の国室要廻（増林村中組の八郎右エ門の子）、俗名須賀吉兵衛は、正徳元年九月二十日に、六十六部聖（ひじり）の為に供養して造立した。

76・普門品供養塔（『越谷市金石資料集』普門品三番）

所在地 増林・勝林寺参道

石塔型式 駒型様角柱型（南東向き・高さは中）

年号 文政八年（一八二五）

〔左側面〕

文政八乙酉歳

〔正面〕

普門門口印供養塔

〔右側面〕

九月十有八日

77・六十六部廻国塔（『越谷市金石資料集』六十六部八番）

所在地 増林・勝林寺参道

石塔型式 笠付き角型（南東向き・高さは高）

年号 享保二十一年（一七三六）

〔正面〕

天下泰平享保二十一 丙辰 稔武州崎玉郡新方領

奉納大乗妙典六十六部日本廻国願成就供養塔

国土安全二月吉祥日増林村願主外伝祖格

※「稔」は「年」という意味

※願主の外伝祖格（中組の五兵衛の兄にあたる）は、宝暦十二年（一七六二）正月三日に亡くなっている。

〔左側面〕

萬延元年 申 歳十二月

〔正面〕

庚申塔

（三猿）

須賀六兵衛
中嶋雅治郎
須賀長右エ門
尾川重郎兵衛
セ八人
中嶋與左エ門

勅特賜明覚禪師□雲書⑩

〔右側面〕

當山現住願主寛山叟

※勝林寺の第二十一世住職の太道寛山大和尚が、万延元年（一八六〇）

にこの庚申塔を建立した。表面の文字は、かつて勝林寺の第十一世を勤め、後に永平寺第四十六世となり、朝廷（後桜町天皇）より高德の禅僧に与える「真空妙有」の禅師号を賜った弥山良須大和尚によると伝えられてきた。しかし、今回の調査では、曹洞宗の開祖道元禅師の六百回忌を執り行った臥雲重龍大和尚の書体とわかった。彼は永平寺第六〇世を継ぎ、朝廷（孝徳天皇）より「大晃明覚」の禅師号を賜った高僧である。（山本泰秀氏）

なお、禅師号は、朝廷より曹洞宗の両大本山である永平寺と総持寺の住職にのみ与えられている。

また、寛山はこの庚申塔を造立する六年前の嘉永七年（一八五四）に版木（題名は『言演』）を作っている。この版木は勝林寺に現在も保管されている。

※このそばに文明三年（一四七一）の十三仏板碑がある。

79・地藏像付き百観音等巡礼塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地 増林・勝林寺参道
石塔型式 丸彫（北西向き・高さは高）
年号 享保十六年（一七三二）

〔左側面〕

西国秩父坂東札所
富士山湯殿山立山
右諸願成就之供養為也

〔正面〕

為五穀成熟地藏菩薩

（地藏菩薩座像）

為三界萬靈六親眷属

〔右側面〕

享保十六年十一月廿四日

造立主 磯氏

※西国三十三箇所、秩父三十四箇所、坂東三十三箇所の巡礼や富士山・湯殿山・立山の登山を果たし終わった記念に造立された石塔である。

80・文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔二四七番）

所在地 増林・勝林寺
石塔型式 頭部山状角型（南東向き・高さは中）
年号 文政七年（一八二四）

〔左側面〕

文政七年 申歳
四月吉祥日

〔正面〕

（日月）庚申

増林村中組講中

81・文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔二七二番）

所在地 増林・勝林寺
石塔型式 頭部山状角柱型（北西向き・高さは中）
年号 天保七年（一八三六）

〔左側面〕

天保七年 申年八月吉日

〔正面〕

（日月）庚申塔

〔右側面〕

増林村中組

82・文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔二二〇番）

所在地 増林・勝林寺
石塔型式 頭部山状角型（北東向き・高さは中）
年号 文化四年（一八〇七）

〔左側面〕

「合石」

尾川良助
同倉右工門
同須賀茂七
同願賀五左工門
同主同三良兵工門
同同彦三良
同同重左工門

文化四丁卯

〔正面〕

（日月）庚申塔

（三猿）

〔右側面〕

二月 吉祥日

中嶋孫左エ門
同平八
願岡安長兵エ
主同要吉
須賀平兵エ
同重平
同重良右エ門

※台石は、すぐそばの別の所にある。横幅は五十三・八センチ、高さは二十五センチ、奥行きは四十八・五センチで、正面に三猿が描かれている。

83・道標付き文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔一八七番）所在地 増林・勝林寺
石塔型式 変形角型（頭部上部が平らな突部付・南東向き・高さは高年号 寛政十年（一七九八）

〔左側面〕

わたしバ道

〔台石〕

天下泰平

〔日月〕青面金剛

（三猿）

五穀成就

〔右側面〕

寛政十年 戊午 三月 吉祥日
ふどこう道
小川十右エ門

当所庚申講中
講頭 岡安助左エ門
同 忠左エ門
同 与エ門
須賀作エ門
同 新助
同 徳兵エ
同 基左エ門
越前國 〇念
石井八エ門
同 八兵エ
同 八兵エ
栗原安左エ門
小川大助
同 十良兵エ
同 岩五郎
講中奇附金二朱
講内當増林山大正院

※台石は、すぐそばの別の所にある。横幅六十・五センチ、高さ三二・五センチ、奥行き五十九・五センチである。

※「わたしば（渡し場）」とは、古利根川の対岸の上赤岩と増林を往来していた「渡し場」のことをさすと思われる。この渡し場は「ばば渡し場」ともいう。「ばば渡し」については105番の解説文を参照のこと。

84・青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔五五番）所在地 増林・勝林寺
石塔型式 舟型（南東向き・高さは中）
年号 正徳四年（一七一四）

〔正面〕

〔日月〕（青面金剛像）

奉造立庚申之尊像
諸願成就之処敬白
願主中組 〇〇
正徳四 〇〇 天二月

85・一葉観音像付き開基塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）所在地 増林・勝林寺西側旧墓地 S 家墓所
石塔型式 頭部山状角型（南東向き・高さは中）
年号 寛永元年（一六二四）、建立年代は寛政九年（一七九七）カ

〔左側面〕

儀賢禪門 文明二歳九月廿九日
〇秀比丘尼明心七歳七月七日

※文明二年は一四七〇年
※明心七年は一四九八年

〔正面〕

当寺寛永元 戊子 星
（一葉観音像）法敬院梅岩勝林居士
開基五月廿有五日

※寛永元は一六二四年
干支は甲子だが、この石塔は戊子となっている。

〔右側面〕

月照童女 寛政八 年六月十三日 ※寛政八年は一七九六年
法儀孩児 寛政九 年二月廿五日 ※寛政九年は一七九七年

※一葉観音菩薩とは、水に浮かぶ一枚の蓮の葉の上に、左膝を立てて左手を置き、右手を蓮の葉について座る姿で表される観音。道元が日本に帰国するときに暴風雨に遭遇するが、観音経を唱えたら一葉観音が現れて道元を救ったとの説話がある。
一葉観音菩薩の像が刻まれた石仏は珍しく、市内ではここ勝林寺にしかないと思われる。

※禅宗では、開山は寺院を開いた僧侶、開基は寺院に大いに貢献したほどの在家の人をさす。ここにあげる梅岩勝林居士は開基の一人である。

86. 『祖師西来意』文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地 増林・勝林寺西側旧墓地 O 家墓所
石塔型式 板碑型（南東向き・高さは中）
年号 寛文元年（一六六一）

〔正面〕 于時寛文元年

祖師西来意 (鶴) 施主
宗椿 禅定門 敬白

辛 丑 八月吉祥日

※『祖師西来意』とは禅宗でみられる公案の一つである。公案とは仏法を究めさせるために参禅者に出された問題である。『祖師西来意』は「達磨大師が西のインドから中国にやって来たということはどういう意味か」という内容の問題である。祖師とは中国禅宗の開祖達磨大師。

※この岡安家の『祖師西来意』文字塔には「吉祥日」の文字が見られる。ゆえにこれは墓塔ではなく、公案に関する信仰上の貴重な石塔といえる。この石塔を建立した施主「宗椿禅定門」の禅宗（曹洞宗）に対する信仰の深さがうかがえる。

※山本泰秀氏によると、岡安家一族の先祖は、西の丹波国（京都府）の綾部郡岡安村よりこの地に来たという。

◎ K 家の『祖師西来意』文字塔

〔K 家墓所にも、O 家より二年前の万治二年（一六五九）に建立された『祖師西来意』文字塔（板碑型）がある。長い年月にわたって

雨風にさらされたため、表面が摩耗し不鮮明であるのが残念である。この石塔は、亡くなった家族の者への供養をかねた墓塔といえる。栗田家も岡安家と同様に禅宗に対する故人の信仰の深さがうかがえる。

祖師西来意 万治二年
玉林 寿銀 禅定尼

己 亥 霜月朔日

※『祖師西来意』文字塔は、市内ではここ勝林寺の二基と末寺の清涼院跡墓地北西塀側に関根内蔵助家の寛文年間墓塔（板碑型）がある。

87. 六十六部廻国塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地 増林・勝林寺西側旧墓地 I 家墓所
石塔型式 笠付角型（南東向き・高さは中）
年号 宝暦五年（一七五五）

〔左側面〕

喜顔慈見信女 宝暦七丁 丑 天 ※一七五七年
九月初八日

海雲照月信女 明和庚寅年 十一月廿二日 ※一七七〇年

〔正面〕

天下和順于時宝暦五 乙 亥 天 ※一七五五年
奉読誦大乗妙典廻国供養塔 明和三年 丙 戊 ※一七六六年

日月清明十一月吉旦 願主 心柳見外 三月廿一日

〔右側面〕 心海広円信士 安永三甲午正月廿日 ※一七七四年
半窓禅定尼 延享三年 丙 寅 九月初五日 ※一七四六年

〔裏側〕 武州埼玉群新方領増林村 甲 介 萬 壺 笠守 施主石井氏 次郎左衛門

88. 鳥八臼の墓塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地 増林・勝林寺西側旧墓地 T 家墓所
石塔型式 板碑型（北東向き・高さは高）
年号 寛文七年（一六六七）

〔正面〕

維寛文七丁 未 天

姉崎為應 順禅定尼 菩提也 五月念八日

※「念」は、「廿」(にじゅう・ネン)と音が同じなので「廿」(二十)の代わりに用いた。それゆえ「念八日」とは「廿八日」のことである。

※増林にある曹洞宗寺院の勝林寺の墓地に、石仏愛好家の間で呼ばれている「鳥八日(うはつきゅう)」の印が刻まれた墓塔がある。「鳥(鳥)」と「八」と「日(旧)」の三つの字からなる「壽」や「鶴」「鶴」「鶴」などの印である。この印は墓塔の上部に刻まれ、室町時代末頃より江戸時代中頃までの主に曹洞宗の墓塔に全国的に見られたという。そして、立正大学の久保常晴氏によると、随求陀羅尼の中の「瑟鷓布羅耶莎賀」の「瑟鷓」(「成就吉祥」と訳される)から由来するとしている。その他にもさまざまな説があり、いまだにはっきりしていない。

市内での「鳥八日」の例としては、同じ曹洞宗の野島浄山寺の墓地や小曾川二六六の中島家そば共同墓地などにみられる。

これは「鳥八日」の印が文の中に組み込まれている珍しい例である。「鷓」は「鳥が物をついばむ」という意味があり、「鳥八日」は、屍を林の中に捨て、鳥に鷓(ついで)ませて空に帰るとの意味で用いたとの説がある。この説によればこの文は「応順禪定尼の為に鷓(ついで)む菩提也」と読むのであろう。「鳥八日」は印や記号ではなく、文字(漢字)を示す。現在は「鳥八日」を「鳥・八・白」の3文字を組み合わせた合字」とされているが合字ではない。鳥・八・白の3文字から構成されている鷓という一文字の漢字であり、「鷓字(たんじ)」とか「鳥八日(ちようはつきゅう)」と呼ぶべきである。鳥に死骸を食べさせる鳥葬が根底にあると思われる。

◎ T家の墓所に寛永年間の墓塔がある。

石塔型式 宝篋印塔型(南西向き・高さは中《八十五センチ》)

年号 寛永十六年(一六三九)

〔正面〕(塔身の下の基礎部分)

寛永十六年 卯 季 ※「季」は、「年」という意味。

妙 貞 禪 定 尼

八月十三日

89. 鳥八日の墓塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)
所在地 増林・勝林寺西側旧墓地 Y家墓所
石塔型式 双式板碑型(北西向き・高さは高)
年号 寛文六年(一六六六)

〔正面〕

寛文元丑天

○ 栄息禪定 尼

十月十五日

各靈位

寛文六丙 午年

真岩善正禪定門

四月十二日

※「鷓」は、「鳥八日」と呼ばれる印。

◎ Y家の墓所に寛永年間の墓塔がある。

石塔型式 宝篋印塔型(北西向き・高さは中《百十七センチ》)

年号 寛永元年(一六二四)

〔正面〕(塔身の下の基礎部分)

寛永元年 甲子

為 □ □ 禪 定 尼

十一月十九日 敬白

90. 元和二年の宝篋印塔墓塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 増林・勝林寺西側旧墓地 N家墓所

石塔型式 宝篋印塔型(南西向き・高さは中)

年号 元和二年(一六一六) ※越谷市内最古の墓塔

〔正面〕(塔身の下の基礎部分)

元和二年

為遊半 禪 門

十二月廿六日

※相輪部分(上部)が欠けていて不完全。

※鳥八日の墓塔がある山崎家墓所の勝林寺本堂寄りにある。

元和年間の墓塔としてとても珍しいものである。

市内で一番古い墓塔と思われる。
この石塔に関しては、昭和四十五年八月十五日発行の「広報こしがや」の中の「市史編さんだより」で明治大学教授の萩原龍夫氏(故人)によって紹介されている。市内無数にある中で発見したことに敬意を表す。
※なお、勝林寺近くの増林小学校そばの岡安家(増林二四九九)敷地内に変わった石塔がある。『三井大神文字塔』(自然石)である。表面は「三井大神」、裏面は「明治四十四年五月廿五日 三井病院、入院九月廿日 快退院、岡安友之助」と刻まれている。

東京の三井病院に入院して全快したことが、まるで三井病院が神様のようか思えたのであろう。感謝の気持ちでいっぱいであったのを、この石塔に神様として表したのである。

(23) 岡安家(増林二七〇七) 路傍

91.「馬頭観音」文字塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)
所在地 増林・岡安家(増林二七〇七) 敷地内の十字路側角
石塔型式 駒型(南東向き・高さは低)
年号 文化十四年(一八一七)

〔正面〕

文化十四年正月吉日
〔梵字〕 馬頭観世音
願主 岡安平八

35.9096、139.8184

(24) 岡安家(増林二一三六九) そば路傍

92.道標付き「馬頭観音」文字塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)
所在地 増林・岡安家(増林二一三六九) そばT字路南隅田んぼ側
石塔型式 駒型(向きは不明・高さは低)
年号 安永三年(一七七四)

〔左側面〕

右 こしかや道

〔正面〕

安永二己六月五日

馬頭観世音供養塔

安永三年九月十九日

〔右側面〕

左ふとうそん道

35.9085、139.8157

(25) 宮川家(増林三一七四) 路傍

93.「馬頭観音」文字塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)
所在地 増林・宮川家(増林三一七四) 敷地南角地の道路際
石塔型式 駒型(南東向き・高さは低)
年号 文久二年(一八六二) 壬戌

〔正面〕

文久二戌年

馬頭観世音

八月吉日 中嶋新助

(26) 増林下組地藏堂

94.「馬頭観音」文字塔(『越谷市金石資料集』馬頭二番)
所在地 増林・地藏堂
石塔型式 隅丸角型(南西向き・高さは低)
年号 文化四年(一八〇七)

〔正面〕

文化四年

馬頭観世音

吉日 ※「金石資料集」では「八月」と記載

(27) 山崎家(増林三一一九〇) そば路傍

95.百観音巡礼塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)
所在地 増林・山崎家(増林三一一九〇) 前道路反対側東寄り路傍
石塔型式 駒型(南西向き・高さは低)
年号 寛政五年(一七九三)

〔正面〕

寛政五癸丑年

(観音梵字)

秩父 戒進

(阿弥陀梵字)

奉納西国為二世安樂也 平六

(勢至梵字)

坂東 弥五左工門

三月吉日 治郎八

35.9082、139.8210

35.9085、139.8211

35.9062、139.8198

◎岡安家(増林二一三六九番) 前の路傍には昭和四十年四月に建立の「馬頭観世音守護」と刻まれた石塔がある。
◎この近くに大神宮の祠があり、その前に「沖治霊神」と刻まれた明治三十三年十二月に建立の石塔がある。

※山崎家屋敷は、元は道路反対側路傍の石塔が立っているあたりにあったという。なお、この石塔の奥には、かつて虚空蔵堂が建っていた。

(28) 増林下組香取神社

山本泰秀氏によると、この神社のそばに屋号が「根郷(ねごう)」と呼ばれる家がある。このあたりは増林村の発祥地かもしれない。また、この神社の西側、地藏堂の東側には虚空蔵堂があった。

96・敷石供養塔(『越谷市金石資料集』普請供養三〇番)

所在地 増林・増林下組香取神社

石塔型式 駒型(南西向き・高さは中)

年号 嘉永五年(一八五二)

敷石 名倉弥五左エ門

山崎平左エ門

中嶋惣右エ門

世話人 小川勘右エ門

〔正面〕

敷石 供養塔

〔右側面〕

嘉永五年十一月吉日

(29) 下組集会所(宝蔵院跡地)

ここは、今では寺院がなく墓地のみとなっているが、かつては「宝蔵院」と呼ばれる寺院があったところである。

なお、弘法大師の石像が祭られている祠そばの向かって左奥に「天満宮力石」と刻まれた力石がある。

また、もう一つの隣の祠(鞘堂)には不動三尊像の石仏が祀られている。

97 文字庚申塔(『越谷市金石資料集』庚申塔二二九番)

所在地 増林・宝蔵院跡地(下組集会所)

石塔型式 頭部山状角柱型(南東向き・高さは中)

年号 文化八年(一八一二)

世話人

太郎兵衛 定三郎左エ門

文化八年

新左衛門 平太郎右エ門

弥五左エ門 清兵衛

庄右エ門 儀右エ門

与惣右エ門 惣左エ門

〔正面〕

(日月) 庚

申

(三猿)

35.9084、139.8221

35.9077、139.8227

〔右側面〕

世話人 吉左エ門

権平 庄蔵

三月吉日

新助 伝十郎

権兵衛 兵左エ門

五郎左エ門 源八助

次右エ門 利八

98・青面金剛像庚申塔(『越谷市金石資料集』庚申塔六三番)

所在地 増林・宝蔵院跡地(下組集会所)

石塔型式 駒型(南東向き・高さは中)

年号 享保元年(一七一六)

享保元年 丙申 十月吉日

〔正面〕

(日月) 青面金剛像(鬼)(三猿)



奉建立庚申講成就所 念仏同行四十八人敬白

※「念仏同行四十八人」と読まれやすいが、「四十八人」の「ホ」は「十八」が重なったものである。四十八誓願を立てて極楽浄土に生まれ変わったのが阿弥陀如来とされている。そのため念仏を唱える人数を四十八誓願にあわせて四十八人にするがあった。

99・青面金剛像庚申塔(『越谷市金石資料集』庚申塔一六九番)

所在地 増林・宝蔵院跡地(下組集会所)

石塔型式 駒型様角型(南東向き・高さは中)

年号 寛政二年(一七九〇)

源

利右エ門

治良八

庄右門 林蔵

寛政二 庚戌 歳

〔正面〕
〔日月〕 (青面金剛像) (二鶏) (鬼) (三猿)
〔右側面〕

浅右工門
徳兵衛
三左右門
太良右門
与左衛門
正月吉日

(30) 白山神社

毎年一月二十日に地元の氏子によって「白山おびしゃ」が行われている。かつては、齒の病を治す神様として盛んに信仰されていた。

100 道標付き「白山権現」文字塔 (『越谷市金石資料集』白山一番)
所在地 増林・白山神社(増林四四一〇)そばの県道路傍
石塔型式 頭部山状角型(東向き・高さは中)
年号 明和八年(一七七二)カ

〔左側面〕
辛 卯 正月吉日

白山大権現

増林村
下組

〔右側面〕
是より内ごんげん道

※県道の白山神社入口角地にある白山神社への手引き石である。

白山神社の境内地に長い間あったこの石塔は、平成十二年一月に県道の白山神社入口角の現在地(増林四五三三の石井家側角地)に移転したが、元は増林四四〇四の石井家側の方の県道の白山神社入口角地にあったものである。古利根川には白山河岸があった。

「金石資料集」の白山一番に掲載され、年号は明和八年とされている。なお、この資料集によると所在地が増森となっているが、増林の誤り。

101 向かい夫婦の奉納石塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 増林・白山神社境内
石塔型式 駒型(南向き・高さは中)
年号 天保九年(一八三八)

〔左側面〕

天保九 戌 年十二月吉日

〔正面〕
〔日月〕 (互いに向き合い
拜んでいる夫婦)
〔裏面〕 願主 鉄五良
納 奉
りせ
とく
たけ

※男女がいることから、正面を向いた男女が手を握り合って睦ましくしている信州の双体道祖神を連想する。また、合掌していることから神仏に向かつて合掌して願かけする願い絵馬を連想する。信州の双体道祖神の形体に影響を受けて男女夫婦が描かれ、願い事かなえられるようにと願い絵馬の影響を受けて男女夫婦が願掛けをしているものと推測できる。上部に日月が描かれているのはよく見られる庚申塔の日月の形体を真似たものであろうか。

(31) 古利根川の土手道 路傍

102 水神宮石塔祠 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)
所在地 増林・古利根川の土手道路傍(白山神社の東)
石塔型式 祠型(北々東向き・高さは中)
年号 正徳四年(一七一四)

〔正面〕
(不詳)
〔裏面〕
正徳四甲 午天
※この祠はかつては堤外地(河原側)にあったもの。ご神体は不明。

水神宮

造立

正月十一日之鎮座

※名倉浩志氏が聞いたところによると、「この水神様は、昭和22年のキャサリン台風で(上流から)この地に流れ着いた」とのことである。

(32) 夕倉倉家(増林三二六九) 邸内

103 「神明宮」文字塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)
所在地 増林・名倉家(増林三二六九) 邸内
石塔型式 祠型(南東向き・高さは中)
年号 寛政八年(一七九六)

〔左側面〕
寛政八 丙 辰十二月吉日
「台石」

35.9073、139.8247

35.9070、139.8262

35.9057、139.8236

〔正面〕

神明宮

増林下組
世話人
名倉太良兵エ
同 与惣左門
今井吉左工門
石井権平
名倉喜左工門
今井忠兵衛

(33) 千代田橋そばは土手下

104・「馬頭観音」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地 増林・千代田橋南東詰めの土手下

石塔型式 頭部山状角型（南東向き・高さは低）

年号 天保十三年（一八四二）

〔左側面〕

天保十三寅年十月吉日

〔正面〕

馬頭観世世音

増林二子曾根

山崎治右工門

※こは、二子曾根といわれる地で、せんげん堀（新方川）に架かる

千代田橋は、以前は二子曾根橋と呼んでいた。

105・道標付き「水神宮」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地 増林・千代田橋南東詰めの土手下

石塔型式 駒型（南東向き・高さは低）

年号 文化三年（一八〇六）

〔左側面〕

橋向 左

橋向 ば、わたし

〔正面〕

文化三丙寅年正月吉日

水神宮

向ふどふミチ

〔右側面〕

願主 重蔵

松ぶし 道 千太郎
直右衛門

35.9010、139.8140

※ばは渡し道、不動道、松伏道の文字が刻まれた道しるべを兼ねた石塔。
※土手下の二基とも栗原家が管理。もとは、新方川

が拡張される以前の千代田橋の南東側の旧土手の上にあった。

へばは渡ししと不動道（ふどうみち）

「ばは渡し」は増林村と対岸の上赤岩村を結ぶ古利根川にかかる渡しであった。林泉寺と勝林寺の間から勝林寺よりであった。「ばは渡し場」の「ばは」は、耳で聞くと「婆」を連想してしまう。そのためか、単に「渡し場」、あるいは地元が中組なので「中組の渡し場」ともいう。「ばは渡し場」の「ばは」の由来は不明である。婆さんが渡し場にいたからの言い伝えもあるが、もともとは「馬場」という意味だったのかもしれない。勝林寺の第二十六世山本敬秀の御祖母である山本千代氏によると、大正の頃は、渡しの料金は往復で大人三錢、子供一錢で、自転車は十錢であったという。地元の中組の人たちは、年に二回、秋に米（玄米）三升、夏に麦（殷麦）六升を納めたので渡り賃なしで渡れたという。

千代田橋（旧称、二子曾根橋）そばに道標（道しるべ）が刻まれた石塔がある。その石塔に、ばは渡し道、不動道、松伏道の文字が刻まれている。栗原家が管理している。もとは、新方川が拡張される。

以前の千代田橋（旧称、二子曾根橋）の南東側旧土手の上にあった。この石塔に刻まれている「橋向左ば、わたし（橋向こう左、ばは渡し）」とは、橋（二子曾根 橋）の向こうの道が古利根川にある「ばは渡し場」に通じる道であることを示している。橋を渡るとすぐに分かれ道（今はない）になっているが、向かって左の道（今はない）を多少蛇行しながら真北に進んで行く。するとかつての古道に突き当たる。それを左に曲がる。すると間もなく現在の新道（平方東京線）と合流する。さらに六十メートル先に進み、右に曲がり古利根川に通じる道を進む。突き当たりの土手が渡し場跡で、向かって左側あたりに屋号が「渡し場」と呼ばれた古利根川の渡し守をした人（現在は他所に移転）がかつて住んでいた所である。渡しは、戦後のカスリン台風が関東を襲った昭和二十二年（一九四七）頃まで行われていた。川原の渡し場跡東隣には現在二十本くらいの松が川に平行して密集して並んでいるが、これは渡し場廃止後に植林したものである。また、「向ふどふミチ（向こう、不動道）」とは、橋を渡らずに南に向かう道が大相模の不動尊に通じる道を示している。今もその名残の道がある。この不動道を道なりにしばらく行くと、T字路となり、突き当たりは現在も稻荷宮を祭っている元荒川のそばに住む百木家である。ここから西に向かう道を進むと、元荒川にかかる「不動の渡し場」に行く。東に向かうと、森西川（もりにしかわ、増森村西川）や吉川に行くのである。

増林・増森の古利根川の渡し場



その他の渡し (増林村・増森村)

うま渡し=ばば渡しの下流、増森の観音堂墓地の北にあった。増林と対岸の下赤岩を結び、人の往来や馬の運搬がみられた。かつては赤岩渡しと呼ばれたと推定。増森側では対岸の下赤岩で農耕をするために使われたようである。渡し守は増森本田のすぐそばの須賀家。

さんこう渡し=馬渡しのさらに下流、現在の丹下製作所あたり。増森村と対岸の川藤村榎戸を結ぶ渡し。

明治十三年測量『迅速測図』

参謀本部陸軍部地図課と測量課による「越箇谷驛」「粕壁驛」の二つの『迅速測図』(縮尺二万分の一、明治二十一年再版)

《石仏に刻まれた「ばば渡し」と「赤岩渡し」》
古利根川にかかる赤岩方面の渡しとしては、増林村と上赤岩村とを結ぶ渡しと、その下流の増森村と下赤岩村を結ぶ渡しの二つがある。特に後者は明治十三年測量の迅速測図からわかるように、両岸に渡しにつながる道があるので江戸時代からの渡しであることがはっきりしている。

古老の話によると、上赤岩の方を「ばば渡し」下赤岩を「馬(うま)渡し」と呼んでいたという。増林2番の文化年間の石仏には「ばば渡し」の名が刻まれ、増森26番の同じく文化年間の石仏には「赤岩渡し」の名が刻まれている。同時期に刻まれているので「ばば渡し」と「赤岩渡し」とは別である。「ばば渡し」の方は、古老から増林と上赤岩とを結ぶ渡しであると断定できる。するともう一方の「赤岩渡し」の方は、その下流にある「馬渡し」に違いないと結論付けたわけである。

さらに以上の考えを裏付けるものとして、「ばば渡し」の文字が刻まれた石仏は増林に限られ、「赤岩渡し」が刻まれた石仏は増森に限られていることである。「ばば渡し」は増林村とかかわりが深く、「赤岩渡し」は増森村とかかわりが深いと考えるのが自然である。

しかしながら松伏町教育委員会では、上赤岩にある「ばば渡し」を「赤岩渡し」と断定している。赤岩渡しと呼ばれていたのかも知れない。今後の検討課題。

(34) 城ノ上稲荷神社

106 文字庚申塔(『越谷市金石資料集』庚申塔一九八番)
所在地 増林・城ノ上稲荷神社(城ノ上記念会館)
石塔型式 頭部山状角型(南東向き・高さは高)
年号 寛政十二年(一八〇〇)
[左側面] 寛政十二年庚申年
初庚申日

[正面] 講
[右側面] 講
[右側面] 講

(日月) 青面金剛 (聞か猿) (見猿) (言わ猿) 中

[右側面] 武州崎玉郡増林村 城之上組

107 道標付き「馬頭観音」文字塔(『越谷市金石資料集』馬頭五四番)
所在地 増林・城ノ上稲荷神社(城ノ上記念会館)
石塔型式 駒型様角型(南東向き・高さは低)
年号 不詳

[左側面] こしかや

[正面] (梵字カン) 馬頭観世立百

[右側面] 不動道

(35) 須賀家(増林一四)そば排水路
108 「権現宮」文字塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)
所在地 増林・須賀家(増林一四)そば排水路
石塔型式 笠付き角型(南東向き・高さは中) ※元は南西向きだった
年号 明和四年(一七六七)

[左側面] 明和四丁亥年
[正面] 権現宮
[右側面] 八月吉日
入口にあって、林
参道にあって、林
寺の北側にあり、泉
清伝寺の地蔵像の
北側にあり、泉寺の
向かって左奥にある。

※須賀家敷地あたりは、清伝寺跡地である。この石塔は、須賀家の東側、すぐ近くにある水路の二股に分かれた所の二つの水路にはさまれた地点に置かれている。このあたりは、かつては通称「よめ屋敷」と呼ばれ(小島初治氏)、この石塔はこの屋敷の守り神だったのかもしれない。
※この「須賀」の読み方は、周辺の「すか」と違って「すが」と濁る。

35.9028, 139.8087

35.9067, 139.8077

(36) 百木家(増林五六三)敷地内

109 道標付き文字庚申塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)
所在地 増林・百木家(増林五六三番)敷地内・稲荷祠そば
石塔型式 頭部山状角型(南向き・高さは中)
年号 寛政十二年(一八〇〇)
[左側面] 寛政十二年庚申十一月吉日
左吉川道増林村西川

[正面] 青面金剛 (三猿)

(日月) 青面金剛 (三猿)

[右側面] 右ば、ハたし

のだ道

※吉川や古利根川に架かる「ばば渡し」などに行くための道しるべを兼ねた庚申塔である。この庚申塔は他の場所から現在地に移されてきたと思われる。移される前の本来の位置は、千代田橋(旧称、二子曾根橋)より南に向かう道を道なりに来ると百木家そばのT字路に突き当たり、このT字路の北東角あたりであったと推定できる。この庚申塔に刻まれた道標「左、吉川道・増林村西川」とは、この庚申塔を造立した場所が増林村西川で、T字路からこの庚申塔の左側に(向かって右に)、つまり東方面に進むと吉川に通じる。また「右、ば、ハたし(ばば渡し)」とは、この庚申塔の右側に(向かって左に)、つまり北方面に進むと、「ばば渡し」や野田に通じるのである。
「ばば渡し」については105番の解説文を参照のこと。

(37) 山崎家(増林五六六)邸内

110 道標付き猿田彦文字庚申塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)
所在地 増林・山崎家(増林五六六番)邸内
石塔型式 頭部山状角型(東向き・高さは中)
年号 文久三年(一八六三)

[左側面] 文久三癸亥年 西川 □ □ 山崎 □ □ 工門(弥左工門)
同 百木平 □ 工門
同 山崎七 □ 門(七郎右工門)

[正面] 亥九月吉日

[右側面] 左 吉川流山 山崎 □ □ 同 定四良 ※のた・野田
のた今上 道 同 伊兵エ ※今上・江戸川
百木平兵エ の渡し場

35.8947, 139.8112

35.8953, 139.8142

旧増森村の石仏

(1) 観音堂菩提地

昔は真言宗寺院の観音寺があった所で、かつては「武蔵三十三箇所」の観音霊場の三〇番に当たっていた。「武蔵三十三箇所」の札所めぐりは、一番の延命寺(吉川市吉川一五四)から始まり、三三番の東泉寺(吉川市川藤三二〇)で終わり、吉川市、三郷市、葛飾区、八潮市、足立区、川口市、越谷市、松伏町に及んでいた。最近までこの地に観音堂が建っていたが、平成十年に宝正院に移転され、新しく建て替えられた。

1. 敷石供養塔(『越谷市金石資料集』普請三七番)
所在地 増森・観音堂墓地
石塔型式 自然石(南向き・高さは中)
年号 天保十一年(一八四〇)

〔正面〕

敷石供養塔

増森村世八人
中村権左エ門
森田新兵エ
岡田弥二右エ門
中村伊兵エ
鈴木作右エ門
百木平兵エ
山崎嘉右エ門
富沢仁右エ門
林源七
同茂右エ門
立沢権兵エ
内田紋右エ門

あらんかきりや
名は残るへき
侶雲

〔裏面〕

天保十一年九月吉日

※参考までに、この石塔を造立した人々の現在の子孫をわかる範囲であげると、次の通りである。

岡田弥二右エ門
鈴木作右エ門
百木平兵エ
富沢仁右エ門
林茂右エ門
内田紋右エ門

35.9061、139.8300

※なお、ここにあるはずの『金石資料集』掲載の「真言一一番」「月待六番」の石塔や「越谷ふるさと散歩(下)」掲載の文政元年の「普門品一万五千巻供養塔」の所在が不明である。

《汎汎揚場跡し馬渡し揚場跡》
観音堂の西側の道を挟んで反対側にかつては増森村の役場があった。そこでこの道を「役場道」とも呼んだ。この道の突き当たりに古利根川がある。ここに対岸の下赤岩とを結ぶ「馬渡し」と呼ばれた渡し場があった。人の往来の他に馬の運搬も見られたから名付けられた。渡し守は増森の須賀家が務めていた。

◎「香取宮」標識石塔(『越谷市金石資料集』その他一三番)
平方東京線の県道で増林から増森にはいるとすぐ右に分かれる道路がある。増森村に入る道である。入って百メートル程進むと左手に村で管理している香取宮の小さな祠がある。ここに一見すると力石のようにみえる年代不詳の「香取宮」と刻まれた標識石塔がある。

(2) 河原崎の内田稲荷

内田稲荷は増森一四七五の須賀製作所の西側路傍にある。

2. 板碑型文字庚申塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)
所在地 増森・須賀製作所(増森一四七五)そば路傍
石塔型式 板碑型(南向き・高さは中)
年号 寛文七年(一六六七)

〔正面〕

寛文七年
施主
九月吉日
欽白

◎不詳の石塔

このそばに、この庚申塔と向かい合った祠型の主尊不明の石塔がある。高さ五十センチ位、幅二十五・五センチ、奥行き二十二センチの大きさで、表面は文字が不明であるが、左側面には「元禄十四辛巳 九月九日」と刻まれた年号が読みとれる。

(3) 宝正院

江戸時代は東正寺(とうしょうじ)と呼ばれていた。明治四十四年(一九一)に増林の宝蔵院(現、下組集会所)を合わせ、宝蔵院の宝と東正寺の正をとって現在名の宝正院(ほうしょういん)に改めた。

35.9053、139.8314

35.9065、139.8339

なお、東正寺はもと東照寺と書いていたが、日光東照宮と恐れ多くも字が一部同じなので江戸幕府によって東正寺と改められたという。

3. 『高地蔵尊』石仏（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地 増森・宝正院の旧参道入口
石塔型式 丸彫り型（南向き・高さは超高）
年号 宝曆六年（一七五六）

〔左側面〕 一合石
一玉厩階第八
龍佳末丙子
一合石
〔正面〕 二田外萬靈
〔右側面〕 三村念仏
講中欽言

※今でも地元では安産の仏様としての信仰が続いている。高地蔵の名前のいわれは背がとても高い地蔵だからであろう。
※また、ここは以前は宝正院の参道入口であった。

4. 『馬頭観音』文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地 増森・宝正院
石塔型式 上部隅丸角型（南向き・高さは中）
年号 延享二年（一七四五）

〔左側面〕 鈴木七兵衛
富沢勤右エ門
岡田次左エ門
鈴木□次郎
延享二乙丑年 講中
〔正面〕 普門品
（梵字カン）馬頭観世音菩薩
→万巻供養
〔右側面〕 九月吉日

※昭和63年完成した無縁仏の石塔群三群の内、中央部群の前から四列目、左から七番目にある。無縁仏の中に埋もれてしまったのは残念である。

※最前列に高さ33cm駒型の「馬頭観音」文字塔が追加安置されている。
左側面に「昭和□十七年二月」と刻まれている。□は「二」か。
※同じく追加された年代不詳の高さが45cmの駒型の庚申塔が最前列にある。
図案は108頁に提示した。

◎この近くの林家の墓所に文化元年（一八〇四）の次のように刻まれた笠付きの墓塔がある。（観音堂裏墓地の三列目）

文化元年 子歳
清寿院殿観心性蓮大尼靈位
三月廿二日
※竿石の部位に上記の文字が刻まれている。竿石の石質と他の部分の石質は違っている。

文化元年 甲子 歳
三月 廿二日
清壽院殿観心性蓮大尼靈位

戒名に「院殿」が付いていることから『越谷ふるさと散歩(下)』の93頁に、「伝えによると増森のある娘がお城に上がり、殿様の側室になったといわれ、その人の供養墓石ではないかともいわれるが、詳しいことは不明である。」と紹介されている。

5. 普門品供養塔（『越谷市金石資料集』普門品三一番）
所在地 増森・宝正院境内（元は観音堂墓地にあった）
石塔型式 自然石（西向き・高さは超高）
年号 嘉永七年（一八五四）
〔正面〕 「台石正面」
當所講中

嘉永七年九月吉祥日
富沢半兵衛
鈴木源兵衛
林源太郎
金子源左衛門
富沢仁右衛門
林太兵衛
同源七
関口吉十郎
中村幸七
林藤右衛門
同茂右衛門
鈴木佐兵衛
須賀武次右衛門
小島武兵衛
大和田仲右衛門
小島善兵衛

門 普 供 養 塔

草眠書印團

鹿倉四郎右衛門
富沢八右衛門
中村權次郎
小島惣右衛門
鈴木喜平次
同 郡次郎
須賀伊助
富沢佐兵衛
鈴木平右衛門

新西国第三十番

「台石 右側面」

世話人

鈴木七兵衛

関口定右衛門

日光道中

越ヶ谷宿

石工長兵衛作

(4) 「消防団増林分団第七部」(増森一六五七) 路傍

6. 「大日様」石仏(『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 増森・「消防団増林分団第七部」(増森一六五七) 路傍

石塔型式 上部丸型(南東向き・高さは中)

年号 寛文三年(一六六三)

〔正面〕

文長法師

(大日如来像カ)

寛文三年三月□

※菩薩形をした仏像である。地元では「大日様」と呼んでいる。印相

は、手のひらを上向きにしてすべての指先を上方に向けた両手をへそ

のあたりで指の背側で合わせている。大日如来が結ぶ法界定印ではな

いが、法界定印のつもりで刻まれたものであるか。

また、「文長法師」とは何を意味するのか不明である。

※かつてこの近くに流れていた「古利根川」(現在は工業団地となっ

て、川跡の名残は全くない)の川の中より見つけたものと伝えられて

35.9039、139.8321

いる。増森村と川藤村の間には、かつては古利根川が流れていて、増森村は木綿布の晒業が盛んであった。現在の流路に河川改修してからは廃れた。中村栄一氏の曾祖父である作蔵は、農業や晒業を営むかわら、この古利根川で川魚を捕っていたが、漁の最中にこの石仏が網に引っ掛かったと伝えられている。以後、痰をきってくれる痰の仏様としての信仰が一部で見られたという。(以上はこのそばに住む「現在」他所に移転「中村栄一氏からの聞き取りである。)

◎「浜子神社」文字塔

所在地 増森・富沢家(増森一六六五)

石塔型式 祠型(南東向き・高さは中)

年号 明治四十四年(一九一〇)

〔正面〕

濱子神社

中子氏

〔右側面〕

明治四拾四年拾月再建

※中村家の近くの富沢家(増森一六六五)は、東照寺(現、宝正院)の前にあるので地元では屋号を「寺前(てらまえ)」と呼んでいる。この富沢家前の道路に面した祠に濱子明神の石塔が祭られている。この石塔の幅は一八・五センチ、奥行き一八・五センチで、台石を除く屋根の部分も含めた高さは七〇センチである。また、その石塔の下にある二つの台石を含めた総高は八七・五センチである。なお、宝正院の近くには「寺脇(てらわき)」と呼ばれる屋号の家もある。

「越谷市金石資料集」の「その他十二番」の石塔は、「浜子神社」と「氏子中」と刻まれた祠型(八〇×一五×一五)とされ、年代が不詳、所在地が宝正院裏路傍となっているが、この「その他十二番」の石塔は、この富沢家の石塔のことをさすのであろう。

《濱子明神のいわれ》

富沢源七氏(明治三十六年生まれ)からの聞き取り調査(平成十二年八月十七・十八日)によると、浜子明神のいわれは次の通りである。明治の頃、古利根川で漁をしていた富沢沖次郎(おきじろう)氏が偶然に網にかかった木造の神様の像を手に入れた。場所は中村家(増森一六五四)よりさらに上流の東から南に曲流したあたりと思われる。そして近くの畑地に安置した。地元では「明神様」と呼ばれた。増林

村の城ノ上に住む先達を勤めていた戸張氏によって「孫子大明神」と命名された。その後、源七氏が六歳位の頃(明治四十二年頃)に富沢家の敷地に移されたが、この木像は朽ちたので、明治四十四年に木像から現在の石塔にかわった。地元での信仰が盛んで、毎月一日と十五日に宝正院に参拝した帰りに立ち寄ってお参りする者もよく見られた。また、毎年十月二十八日に地元の人々によって持ち回りで講が開かれていた。現在は地元の自治会館(増森本田会館)で十月の最後の日曜日に行われている。なお、源七氏の祖父は沖次郎氏の養子となっている。つまり沖次郎氏は源七氏の曾祖父に当たる。

《さんしゅう渡ししと榎戸渡し》

中村家の少し上流(東方)、現在の丹下製作所のあたりに「さんしゅう渡し」と呼ばれた渡し場があった。増森側の渡し場は、屋号が「ふなば(船場)」と呼んだ渡し守を勤めた富沢家(富沢家は、かつては増森一五六三に住んでいた)の前あたりにあり、対岸の降り口が、川藤村榎戸(えのきど)の山崎家(吉川市川藤四四〇一、屋号は「うしろっぱ・後端」)の裏あたりであった。江戸時代の「榎戸渡し」は現在の増森本田会館東側沿いにある南北の道路あたりと推測でき、また「越谷市民俗資料」52頁に《サンコわたし(三公わたし)とせきわたしは大正十二年の河川改修の時に廃止された。増森側(本田)で個人が経営していた。》と記載されている(秦野秀明氏)。榎戸渡しの少し上流50mにあった三公渡しは、江戸時代の榎戸渡しの代わりとなったのであろう。

《せい魚伝説》

なお、増森一七二六の小島専治氏(明治四十三年生まれ、平成十二年六月死去)からの聞き取り調査(平成十二年三月)によると、今はなき古利根川に残る言い伝えや増森本田の繁栄の様子は次の通りである。榎戸の山崎家(川藤四四〇一、屋号は「うしろっぱ」)の裏の古利根川の榎戸側には、地元では「ふかんぼ」と呼ばれた水深数メートル程の深みがあった。また「深んぼ」から上流百メートル程は「せい魚(が)淵(ぶち)」と呼ばれ、せい魚(ぎよ)の伝説がみられる。この淵の主である「せい魚」と呼ばれる巨大な魚が住んでいたが、川が土砂の堆積で浅くなり住みにくくなったので、故郷を捨て東京の隅田川にある鐘ヶ淵に移り住むようになった。ところがこのせい魚が鐘ヶ淵を通る船を転覆させ沈めるようになった。そこで、鐘ヶ淵を通る船は必ず「増森船(ましもりぶね)だよ」と言うことにした。すると「せい魚」は自分の故郷からきた船と思い込み、転覆させることはなく無事に通過することができたという。鐘ヶ淵は綾瀬川が隅田川に注ぐ地点のやや下流にあり、現在の墨田区立鐘淵中学校付近にあった。増森は、東京との交流が盛んであったからこのような伝説が生まれたのであろう。

《増森林本本田(ましもりほんでん)の繁栄出木》

増森は、大正から昭和の初めにかけては最盛期を迎えていた。松伏の醬油が松伏から江戸に運ばれる高瀬船がここを通過した。増森本田では晒し業が盛んであった。馬車で江戸の日本橋方面に運送され、後に「本田(ほんでん)晒業」と書かれたトーン車のトラックがこの周辺では初めて使用された。また駄菓子屋、醬油屋、酒屋等の店も所々に見られていた。こうして一時は「増森東京」とまで呼ばれるようになった。なお増森の晒業最後の廃業は昭和十六年の増森一六六三の富沢家であった。

《昭和以降の古利根川》

増森二九八の山崎高義氏(大正七年生まれ)からの聞き取り調査によると、明治の頃、この山崎家の裏(東側)に増森村の役場があった。役場と観音堂との間を通っている道を「役場道」ともいったという。そしてその頃、山崎高義氏の祖父の弟(山崎寛龍)は勝林寺(勝林寺の本寺である岩槻の福蔵寺のことと思われる)の住職であったという。また、かつて増森村の東側を流れていた古利根川について次の通り。

戦前、古利根川に「赤岩渡し」や「三公渡し」(少し下流に江戸時代の榎戸渡しがあった)や、その下流にも渡し場があった。増森神社の南三百mに屋号が「渡し場」と呼ばれて代々渡し守を務めた須賀家と屋号が「萬屋(よろずや)」とよばれて商売をしていた須賀家(増森二〇三四)があり、この両家の間の細い道に入るとすぐに古利根川の渡し場に突き当たる。現在はそこに幅広い東埼玉道路が通って、その名残は消えた。大正十三年頃、現在でいう増森の越谷市工業団地の北端から、中島の送水管のあたりまでを直線に掘って新川が完成すると、増森村の東側を曲流していた古利根川の水量が激減し、流れが穏やかになり、それまでの古利根川の様相が一変した。さんしゅう渡しの方からこの渡し場手前あたりまで、地元では「なっこぶし」と呼んだ植物が、川面に繁茂したという。その実をとって食べると甘かったという。らい魚も多

くいたという。現在はこの古利根川は埋められて昔の名残はない。

(5) 小島家(増森一七三三二) 取崩傍

参考: 猿田彦文字庚申塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 増森・小島酒店(増森一七三三二) 路傍

石塔型式 駒型(北西向き・高さは低)

年号 明治〇〇年

〔正面〕

〇〇〇〇年十月

猿田彦大紳

小島佐一郎



35.9038、139.8302

◎この近くの小和田家(増森一七二〇)入口にも高さ四十二センチ程の駒型の猿田彦文字庚申塔がある。正面には「大正二年 猿田彦大神 小和田由蔵」と刻まれている。

(6) 薬師堂 (慈光庵跡地)

ここは慈光庵の跡地である。ここには県の文化財の二十一仏板碑がある。また、毎年四月八日は薬師様の縁日で地元の人達によって賑わい、毎月二十一日は弘法大師の縁日で、地元の古老(現在は女性のみ)がここに集まり今でも細々と信仰が続いている。

7. 三界万霊塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 増森・薬師堂
石塔型式 駒型(北東向き・高さは中)
年号 延享五年(一七四八)
[正面]

三界萬靈有縁無縁乃至法界平等利益
(梵字カ) (地藏菩薩立像)

延享五年五月吉日 施主覚心法師
戊辰

8. 「馬頭観音」文字塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 増森・薬師堂
石塔型式 駒型(北西向き・高さは低)
年号 天保十二年(一八四一)
[左側面]

天保十二年九月吉日
[正面]
(梵字カン) 馬頭観世立目
[右側面]

施主 中村きよ
栗原□り
関口きく

9. 文字庚申塔 (『越谷市金石資料集』名号五番カ)

所在地 増森・薬師堂
石塔型式 笠付角型(北西向き・高さは高)
年号 万治二年(一六五九)

35.9026、139.8288

[左側面]

[正面]

万治貳天 己亥 敬

(梵字「サ」) 奉造立庚申講結衆未願成
二月吉祥日

[右側面]

□彼 同左右工門

小嶋市右工門
同内蔵助
小嶋市右工門
同左右工門

□田伝左工門

右工門 弥兵衛

□久兵衛
林又兵衛
和井田茂兵衛

森田□右工門
中村□右工門
□沢
同仁右工門
林□右工門
大久保庄兵衛

10. 道標付き文字庚申塔 (『越谷市金石資料集』庚申三〇六番)

所在地 増森・薬師堂
石塔型式 頭部山状角柱型(北西向き・高さは高)
年号 元治元年(一八六四)
[左側面]

[左側面]

「台石」

西こしかや

道

北ましはやし

[正面]

小島佐右衛門
中村又左衛門
林藤右衛門
同定吉
同太兵衛
鈴木喜平次
須賀伊助
立澤権兵衛
富澤八右衛門
小島善兵衛
須賀武次右衛門
鈴木七兵衛

栗原又四郎
山崎嘉右衛門
関口吉十郎
関島平八
富澤仁右衛門
林源太郎
鈴木平右衛門
小島武兵衛
鈴木源兵衛
中村幸七
林茂右衛門
黒田嘉兵衛
鹿倉四郎右衛門

庚申塔

〔右側面〕

東いの木戸

道

小島惣右衛門
鈴木佐兵衛
百木平六
富澤半兵衛
鹿倉八十八
見晴直蔵
内田紋右衛門

南よし川

元治元^甲 子年十月

※「いの木戸」とは榎戸（えのきど）のこと。地元では「いのきど」となまって発音していたことがわかる。

※この庚申塔を造立した人々の中で、子孫のわかっている人を参考までにあげると次の通りである。

富沢八右衛門
関島平八
富沢仁右衛門
林源太郎
小島武兵衛
林茂右衛門
黒田嘉兵衛
鹿倉四郎右衛門
小島惣右衛門
百木平六
富沢半兵衛
内田紋右衛門

11. 聖徳太子像（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地 増森・薬師堂
石塔型式 祠型（北西向き・高さは高）
年号 文化四年（一八〇七）

〔左側面〕

文化四^丁 卯年
五月廿二日

〔台石〕
内田忠兵衛
林又五郎
石井吉左門
富沢金蔵
須賀久蔵
中村藤左衛門
金子清蔵
辰沢権兵衛
中村次良兵衛

〔正面〕

（聖徳太子孝養像）

〔右側面〕

山崎源次郎
須賀幸七
前田吉右門
平林浅右門
中島久八
大塚清吉
内野平五良
会田孫七
渋谷文右門

12. 道標付き青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申一四六番）
所在地 増森・薬師堂
石塔型式 駒型（北西向き・高さは高）
年号 安永三年（一七七四）

〔左側面〕

安永三^甲 二月吉日 奇進村中

〔正面〕

右こしかや道

（日月）（青面金剛像）（二鶏）（鬼）（三猿）
左乃田山さき道

〔右側面〕

八右衛門
源七
□八
久左衛門
庄左衛門
平六
小平次
願主

※「乃田山さき道」とは、野田（現在の千葉県野田市）の山崎へ通じる道という意味。増森と山崎とは江戸の昔から交流がさかんであった。

13・道標付き文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申一三四番）

所在地 増森・薬師堂
石塔型式 変形角型（北西向き・高さは中）
頭部上面が平らな山状様角型

年号 文化十二年（一八一五）

〔左側面〕

赤岩わたし道

〔正面〕

文化十二年

講

（梵字ウーン）庚申中塔

十月吉祥日

中

〔右側面〕

榎戸わたしミチ

〔裏面〕

越ヶ谷 不動道

増森村

※増林109番（寛政年間）や増林105番（文化年間）の石塔に「ばは渡し」と刻まれているのが見られ、これは増林村と上赤岩村をつなぐ渡しのことであるから、赤岩渡しとは増森村と下赤岩村を結ぶ古利根川の「馬渡し」のことをさすと思われる。「馬渡し」（孫七渡し）は、渡し舟による人の往来の他に馬も運んでいたという。
榎戸渡しとは、増森村と川藤村の榎戸を結ぶ古利根川の渡しである。

14・道標付き「成田山不動明王」文字塔（『越谷市金石資料集』不動一三番）
所在地 増森・薬師堂
石塔型式 頭部山状角型（北西向き・高さは高）
年号 嘉永元年（一八四八）

〔左側面〕

嘉永元 申九月吉日

西 こしかや
大さかみ不動
東 赤岩わたし 道
の だ

〔正面〕

成田山不動明王

〔右側面〕

南 よし川 道

〔台石〕

小島金治良
鈴木朝之助
小島惣吉
富澤仁兵衛
鹿倉八十八
中村安右門
林仙蔵
金子由蔵

増森林村

四国 同行

黒田嘉平太
百木伊三良
山崎勇吉
小島平治良
富澤清兵衛
小島善蔵
関馬嘉兵衛
中村要吉

（7）増森神社

元は水神社といわれた増森村の鎮守である。

15・道標付き文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申一三五番）

所在地 増森・増森神社
石塔型式 頭部山状角型（南向き・高さは中）
年号 文化十三年（一八一六）

〔左側面〕

南 吉川 道

増森村三町野組世話人 中村吉兵衛
須賀伝兵衛

〔正面〕

文化十三 丙子年

(日月)庚申申塔

三月吉祥日

〔右側面〕

北 増 林 道

- 名倉徳右エ門
- 森田岡右エ門
- 同 藤右エ門
- 須賀五良兵衛
- 富沢友七
- 増田惣左エ門
- 山崎利 助
- 中村吉兵衛
- 須加太良兵衛
- 同 孫右エ門
- 内田弥兵衛
- 森田清 蔵
- 内田忠兵衛
- 中村庄左エ門
- 金子太良右エ門
- 須加伝兵衛

〔裏面〕

此方みちなし

※増森二一九〇〇の須賀傳次氏(昭和五年生まれ)からの聞き取り調査によると、この庚申塔は、もとは増森村三丁野の須賀家(増森二一九〇〇)と南東の隣家との敷地の境界線(この境界線にはかつて小道があった)の辺りにあり、須賀家の敷地にあった当時の大きな柚の木(今はその木の子孫がある)のそばの小道に面して、中村家の方を向いて(南西向き)建てていた。この小道は、昔は北は増林、南は吉川に通じていたのであろう。その後この庚申塔は、須賀傳次氏が小学校二年生の頃(昭和十三年頃)に現在の増森神社に移転されたという。※須賀傳次氏によると、この庚申塔に刻まれている増森村の「三丁野」(三丁野)の地名のいわれは、昔この地域には、初めは三軒しか家が無かったからという。すなわち、名前に「傳」がつく須賀家(増森二一九〇〇)、名前に「庄」がつく中村家、名前に「吉」がつく中村家の三軒である。この庚申塔に刻まれた名前の中の須賀伝兵衛、中村庄左エ門、中村吉兵衛が、その三軒にあたるのである。

参考までに、この庚申塔を造立した人々の子孫がわかるのは次の通り。

- 〔名倉徳右エ門〕
- 〔森田岡右エ門〕

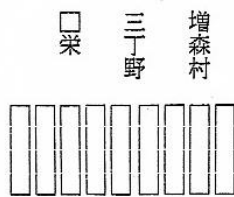
- 〔森田藤右エ門〕
- 〔須賀五良兵衛〕
- 〔富沢友 七〕
- 〔増田惣左エ門〕
- 〔山崎利 助〕
- 〔中村吉兵衛〕
- 〔須加太良兵衛〕
- 〔須賀孫右エ門〕
- 〔内田弥兵衛〕
- 〔森田清 蔵〕
- 〔内田忠兵衛〕
- 〔中村庄左エ門〕
- 〔金子太良右エ門〕
- 〔須加 伝兵衛〕

現在は小杉精機製作所の地となっている。

(8) 中村家(増森二四七) 路傍

16. 文字庚申塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)
所在地 増森・中村家(増森二四七) 路傍
石塔型式 駒型(東向き・高さは中)
年 号 宝暦四年(一七五四)

〔左側面〕



〔正面〕

宝暦四 甲 戌天

(日月)庚申申塔(三猿)

十月吉日

※向かって右隣に祠に入った高さ三十六センチの駒型の「水神天」文字塔が安置されている。昭和九年七月建立の石塔である。

35.8969、139.8256

17. 「三田八幡宮」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地 増森・中村家（増森二一四七）路傍
石塔型式 駒型（東向き・高さは中）
年号 天保十二年（二八四一）

三田八幡宮

〔右側面〕

天保十二年 丑年
六月廿六日

(9) 増森新田の稲荷社

18. 青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申八四番）
所在地 増森・増森新田の稲荷社
石塔型式 駒型（西向き・高さは中）
年号 享保十八年（一七三三）

〔正面〕

享保十八年

(日月) (青面金剛像) (鬼) (三猿)

八月吉日

19. 青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申一三八番）
所在地 増森・増森新田の稲荷社
石塔型式 駒型（西向き・高さは中）
年号 明和七年（一七七〇）

〔正面〕

(日月) (青面金剛像) (二鶏) (鬼) (三猿)

〔右側面〕

嘉右エ門 吉兵エ
与惣右エ門 清次郎 源右エ門
伊右エ門 伝次郎 庄八郎
喜七郎 伝六郎 吉右エ門
七郎右エ門 彦七郎 佐平治
利右エ門 勤兵エ 由右エ門

明和七 庚寅 三月吉日

58.8966、139.8252

20. 青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申三七番カ）
所在地 増森・増森新田の稲荷社
石塔型式 駒型（西向き・高さは中）
年号 不詳

〔正面〕

(日月) (青面金剛像) (二鶏) (鬼) (三猿)

九月吉日

※幅が約四十センチである。金石資料集の庚申塔三七番も同じなので、高さ百十センチ、幅四十センチの庚申塔三七番（元禄年間造立）かもしれない。

21. 道標付き青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申一九二番）
所在地 増森・増森新田の稲荷社
石塔型式 変形駒型（西向き・高さは中）
年号 寛政十一年（一七九九）

〔左側面〕

右ましはやし道
左こしかや

〔正面〕

(日月) (青面金剛像) (二鶏) (三猿)

〔右側面〕

寛政十一 己未 四月吉日

22. 「弁財天」文字塔（『越谷市金石資料集』弁天六番）
所在地 増森・増森新田の稲荷社
石塔型式 駒型（西向き・高さは低）
年号 天保九年（一八三八）

〔左側面〕

天保九 戊辰 四月吉日

〔正面〕

辨財  (財天) ※『金石資料集』によると、「辨財天」

※青面金剛の下の左手には、「シヨケラ」が描かれていたと思われる。

〔右側面〕

当村
別当 真正寺

※小さな祠の中に安置されている。すぐ近くには真正寺（しんしょうじ、現、増森新田センター）がかつてあった。真正寺は弁天社を所有していた。それを物語る石塔といえよう。

23. 「第六天」文字塔（『越谷市金石資料集』第六天・一番）

所在地 増森・増森新田の稲荷社（増森三一九の松井家より移転）
石塔型式 祠型（南向き・高さは中）

年 号 宝曆六年（一七五六）

〔左側面〕

宝曆六
子曆

〔正面〕 正月吉祥日

館下八十八人神宮白

〔右側面〕

松井清学院院长恵

※小さな祠の中に安置されている。もとは増森三一九の松井家にあった。屋号が『清学院』（清覚院）と呼ばれる松井家は、江戸時代に清学院（せいがかくいん）の住職を勤めていた家柄で、第六天社を祭り、また寺子屋も開いていた。右側面に刻まれた松井長恵も寺子屋の師匠として活躍したのであろうか。

明治六年になると松井雄宣は、増森の水神社・中島の村社等の神職を務む。さらに越ヶ谷の久伊豆神社の神職も務めたとの言い伝えも残る。

敷地内には、松井雄宣の墓石がある。そこには、

岡田勢以子 明治四年九月四日歿

前祠堂 松井雄宣之墓 享年四十歳

池田多計子

※岡田勢以子は松井の前妻、池田多計子は松井の後妻である。

と刻まれている。雄宣の前妻、後妻ともに名に「子」がついているので、家柄の高い身分の出であったと推定できる。

また松井家には、弁財天像、不動明王立像、役（えん）の行者（ぎょう

じや）と赤鬼・青鬼の像、松井雄宣氏の木像、それに中央に「梵字ア）東照宮大権現家康公」、左右両側に「元和二丙辰」「四月十七日」と刻まれた位牌（裏側には二代から七代までの徳川家将軍の戒名なども刻まれている）が安置されている。赤鬼は前鬼、青鬼は後鬼。

松井雄宣氏の後妻となった池田多計子は、菊の御紋（十六葉八重裏菊）がついたお盆を松井家に嫁ぐ時に持ってきている。

また、松井家の長屋門の前には元荒川が流れており、かつて將軍の鷹狩りの際に使われたという船着き場があった。長屋門を入った自宅も將軍の休息に利用されたと伝わる。古文書なども保管している。

（10） 増森新田センター（真正寺跡地）

ここは、かつて真正寺があった所である。

24. 百八十八箇所巡礼塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地 増森・増森新田センター隣の清水家墓所

石塔型式 頭部山状角型（南南向き・高さは中）

年 号 天明八年（一七八八）

〔左側面〕

三界萬靈一切衆生（梵字「ア」）善観法師靈位

〔正面〕

天明八 戊申 行者

（梵字サ）

（梵字キリク） 奉供養百八十八箇所二世安樂依

（梵字サク）

六月吉祥日

善観

〔右側面〕

明和九辰年

（梵字「ア」）清浄心連信士

六月十九日

※『越谷市金石資料集』に掲載の「庚申二一番」「庚申九七番」

「真言八番」の石仏石塔や『越谷ふるさと散歩（下）』一一六頁に

掲載の明和八年の「六十六部廻國供養塔」の所在が不明である。

これは、天明を明和、八十八を六十六に見誤ったの可能性がある。

25 光明真言供養塔(『金石資料集』真言八番)
所在地 増森新田センター

無縁仏群・最前列の向かって右

石塔型式 丸彫り仏像付角型(北北東向き・高さは中)
年 号 寛延元年(一七四八)

〔左側面〕

〔台石〕

願主

乃至法界 浄春

〔正面〕

寛延元戊辰天

(地藏座像) 奉建立光明真言供養佛

十一月吉祥日

〔右側面〕

孝子

平等利益 中嶋源右衛門

26 青面金剛像庚申塔(『金石資料集』に掲載なし)
所在地 増森新田センター

無縁仏群・前から2列目、向かって左から5列目

石塔型式 駒型(北北東向き・高さは中)

年 号 元禄十三年(一七〇〇)

〔正面〕

元禄十三

(日月)(青面金剛像)(鬼)(三猿)

(人名)

五名

十月吉日

※令和元年11月の現地見学で秦野秀明氏が無縁仏群の前列程の庚申塔 No. 26, 27 発見、後日の再調査によって No. 25, 28 の石仏もみつかると。大改修後の整然とした墓地のおかげで、記録に残すべき石仏の存在が4基程判明した。

27 青面金剛像庚申塔(『金石資料集』庚申塔二番)
所在地 増森新田センター

無縁仏群・前から3列目、向かって左から4列目

石塔型式 駒型(北北東向き・高さは中)
年 号 元禄七年(一六九四)

〔正面〕

申供養也

(日月)(青面金剛像)(複数の人名)(三猿)

元禄七 申 八月廿五日

28 文字庚申塔(『金石資料集』庚申塔九七番)

所在地 増森新田センター

無縁仏群・前から5列目、向かって左から4列目

石塔型式 駒型(北北東向き・高さは中)

年 号 元文三年(一七三三)

〔正面〕

(日) 天下泰平 元文三 戊 午 年

(梵字「アーンク」) 奉建立供養庚申講祈願成就處(三猿)

(月) 国土安全九月吉日 増森新田

※「アーンク」は胎藏界大日如来をあらわす。

(11) 古田家(増森二四八四) 敗路傍

吉田家(増森二四八四)の東側路傍に、昭和八年(一九三三)に遷宮されて祭られている雷電社と古峰神社の二つの祠が並んである。それらの祠の後ろには、「奉納 両社遷宮記念 氏子中」と刻まれた高さが約百六十六センチの記念碑が建っている。ここは江戸時代に「雷電社」が置かれていた地である。

また祠の前には二基の力石が置かれている。さらに、雷電社の祠のすぐそばには、「雷神宮」と刻まれた石塔がある。

29. 「雷神宮」文字塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 増森・吉田家(増森二四八四)の東側路傍

石塔型式 笠付角型(南向き・高さは低)

年号 安永二年(一七七三)

〔左側面〕

安永二癸巳歳四月吉日

〔正面〕

雷田 神 宮

※現在は、雷電(板倉町)・笠間・三峰の三社を祀る。

三社を参拝した後にお札を奉納している。

(12) 森西川集会所

増林村の西川に対して、増森村の西川という意味で「森西川」という。この集会所の南側に墓地がみられる。

30. 道標付き文字庚申塔 (『越谷市金石資料集』庚申二二五番)

所在地 増森・森西川集会所

石塔型式 駒型(南向き・高さは中)

年号 文化五年(一八〇八)

〔左側面〕

吉 川 道

〔正面〕

文化五 戊辰年 寄嶋組

(日月) 庚申 講中

西川組

(三猿)

三月吉日

35.8951、139.8191

35.8941、139.8243

〔右側面〕

越ヶ谷 道
大相模不動

〔裏面〕

榎戸 渡 の た道
赤 岩

※右側面では、越ヶ谷町や大相模の不動尊へ、左側面では、榎戸(えのきど)や赤岩渡し、野田への道しるべが刻まれている。

31. 十九夜念仏塔 (『越谷市金石資料集』月待八番)

所在地 増森・森西川集会所

石塔型式 駒型(北向き・高さは中)

年号 嘉永六年(一八五三)

〔左側面〕

嘉永六 丑 三月吉祥日

〔正面〕

嘉永六 丑 三月吉祥日
(如意輪観音像) 十九夜塔

〔右側面〕

〔台石〕

か さい ころ し きたき
ふ まん かつ かく

西川組 講中

く みる ね ね みる ね ね
く みる ね ね みる ね ね

32・名号塔（『越谷市金石資料集』名号六番）
所在地 増森・森西川集会所
石塔型式 笠付角型（南向き・高さは超高）
年号 寛文十年（一六七〇）

〔左側面〕

一千日廻向
（梵字サ）光明遍照十方世界念仏衆生撰取不捨

〔正面〕

一千日廻向
（梵字ニ）南無阿弥陀仏成蓮社辨誉上人 大円和尚
願 須放比丘
十 誉久念比丘
在家結衆七百余人
結衆寮坊主浄誉□心大徳

〔右側面〕

一千日廻向
（梵字サク）願以此功德平等施一切同發菩提心往生安樂國

〔裏面〕

一千日廻向
（梵字サク）南無釈迦牟尼仏 寛文十庚戌曆十月十五日

※石塔の全ての面には、奉納した人々の名前がすまなくびっしりと刻み込まれている。「廻向」は「回向」とも書く。

33 三猿庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申三番）
所在地 増森・森西川集会所
石塔型式 駒型（北向き・高さは中）
年号 寛文四年（一六六四）

〔正面〕

寛文四年
（見猿）
平左エ門 □左エ門
左エ門 □左エ門
（聞か猿）
左エ門 □左エ門
三左エ門 □左エ門
（言わ猿）
左エ門 □左エ門
新
十月吉日

※「三猿」のみ刻まれた初期の庚申塔である。三猿庚申塔としては越谷市内最古。

34 青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申一七番）
所在地 増森・森西川集会所
石塔型式 舟型（北向き・高さは中）
年号 貞享四年（一六八七）

〔正面〕

奉造立庚申堂結衆 欽
新光寺
伝左エ門
平兵衛
七郎右エ門
源七郎
久兵衛
忠左エ門
（日月）（青面金剛像）（二鶏）（三猿）
貞享四丁 卯 十月吉日 言

※「新光寺」の文字が見られる貴重な石仏である。これにより、ここは「真光寺」の跡地とわかる。寺名で「真」の字の代わりに「新」も使われたのであろう。この地にあつた寺院名を知る貴重な石塔と言える。

※これは、越谷市内最古の青面金剛像庚申塔である。これ以降、元禄年間からこの「日月・青面金剛・二鶏・三猿」の型式の庚申塔が越谷市内を含む日本各地でよくみられるようになる。

旧中島村の石仏

(1) 林家(中島一七九) 路傍

1. 青面金剛像庚申塔(『越谷市金石資料集』庚申一一二番)
所在地 中島・林家(中島一七九) 路傍
石塔型式 舟型様上部隅丸角型(南東向き・高さは中)
年号 寛延四年(一七五二)

〔正面〕

寛延四未年

(日月) (青面金剛像) (鬼)(三猿)

八月吉祥日

◎この近くの杉山家(中島一七六一二)の路傍に高さ五十六センチの自然石の馬頭観音文字塔(『越谷市金石資料集』馬頭三五番)が増森との村境にある。正面に刻まれた文字は次の通である。
一部破損していて読解不能の文字もある。

明治二三年
馬頭観世立音
七月

その後の令和二年八月の調査では、さらに破損され、その石塔の前にその代りとして新規の石塔が造立されていた。

(2) 中島神社及び正福寺跡

ここは、稻荷神社と諏訪神社の両神社(ともに中島村の鎮守、現在は合祀)と正福寺(しょうふくじ)と呼ばれる寺院があった地である。

2. 地藏像付き三界万霊塔(『越谷市金石資料集』名号一八番)

所在地 中島・中島神社

石塔型式 丸彫型及び角柱型(南東向き・高さは高)

年号 文化四年(一八〇七)

〔左側面〕

「一」台 石 「」

妙善法尼

刃嘗鮮山信女 享和元 四月廿四日 一八〇一年

本空童子 安永五申 三月十四日 一七七六年

〔正面〕

文化四丁 卯年 念仏講中

(地藏菩薩座像) 二二 甲外 苗内 雪並 ※三界とは欲界・色界

三月吉日 願主 善心 無色界。衆生が活動する全世界をさす。

〔右側面〕

周光童女 安永九子十月十四日 一七八〇年
教圓童女 天明六年九月十七日 一七八六年
是空童子 天明八申十二月廿二日 一七八八年

※戒名の頭に「刃」を付けるのは余程の事情があったものと思われる。
四人の愛する子を相次いで亡くした哀しみから刃を余儀なくされた母とその幼子女を弔って建立された石塔であろう。建立した人は善心であり、「刃」の文字を付けて「刃嘗鮮山信女(母の戒名)を作成した人は妙善法尼と思われる。

(3) 正福寺管轄の共同墓地

中島神社そばにあった正福寺が管轄していた共同墓地である。

3. 六十六部供養塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 中島・かつての正福寺管轄の共同墓地(中島二丁目五三)
石塔型式 頭部山状角型(北西向き・高さは中) 墓地入口入って右
年号 天明三年(一七八三)

〔左側面〕

宝曆二申五月十一日 安永九子天

梅伝心入信士 義田信士 三月五日

花応英雪信女 智鏡信女 天明元丑年 六月十三日

明和三成十二月廿七日

〔正面〕

(サ) 天下泰平天明三 卯年九月吉日 願主

(キリーク) 奉納大乘妙典六十六部供養塔 遠道

(サク) 国土安全武州二郷半領柳前村

〔右側面〕

秀岸清信女 宝曆十辰八月十七日

妙讚清信女 天明三卯六月二十八日

妙意比丘尼 宝曆八寅三月十三日

4. 地藏像付き念仏塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 中島・かつての正福寺管轄の共同墓地(中島二丁目五三)
石塔型式 上部丸型(北東向き・高さは中) 墓地入口入って右
年号 宝曆六年(一七五六)

35.8903、139.8348

〔正面〕

念仏講中 真入法師延享元子

八月朔日

(カ) (地) 蔵 善 薩 像)

宝曆六^丙子 九月吉祥日妙意比丘尼

(4) 小川家 (中島二一八九) 改路傍

5. 文字庚申塔 (『越谷市金石資料集』庚申一二七番)

所在地 中島・小川家 (中島二一八九) 路傍

石塔型式 駒型 (南西向き・高さは中)

年 号 宝曆九年 (一七五九)

〔正面〕

宝曆九^{己卯}季

(日月) 由庚申中^丑伏^庚養^辰塔

九月十三日

※このそばに高さ七〇センチの板碑がある。

6. 三猿庚申塔 (『越谷市金石資料集』庚申一五番)

所在地 中島・小川家 (中島二一八九) 路傍

石塔型式 駒型 (南西向き・高さは高)

年 号 貞享二年 (一六八五)

〔正面〕

(月) 貞享二^{乙丑}年

(梵字キヤ) 奉造立庚申講結願成辨伎

(日) 六月吉日

六郎兵へ	彦四郎
弥兵へ	作兵へ
新右門	庄九郎
七郎右エ門	善兵へ
安兵衛	弥五兵衛 (三猿)
五郎兵へ	長左エ門
武四郎	長七郎
兵左エ門	四郎兵へ
武左エ門	弥五右エ門

※梵字キヤは、十一面観音菩薩をさす。

江戸時代の初期の庚申塔の主尊は阿弥陀如来であったり、地藏菩薩であったりして、主尊が一定していない。寛文年間 (一六六一〜七二二) の頃から庚申様の主尊が青面金剛 (梵字はウン) となる庚申塔がみられてくる。この庚申塔は寛文以降であるが、初期の庚申塔の特色がみられる貴重なものといえる。

35.8897、139.8347

7. 青面金剛像庚申塔 (『越谷市金石資料集』庚申六〇番)

所在地 中島・小川家 (中島二一八九) 路傍

石塔型式 駒型 (南西向き・高さは中)

年 号 正徳四年 (一七二四)

〔正面〕

(梵字) (日月) (青面金剛像) (二鶏) (鬼) (三猿)

同行三拾人
正徳四^{甲午}天 九月吉日

《中島橋について》

中島橋の北詰めに、高さ百センチの自然石の記念碑がある。かつてはこの碑が建っていたところに元荒川の上に「荒川橋」が架かっていた。

◎「荒川橋開通記念」の石碑

所在地 中島・中島橋北詰め

石塔型式 自然石 (南西向き・高さは中)

年 号 昭和五年 (一九三〇)

〔正面〕

世元川橋開通通記紀念

〔裏面〕

増林村前村長	今井 晃
増林村助役	山崎 長吉郎
岩瀬前工区長	吉澤 皆三
常設委員	林 浅右エ門
経営者	杉山 末吉
経営者	鈴木 吉五郎
経営者	内野清右衛門
経営者	内野勝太郎
吉川町	石工
鈴木初五郎	

※記念碑の中に四人の経営者の名前が刻まれている。荒川橋の建設資金を出した地元の人たちである。荒川橋の完成後、この橋の北詰め（中島五一六の須賀家の南側）に小屋を作って、四人が交替で小屋に待機し、この橋の渡し賃を徴収した。徴収した渡し賃は片道は二銭、往復は三銭であったという。昭和13年頃まで通行料金を取った。その後は、埼玉県に管理を任せることになった。

《中島の渡し》

かつてあった「中島の渡し」は、現在の杉山商店北側より渡し場に入り、中川を渡っていたのである。（現在は河川改修により大きく変貌）なお、この近くには「中島の渡し」の他に、現在の吉川橋あたりにはかつて「南百の渡し」があったが、明治七年にこの渡しに代わって平沼村（現、吉川市内）の徳江忠次郎が自費で作った木製の橋が架けられた。（徳江橋）

（5） 鈴野木家（中島二一九一）の庚申塔

8. 青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申一五三番）所在地 中島・鈴木家（中島二一九一）の東方の畑の中

中川改修工事により鈴木家敷地（中島三一六六一）は新土手の下になる。鈴木家は中島二一九一に移転、庚申塔は百以北方先の畑の中に移転する。石塔型式 駒型（東向き・高さは中）年 号 安永六年（一七七七）

〔左側面〕

□兵衛
八左右門 平右門
長左右門 治助
繁右門 吉三郎
巳之助 源治長
正兵衛 清右門

35.8896、139.8377

〔正面〕

（日月） 青面金剛像（鬼）（三猿）

〔右側面〕

重治良 惣七
新平 園右門
藤右門 勇蔵
義右門 清治良
八兵衛 新九良

安永六丁酉 五月

（6） 送水管近くの路傍

9. 青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）所在地 中島・永田家（中島三一〇〇）前の路傍石塔型式 駒型（南々西向き・高さは中）年 号 宝暦十年（一七六〇）

〔正面〕

宝暦十庚辰天

（日月）（青面金剛像）（鬼）（三猿）

六月吉日

弥市 平助 吉兵衛 長松 友右門 八右門 儀左門 久右門 甚兵衛 七右門 藤助 永蔵 儀右門 由兵衛

※青面金剛が右手で衣の一端を握っているのは大変珍しい。

35.8937、139.8367

10. 馬頭観音文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）所在地 中島・永田家（中島三一〇〇）前の路傍石塔型式 祠型（南々西向き・高さは中）年 号 文化六年（一八〇九）

〔左側面〕

文化六年巳年

〔正面〕

（正面が破損されていて不明）

〔右側面〕

林清左エ門

三月吉日

※『越谷ふるさと散歩（下）』の一八頁に、「文化六年（一八〇九）の水神宮とみられる石祠が建てられている」と記されている。表面が破損されているために主尊が不明であるが、地元では馬頭観音の石塔と伝わっているようだ。最近、これに代わって大きさが同じ浮き彫りの馬頭観音像の石塔が新調され、そばに建てられている。石質がもろいため文字塔と思われる。

※元は現在地より北東に20メートルの地点、カーブミラーがあるあたりにあった。ともに堤外地との境の路傍である。

中島村の地名の由来：古利根川(中川)と元荒川の二つの川が合流した地点から上流を見ると、川の中に島があるように見られ、「中の島」と言われたとの言伝えがある。

〔参考〕「稲荷大明神」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地 現在、中島橋の橋梁そば元荒川左岸の護岸に放置

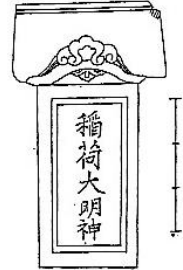
石塔型式 祠型（南西向き・高さは中）

年 号 寛政十年（一七九八）

〔左側面〕

〔正面〕

稲荷大明神



寛政10 (1798)

※発見者は角田久氏。他所に移しての保存が望まれる。

そばに、明治四十四年十二月造立の「馬頭観音」文字塔（駒型）

高さ三八センチ、幅二二センチ、厚さ一三センチ。左側面に「願主

細野金五郎」と刻まれている）も並べられて放置されている。

本来あった場所は越谷市内か市外かも不明。（平成二十六年五月）

《旧花田村の石仏》追加

西円寺の稲荷社七地内の石塔

〔参考〕「氏子中」の石塔
角柱型の高さ38cmの型

〔正面〕

- 栗原 勝右エ門
- 氏セ 黒田豊 蔵
- 子ハ 鈴木平 蔵
- 中人 新戸 吉右エ門
- 同 清左エ門

旧花田村の石仏

(1) 西円寺

1. 猿田彦文字庚申塔（『越谷市金石資料集』猿田彦一五巻）

所在地 花田・西円寺の稲荷社内（もとは西円寺前の路傍にあった）

石塔型式 自然石（南向き・高さは高）

年 号 安政五年（一八五八）

〔正面〕

〔裏面〕

（日月） 猿田彦大神
風雨順時
真斎寿敬書

安政五 戊午年十一月吉祥日

- 栗原要 助
- 新戸長右エ門
- 松沢伊 助
- 鈴木金右エ門
- 松沢岡右エ門
- 中村小右エ門
- 黒田弥次右エ門
- 染谷徳右エ門
- 鈴木清五郎
- 同 勤四郎
- 松沢所左エ門
- 染谷太右エ門
- 同 彦助
- 同 儀右エ門
- 同 意助
- 同 多平
- 松沢政之丞
- 新戸八右エ門
- 同 万右エ門
- 同 吉右エ門
- 同 吉五郎
- 同 松沢定右エ門
- 同 同 弥左エ門
- 同 同 庄右エ門
- 同 栗原民右エ門
- 同 染谷峰右エ門
- 同 同 同
- 願主 栗原弥宗治
- 松伏村 石工茂兵衛重昌
- 黒田権右エ門
- 新戸藤吉
- 同 久右エ門
- 同 作右エ門
- 同 松沢富右エ門
- 同 同 銀蔵
- 同 同 啓次良
- 同 同 平左エ門
- 同 同 利助

2. 「天満大自在天神」文字塔（『越谷市金石資料集』天神八番）

所在地 花田・西円寺の稻荷社内
石塔型式 祠型（西向き・高さは中）
年号 寛政十二年（一八〇〇）

〔左側面〕

寛政十二年 庚戌 申 歳

〔正面〕

天下泰平

天満大自在天神

国土安全

〔台石〕
氏子

講中
三十四人

〔右側面〕

九月 吉祥 日

※もとは、西円寺前の路傍にあった。

「天満大自在天神」とは菅原道真
に対しての「神号」。「大自在天」
（シヴァ神）も「牛に乗る」という
共通点から「大自在天」を選んだと
推測される。（秦野秀明氏）

3. 「大随求陀羅尼」梵字文供養塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地 花田・西円寺
石塔型式 笠付角柱型（南向き・高さは高）
年号 明和元年（一七六四）

〔左側面〕

〔梵字ア〕
（五百四十六個の梵字と十九個の漢字）

〔正面笠部〕

〔台石〕
為法界靈言
謹言也

〔梵字ア〕
（三百三十二個の梵字と四個の漢字）

道性清信士
道善禪定門
宥寛清信士
道祐清信士
浄教清信士
城心清信士
靈

于時明和元年
甲申 十二月日

※笠部の下の首部に「梵字ハラ」（大随求菩薩の種子）が刻まれている。
于時は「時に」と読む。

〔右側笠部〕

（五百四十六個の梵字と十九個の漢字）

〔台石〕
施主俗名新戸
久左右衛門

〔裏側笠部〕

※「大随求陀羅尼」の呪文の梵字文が刻まれた石塔はとても珍しい。古
来より、この長い梵字文を書き写し携帯すれば莫大な利益を受け、
他人がこの長い梵字の呪文を唱えているのを耳にするだけでも様々な
苦難が免れると言われている。

※笠部に刻まれた梵字「ア」「アー」「アン」「アク」はそれぞれ東側、
南側、西側、北側に見られるものである。

※《塔身の左側面》は、縦書きで一行三十八個の文字が十五行にわたって
刻まれている。最後の行が三十三個となっている。ほとんどが梵字
が刻まれているが、梵字の中に、漢字の「法界萬靈」「一切如来心印
真言」「一切如来心真言」の計十九字が混じっている。

《塔身の正面》は、縦書きで一行二十四個の文字が十四行にわたって
刻まれている。梵字の中に漢字の「法界萬靈」の四字が二箇所混じっ
ている。

《塔身右側面》は、縦書きで一行三十八個の文字が十四行にわたって
刻まれている。梵字の中に漢字の「法界萬靈」の四字が混じっている。
《塔身の裏面》は、縦書きで一行三十八個の梵字が十五行にわたって
刻まれている。

4. 十九夜念仏塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地 花田・西円寺
石塔型式 駒型（南向き・高さは中）
年号 文政元年（一八一八）

〔正面〕

文政元年九月吉日
（一仏）十九夜念仏供養
女人講中

※この十九夜月待塔（念仏塔）の主尊は、不詳の一仏の座像となってい
るが、一般的には、如意輪観音像が刻まれる。

5. 十九夜念仏塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地 花田・西円寺
石塔型式 舟型（南向き・高さは中）
年号 宝永七年（一七一〇）

〔正面〕

拾九夜念仏

供養
講中

(如意輪観音像)

二世安
樂伎

室永七 庚 八月吉日

眞言

※眞言(きょうげん)とは、謹言という意味。

6・十九夜念仏塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 花田・西円寺

石塔型式 上部隅丸角型(南向き・高さは中)
年号 明和五年(一七六八)

〔正面〕

(如意輪観音像)

※剥落有る為に判別不能

明和五戊子 正月吉日

7・阿弥陀像付き念仏塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 花田・西円寺

石塔型式 舟型(南向き・高さは高)
年号 寛文六年(一六六六)

〔正面〕

奉造立阿弥陀如来念仏講中人数四十人二世安楽処

(梵字サ)

(阿 弥 陀 如 来 立 像)

(梵字キリーク)

寛文六年 丙 十一月拾五日

花田邑

結衆中 敬白

8・文字庚申塔(『越谷市金石資料集』庚申三〇五番)

所在地 花田・西円寺

石塔型式 頭部山状角型(西向き・高さは高)
年号 文久三年(一八六三)

〔左側面〕

文久三癸亥年
三月中浣日建

〔正面〕

(日月) 庚申塔 (三猿)

女講中

〔台石〕

〔右側面〕

黒田長蔵

世栗原□門

松沢源太郎

話同 □吉

新戸卯之助

人同 定次郎

染谷藤次郎

※「中浣」(ちゅうかん)とは中旬という意味

9・十九夜念仏塔(『越谷市金石資料集』月待九番)

所在地 花田・西円寺

石塔型式 駒型(西向き・高さは中)
年号 万延二年(一八六一)

〔正面〕

萬延二 辛 酉年

(如意輪観音像) 十九夜念仏供養

二月 吉辰

□ん	とよ	りよ	つね	あさ	なつ	はつ	れん	きの	なか	□き	し□	りよ	なつ	□と	め□	□き	そ□	ほの	□□	やす	ゆき	□か	たね	りせ	そ□	□き	ませ
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

10. 文字庚申塔 (『越谷市金石資料集』庚申二三九番)

所在地 花田・西円寺
石塔型式 頭部山状角型 (西向き・高さは中)

年号 文政七年 (一八二四)

〔左側面〕

文政七 甲 申年

〔正面〕

(日月) 庚 申 塔

〔右側面〕

十月吉祥日

11. 文字庚申塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 花田・西円寺

石塔型式 駒型 (東向き・高さは中)

年号 寛政十二年 (一八〇〇)

〔正面〕

寛政十二庚申年 女人講中

青 一面 金 剛

九月吉祥日 拾七人

※女性のみで造立した

庚申塔である。

12. 文字庚申塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 花田・西円寺

石塔型式 駒型 (東向き・高さは中)

年号 天保十四年 (一八四三)

〔正面〕

天下泰平

(日月) 庚 申 塔

五穀成就

〔右側面〕

天保十四卯三月

13. 道標付き文字庚申塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 花田・西円寺

石塔型式 隅丸角型 (東向き・高さは中)

年号 寛延三年 (一七五〇)

〔正面〕

右江戸道 寛延三庚 午 七月吉日

(地藏菩薩像) 庚申供養

左庄内道 講中二十人 花田村

14. 文字庚申塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 花田・西円寺

石塔型式 角型 (東向き・高さは中)

年号 安永七年 (一七七八)

〔正面〕

安永七 戊 戌天

越谷領華田邑

庚申供養塔

講中廿一人

二月吉祥日

※以上の11、12、13、14の石仏石塔が並んでいる前の南北の道は、北に向かうと花田古川に突き当たった古くからの道の名残である。

(2) 山本家 (花田四二二) 改路傍

15. 淡島明神文字塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 花田・山本家 (花田四二二) 北側路傍

石塔型式 上部隅丸角型 (北向き・高さは低)

年号 寛政五年 (一七九三)

〔左側面〕

新戸氏 遠祖近祖

〔正面〕

栗嶋大明神梅社

〔右側面〕

寛政五 癸 丑 正月初子

当主保教

※「初子」は「はつね」と読む。

※この粟島明神の石塔は、かつては「下(しも)の病」(婦人病)に効く神様として周辺地域から盛んに参詣にきていたという。江戸時代に盛んであった淡島信仰の名残であろう。この石塔は、もとは山本隆氏(花田四一二一一)の祖父の生家であった新戸家(花田三一八一三)にあったものである。

淡島(粟島)明神は和歌山市加太(かた)にある淡島神社(加太神社)の神様である。婦人病に靈験のある神として広く知られた。江戸時代、淡島明神のお札を入れた神棚の箱を背負って、その縁起や功德を唱えながら門付けをして諸国を歩いていた淡島願人(がんにん)と呼ばれる行者によって淡島信仰が広く伝えられた。地域によっては女性たちの「淡島講」もみられたという。

(33) 仕佐藤家(花田四一二〇一三) 敗路傍

16. 青面金剛像庚申塔 (『越谷市金石資料集』庚申一五七番)
所在地 花田・佐藤家(花田四一二〇一三) 南側路傍
石塔型式 駒型(南西向き・高さは中)
年号 安永三年(一七七四)
[左側面]

安永三年 十二月吉

[正面]
[日月] 青面金剛像 (二鶏)(鬼)(三猿)
[右側面]

講中十八人

※は「花田邑」カ

※16から後にあげる19までの石仏は、もとは花田古川(かつての元荒川)の自然堤防上の古川に沿った野道に一列に古川を背にして南西向きに並んでいた。その並び方は、向かって右から16、17、18、19と現在と同様である。
現在、古川や野道は区画整理事業の開發によって消滅している。

35.9058、139.8048

17. 「花田の地蔵」石仏 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)
所在地 花田・佐藤家(花田四一二〇一三) 南側路傍
石塔型式 丸彫り型(南西向き・高さは高)
年号 承応四年(一六五五)
[左側面]

[台石左側面]
武州葛西領
東葛西之庄
上ノ割下小合
村
正徳寺
施主敬白
[台石正面]
[裏面] 地蔵菩薩立像 (為源海菩提也)

為源海三十三年菩提也
承応四年
正月廿六日

※下小合(しもこあい)村は、小合溜(こあいだめ)そばの現在の東水元二丁目付近にあった。
※承応年間には既に葛西領を東西に分けて、東葛西領・西葛西領、さらに東葛西領を上之割・下之割と分けていたことがわかる。

※もとは古川(かつての元荒川筋)の自然堤防上の野道にあった。
※この石仏に刻まれている銘文によると、源海という人物(僧侶であろう)の三十三回忌の菩提を弔うために、江戸時代の初め頃に造立したものである。面長の地蔵菩薩像である。

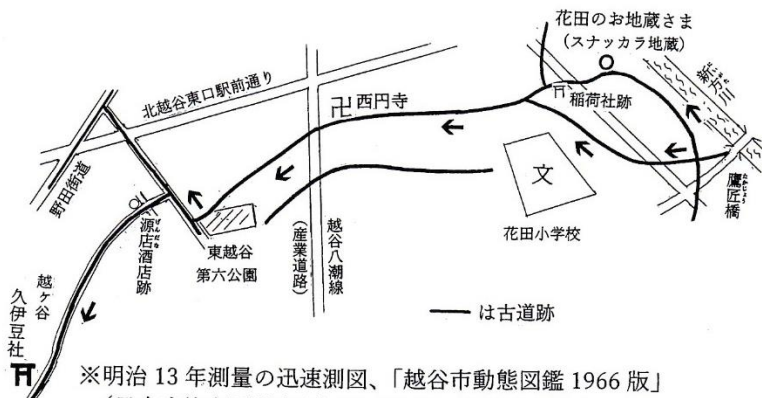
※「スナツカラ地蔵」の由来
地元やその周辺では、一般に「花田のお地蔵様」と呼んで親しまれていた。しかし地元では一部で「スナツカラのお地蔵様」と呼ぶこともあったという。花田の区画整理事業が行われ始めた昭和五十一年頃より「花田のお地蔵様」は「スナツカラ地蔵」として紹介されるようになる。地元で置かれた「解説板」では「スナツカラ地蔵」となっている。離れた周辺では「スマツカラ」として伝わっている。
「スナツカラ」とは地元の耕地名からきている。「花田のお地蔵様」

がスナツカラの地にあつたから「スナツカラ地蔵」と呼ばれるようになったのである。「スナツカラ」は、「花田のお地蔵様」あたりから鷹匠橋（たかじょうばし）までの間の古川（昔の元荒川筋）の河原跡にみられる耕地をさす。その耕地名が「砂河原」という意味である。「スナツカラ」は、その「すなかわら」がなまったものと思われる。なお、対岸の増林村の人々は、「花田の地蔵」のことを「見晴らし地蔵」とも呼んでいた。それは、この「花田の地蔵」が他所よりも最も高い所（昔の元荒川の自然堤防上）に立って目立っていて、周囲を見晴らしているように思えるからである。

※花田村の村道と久伊豆神社、西門寺の薬師堂、花田の地蔵の参拝。

越ヶ谷の久伊豆神社から「せんげん堀」（新方川）に架かる鷹匠橋に通じる村道があつた。花田に嫁いできた嫁は、赤ちゃんが生まれた時（男の子は二十一日目、女の子は三十三日目）は、この村道を利用して最初は久伊豆神社にお宮参りをし、その次は西門寺の境内の薬師堂、そして最後に花田のお地蔵様に立ち寄りお参りをしたのである。花田の人々は、花田のお地蔵様は昔から子供を守ってくれる仏様として、今でも花や線香をお供えている。

花田地区は、現在ではすっかり変貌してしまつてこの村道の名残がほとんどない。



※明治13年測量の迅速測図、「越谷市動態図鑑1966版」
（日本広飾企画研究所）及び地元の聞き取り調査による

※花田のお地蔵様（スナツカラ地蔵）伝説

昔、元荒川が花田の方に花田を囲むように迂回して流れていたところの話である。ある日のこと、この曲流した花田の元荒川を石のお地蔵様を運んで上流へと上る舟があつた。花田のあたりにさしかかると、急に舟が動かなくなる。そこで人々は運ばれていたこの地蔵様がこの地に安住したいのだと思い、舟から降りし、堤の上へ上げてお祀りしたという。

この種の話については、小島初治氏が、以前、先輩から聞いた詳細な言い伝えがある。それについてはコラムで後述する。

一方、地蔵の首の骨が折れて舟が動かなくなったとか、お地蔵様がここに流れ着いたという話も一部残っている。地蔵の首が折れたからとの話は、地蔵を初めてこの地に安置する時から首が既に折れていたとは考えにくいので、本来の言い伝えではないであろう。

なお、元荒川が天岳寺前から小林村（現在の東越谷）まで直道に改修されたのは江戸時代の初めの寛永年間の頃と推定され、「花田のお地蔵様」の造立はその後の承応年間である。元荒川がまっすぐな流れに改修されてからも、元荒川の水の一部が、昔の元荒川筋の古川を流れて花田を迂回して流れていたであろう。

天岳寺の裏からマルエツ花田店の裏を通り、新方川（せんげん堀）まで排水として流れる古川を「裏古川」といい、増林一―一五―の「新方川」あたりから、東越谷小学校の校舎のあたりを通り、元荒川につながる古川筋（流れの向きは、排水路として新方川に流れ注いでいた）を「前（まえ）古川」と呼んでいた。

◎花田三―二―三の新戸家の庭先に自然石の表面に「大六天」と刻まれた西北西の向きの高さ六十六センチの文字塔がある。裏には「大正十年三月 新戸氏」と刻まれている。この石塔のすぐ裏に神木とされた大木がかつてあり、その周辺は木が生い茂っていた。

18・青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申六一番）
所在地 花田・佐藤家（花田四一〇一―一三）南側路傍
石塔型式 駒型（南西向き・高さは高）
年 号 正徳五年（一七一五）

〔正面〕

奉剋彫青面金剛聖容庚申講人数二世安樂攸

（日月）（青面金剛像）（鬼）（三猿）（鷲）

正徳五乙未年二月十一日 施主十三人

〔裏面〕

（梵字ウーン）

※もとは古川（かつての元荒川の跡）の自然堤防上の野道にスナツカラ地蔵とともにあった。

※庚申塔の鶏は、雌雄一対であらわされるのであるが、この庚申塔は一鶏のみである。

19・「馬頭観音」文字塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地 花田・佐藤家（花田四一〇一―一三）南側路傍
石塔型式 駒型（南西向き・高さは中）
年 号 文化三年（一八〇六）

〔正面〕

吉右エ門 講
利右エ門
周右エ門
長左エ門
太左エ門
庄左エ門
庄吉

馬頭観世音菩薩

春正月吉日

中 儀右エ門
惣左エ門
乙右エ門
五右エ門

※16から19の石仏は、もとは古川（かつての元荒川の跡）の自然堤防上の古川に沿った野道に一列に南西向きに並んでいた。その並び順は、向かって右から16、17、18、19と現在と同様であった。
現在、古川や野道は区画整理事業の開発によって消滅している。

旧小林村の石仏

（1）東小林香取神社

1・道標付き文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申二三三番）
所在地 小林・東小林香取神社
石塔型式 駒型（東向き・高さは高）
年 号 文化十一年（二八一四）

〔左側面〕

文化十一年戊十一月吉日 根郷

吉川道

〔正面〕

（日月）庚申（三猿）

〔右側面〕

越ヶ谷道
岩つき

◎そばに高さ八十センチの自然石の

「敷石供養塔」がある。

奉納 敷石
東京洲崎 島根耕之助

大正十二年七月

（2）東福寺

本堂の西側隣りに鎌倉時代末期の元徳三年（一三三二）や正慶元年（北朝年号、一三三三）、元弘三年（南朝年号、一三三三）などの板碑が九基安置している。関東では南朝方の年号は珍しい。

この地は下総国新方庄小林といい、元荒川が現在と違って古くは花田を迂回して北東に流れてから南西に流れて戻ってくる左岸に位置し、砂丘がよく発達していた。かつての利根川筋の河畔砂丘である。東福寺はその砂丘上にあつて、市内で最も高い所（標高9.5メートル）である。東福寺はかつて境内地やその周辺には松の太木が生い茂り、「東福寺の秋月」として越谷八景の一つに数えられていた名所地であつた。東福寺周辺は区画整理で開発され今は大きく変貌したが、このあたりの松の木の名残として、市役所前中央通りの東越谷三丁目交差点の北西側に今でも一本残っている。
また、周囲には松林の他に桃林も見られ、かつては「東福寺の桃」として千住市場に出荷されていたという（東福寺の佐々木純一住職）。

小林村の鎮守である。
このあたりの字（あざ）は根郷（ねごう）と呼ばれ、かつては小林村の発祥地であつたのであろう。

35.8949、139.7943

35.8930、139.7945

2. 地藏像付き三界萬靈塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 小林・東福寺 (山門手前参道西側沿い)

石塔型式 丸彫り型 (東向き・高さは高)

年号 宝暦五年 (一七五五)

〔左側面〕

天下泰平 国土安穩

日本回国現當

奉供養大乘妙典六十六部

二世安樂祈所

五穀成就万民豊樂

〔台石〕

願主 達道

〔正面〕

(丸彫地藏立像) 三界萬靈

圓心法師 菩提也

蓮通信女

俗名

鳴根利右衛門

〔裏面〕

于時

宝暦五 亥歳

十一月吉祥日

武州埼玉郡

新方領小林村

3. 地藏像付き六十六部供養塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 小林・東福寺 (山門手前参道西側墓地)

石塔型式 丸彫り型 (東向き・高さは高)

年号 正徳三年 (一七三三)

〔左側面〕

為眞運清信女證大菩提也

〔台石〕

〔正面〕

(丸彫地藏立像) 乃□□□□

〔右側面〕

為淨徹清信士填證菩提也

〔裏面〕

武州埼玉郡新方領小林村

天下泰平 国土安全 願主

奉納大乘妙典六十六部現當所願成就所

武運長久 万民豊樂 久眞

正徳三 十月吉日

癸巳

※〔裏面〕この台石は前後が逆に設置され、正しくはこの〔裏面〕が〔正面〕となる。

4. 地藏像付き念仏塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 小林・東福寺 (山門手前参道西側沿い)

石塔型式 舟型 (東向き・高さは高)

年号 寛文二年 (一六六二)

〔正面〕

奉造立地藏菩薩 念佛講人口二世安樂処願主妙蓮社尼

(梵字「カ」) (地蔵菩薩立像)

于時寛文二天九月吉祥日 敬白

5. 石灯籠供養塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 小林・東福寺の西側墓地参道そば

石塔型式 笠付角型 (東向き・高さは高)

年号 元禄二年 (一六八九)

〔正面〕

元禄二年 巳 天白

奉造立石燈籠為除暗通明也

〔右側面〕

造主

須賀市郎兵衛

6. 地藏像付き三界萬靈塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地 小林・東福寺参道 ※万靈塔の前の左右一対の石灯笼

石塔型式 丸彫型（西向き・高さは超高）
年号 享保十二年（一七二七）
「向かつて右側の灯笼正面」

「左側面」 「台石」
元文元年 九月吉祥日
称誉浄念大徳

「正面」
（丸彫り地藏菩薩立像）
（梵字ア）
伯蓮社称誉浄念大徳

「右側面」
三界萬靈
「向かつて左側の灯笼正面」
伯蓮社称誉浄念大徳

「裏面」
享保十二丁未年 九月吉日
元文元年 丙 九月吉祥日
辰

7. 法華經・普門品供養塔（『越谷市金石資料集』普門品一八）

所在地 小林・東福寺参道
石塔型式 宝篋印塔（西向き・高さは超高）
年号 文化十二年（一八一五）

「左側面」
鈴木圭吉
黒田伝吉
会田祥寿
島根金兵衛

助願
法子徳善
法子染瑞
法子長心
法子染山
法子即成

法印長深 法印快隆
法印瑜範 法印如海
法印観慧 法印快定
皆文化十二乙亥 載二月

発願現住
法印栄倫

心光利現信女
智了童女
積栄輪信士
妙寿法尼
有金童女
芳顔清信女
幽念妙專信女
光善童子
香蓮童子
氏本

当村他村経筒
戒名記入□
為先祖代々一切
精霊也
先祖一切聖霊小島吉右衛門
先祖一切聖霊小島藤□
田村屋新助
江原富由
法子賢造
道蓮信士
妙蓮信女
伊之助

阿鼻地獄若於此塔
或一礼拝或一右繞
塞地獄門開善提路
塔及形像所在之処
一切如来神力所護

「右側面」

若有有情能於此塔
一華一香礼拝供養
八十億劫生死重罪
一時消滅生免災殃
死生仏家若有庇墮

「裏面」

普門品講中

- 江原新内
- 須賀与兵衛
- 須賀安兵衛
- 会田右源次
- 須賀倉之助
- 会田源右衛門
- 会田金石衛門
- 島根与市
- 鈴木半右衛門
- 吉元弥兵衛
- 江原幸助
- 島根三良兵衛
- 会田弥助
- 井上弥五郎
- 山口茂助
- 堀江長右衛門
- 島根五兵衛
- 山口惣七
- 会田林蔵
- 須賀太左衛門
- 山口善左衛門
- 寄進
- 会田九右衛門
- 塩屋吉兵衛
- 池田屋太兵衛
- 江原新蔵
- 同妻初
- 会田藤七
- 会田孫七
- 島根宇平次
- 増田平左衛門
- 会田才兵衛
- 諏訪山清次郎
- 江原弥三郎
- 須賀源七
- 会田清兵衛
- 島根吉平
- 会田善蔵
- 四組念仏講中
- 遊間佐伝□

大沢町
石工 八五郎

法華經千部
普門品萬巻
供養塔

※この宝篋印塔の右側面から裏面にかけて刻まれた文は、宝篋印陀羅尼經から引用したものである。参考までに意味は次の通り。

若し有情ありて、よく此の塔に於いて、一香一華をもって礼拝供養すれば、八十億劫生死の重罪は一時に消滅す。生まれては災殃を免れ、死しては仏家に生ず。若し心(まさ)に阿鼻地獄に墮すべきこと有るも、若し此の塔に於いて、或いは一たび礼拝し、或いは一たび右に繞(めぐ)れば、地獄の門は塞ぎ、菩提の路(みち)は開く。そして、続けて、

塔及び形像の所在する処には、一切如来の神力が所護すと刻まれている。

8. 十九夜念仏塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 小林・東福寺の東側墓地(山門東側隣りの住職墓所)

石塔型式 舟型(北向き・高さは中)

年号 享保七年(一七二二)

〔正面〕

施主五拾人

十九日女念仏講中

奉造立 (如意輪観音像)

享保七 壬

寅

十月十九日

9. 観音像付き念仏塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 小林・東福寺の東側墓地(山門東側隣りの住職墓所)

石塔型式 舟型(北向き・高さは中)

年号 延宝元年(一六七三)

〔正面〕

半兵へ 市右エ門 □左エ門 □兵へ
祢(弥)五兵へ 久兵へ 権右エ門
五郎左エ門 五兵へ 市兵へ 仁兵へ

〔台石〕

念仏講中

(観音菩薩像)

延宝元年 十月吉日

新方之内
小林村

権左エ門 勘右エ門 □右エ門 又左エ門
庄三郎 清兵へ □右エ門 甚五兵へ
祢五左エ門 吉兵へ 伝兵へ □

10 青面金剛像庚申塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 小林・東福寺の東側墓地(薬師堂の東)

石塔型式 変形駒型(東向き・高さは高)

年号 享保五年(一七二〇)

〔正面〕

奉供養庚申講人数八十五人現当二世諸願成就所

(日月) (青) 面 金 剛 像 (鬼) (三猿)

享保五 庚 子 八月吉日 武州新方領小林村人数敬白

※元は、地元の開発で失った観音堂(増田卓司家管理)墓地にあった庚申塔。

11. 地藏像付き念仏塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 小林・東福寺(東側墓地の北東の突き当り)

石塔型式 舟型(南向き・高さは中)

年号 不詳

〔正面〕

右建立之志者為男念仏講中二安永也

(梵字カ) 施主 都合五十一人

(地藏菩薩立像) 施主 都合十九人

右建立之志者為地藏講中世大願成就也

※この地藏は両手に藥壺のような形に描いてしまった宝珠を持つ。

※「二安永」||「二世安永」 二世とは現世と来世

※「世」||「二世」の「二」が抜けたのか。

12・地藏像付き供養塔『越谷市金石資料集』に掲載なし
所在地 小林・東福寺（東側墓地の北東の突き当り）
石塔型式 舟型（北向き・高さは中）
年号 享保三年（一七一八）
〔正面〕

右建立之意趣者為意□□□信女菩提也
〔梵字力〕

（数珠を持つ地蔵菩薩立像）
享保三 戊九月廿四日施主須賀兵庫

13・地藏像付き供養塔『越谷市金石資料集』に掲載なし
所在地 小林・東福寺（東側墓地の北東の突き当り）
石塔型式 舟型（北向き・高さは中）
年号 不詳
〔正面〕

右建立之志者為地先祖代之性靈菩提也
施主須賀本衛門
〔梵字「カ」〕

（合掌する地蔵菩薩立像）
施主清水新衛門
右造立之意趣者為二親之性靈菩提也

14・地藏像付き供養塔『越谷市金石資料集』に掲載なし
所在地 小林・東福寺（東側墓地の北東の突き当り）
石塔型式 舟型（北向き・高さは中）
年号 享保三年（一七一八）
〔正面〕

右志者為歌心童女秋孝童子春智童女
紅玄童子菩提也
〔梵字「カ」〕
（幡を持つ地蔵菩薩立像）
施主嶋根八左衛門

享保三 戊九月□四日 ※□□廿？

15・地藏像付き念仏塔『越谷市金石資料集』に掲載なし
所在地 小林・東福寺（東側墓地の北東の突き当り）
石塔型式 舟型（北向き・高さは中）
年号 享保三年（一七一八）
〔正面〕

右建立之意趣者為□中女人念仏講二世大願成就也
〔梵字「カ」〕

（宝珠と錫杖を持つ地蔵菩薩立像）
施主
享保三 戊九月廿四日 村仲□□□之女人

16・地藏像付き墓塔『越谷市金石資料集』に掲載なし
所在地 小林・東福寺（東側墓地の北東隅・増田家墓所）
石塔型式 舟型（北向き・高さは中）
年号 享保三年（一七一八）
〔正面〕

右造立之志者為霖故鏡覚清信女菩提也
〔梵字力〕
（幡を持つ地蔵菩薩立像）
山□□□

享保三 戊 九月廿四日 戊

17・大日如来像付き光明真言塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地 小林・東福寺の東側墓地（北東の角の増田家墓所）
石塔型式 舟型（北向き・高さは中）
年号 宝永八年（一七一二）
〔正面〕

光明真言一百万遍二世大願成就
奉造立供養大日如来
〔梵字アーンク〕（胎蔵界大日如来像）
宝永八 辛 卯 歳二月八日

光明真言結衆中敬白

18・大日如来像付き光明真言塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地 小林・東福寺の東側墓地（北東の角の増田家墓所）
石塔型式 舟型（北向き・高さは中）
年号 正徳三年（一七二二）

〔正面〕
奉造立供養大日如来光明真言一百万遍□二世大願□（成就）
（梵字アーンク）（金剛界大日如来像）

正徳三癸巳 歳六月吉日 光明真言結衆中敬白

19・十九夜念仏塔カ（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地 小林・東福寺の東側墓地（北東の角の増田家墓所）
石塔型式 舟型（北向き・高さは中）
年号 天明四年（一七八四）

〔正面〕
念仏講中
（如意輪観音像）
天明四辰二月吉日

20・地藏像付き供養塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地 小林・東福寺（東側墓地の北東隅・増田家墓所）
石塔型式 舟型（北向き・高さは中）
年号 不詳

〔正面〕
右建立之志者為善秋信菴貞信女善尊信土菩提也
施主増林村鈴木次郎兵衛
（梵字「カ」）（宝珠と錫杖を持つ地藏菩薩立像）

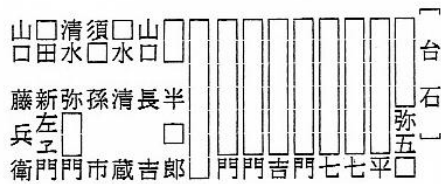
右造立之意趣者為淨慶信士夢幻童子證菩提也
施主須賀太兵衛
同名兵四郎

※増田家については最後の頁の「今はなき東福寺の鬼門にあつた観音堂と落ち武者伝説」を参照のこと。

（33）△云田家（東越谷二二二）改路傍
21・道標付き「庚申様」石仏（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地 小林・会田家（東越谷二二二）西T字路の角
石塔型式 不詳（西向き・高さは中）
年号 不詳

〔左側面〕
（不詳）

〔正面〕



〔右側面〕
（不詳）

※会田家はこの周辺では昔から唯一の民家であった。そして会田家前の元荒川そば路傍には昔から道しるべを兼ねた石仏があった。しかし、心ない人によって破壊され、残念ながら、その石仏の表面や両側面がかなりはがれた状態となってしまった。
江戸時代は、今の中土手（なかどて）のように元荒川の瓦曾根よりの中央には松土手があり、そこから瓦曾根や小林（現、東越谷）の両岸に続く道があった。小林につながる道を進むと対岸の小林の土手道と会田家に突き当たった。その土手道にこの道しるべが刻まれた石仏があったのである。地元の人たちはこの石仏を「こうしん様」と呼んできた。多分、庚申塔のことであろう。会田禮（大正八年生まれ）氏によると、その道しるべには、江戸何里、野田何里とか刻まれていたと言う。残念ながら今となってはこれ以上のこととはわからない。むろん造立年月日や石塔型式もわからない。今はこのT字路角地に移転されて、平成九年九月に会田禮氏によって新たに造立された三猿像石仏（三猿の像が刻まれている）と一緒にひっそりと祭られている。

35.8900、139.7936

(4) 山田家 (東越谷一丁目) 吹路傍
22・青面金剛像庚申塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 小林・山田家 (東越谷一丁目) 路傍
石塔型式 駒型 (南東向き・高さは中)

年号 天明四年 (一七八四)

〔左側面〕

35.8925、139.7957

〔正面〕

須賀安兵衛
会田乙治郎
清水治郎左衛門
江原与四郎
山口惣左衛門
江原幸衛門
嶋根久兵衛

会田□七 (孫七)

〔日月〕 (青面金剛像) (二鶏) (鬼) (三猿)

鈴木半衛門
山口長兵衛
嶋根吉平
清水佐兵衛
堀江長衛門
山口佐五兵衛
山口庄兵衛
山口治兵衛
嶋根与市
須賀善衛門
井上市衛門
浜野平八

〔右側面〕

須賀吉重郎
嶋根亦七
会田文衛門
嶋根吉左衛門
是放
須賀与兵衛
須賀源兵衛
須賀清左衛門

天明四 甲 十一月吉日
辰

(5) 会田家 (東越谷三丁目) 邸内

23・文字庚申塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)
所在地 小林・会田家 (東越谷三丁目) 邸内
石塔型式 頭部山状角型 (南向き・高さは中)

35.8964、139.7983

〔左側面〕

嘉永二酉年四月吉日

〔正面〕

〔日月〕 庚申塔 (三猿)

〔右側面〕

水神宮

※石の劣化が進み、表面の文字が剥がれ落ちて
いる。

(6) 清水家 (東越谷三丁目) 邸内

24・馬頭観音文字塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 小林・清水家 (東越谷三丁目) 邸内
石塔型式 駒型 (東向き・高さは中)

年号 寛政十一年 (一七九九)

〔左側面〕

願主

小林村

〔正面〕

寛政十一年 己未

馬頭観音世立音

二月吉日

35.8924、139.7986

◎清水家の邸内にはさらに、

「辨財天」と刻まれた高さ五十八センチの自然石の弁財天文字塔と

「木花開耶姫神」と刻まれた高さ四十四センチの駒型の木花開耶姫

文字塔がある。年代はともに不詳である。

この清水家南側路傍に荒神(こうじん)文字塔がある。次の通りである。

25・荒神文字塔 (『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 小林・清水家 (東越谷三丁目) 南側路傍

石塔型式 角型 (もとは頭部山状角型方、南向き・高さは中)

年号 明治二十一年 (一八八八)

〔左側面〕

明治二十一年二月十一日

〔正面〕

世祀 神

〔右側面〕

嶋根長七 須賀安兵衛
山口長吉 清水
山口庄兵衛 嶋根
鈴木□□ 嶋根
会田□□ 鈴木傳三郎 井上市太郎

※現在、「荒神塔」は
西方の日枝神社の裏に
移されている。

※右側面に「人」という文字が刻まれているのがわかるが、これは「セハ人」(世話人)と刻まれていた一部と思われる。

※かつては荒神講が毎年二月十一日に地元の十一軒で持ち回りで行われていた。宮元(講元)は東越谷一丁目(の香取社そば)の須賀家である。しかし、この荒神講は平成九年(一九九七)頃に廃止された。

※荒神文字塔の前の道は古道である。

(7) 鈴木家(東越谷二丁目)邸内

26・「馬頭観音」文字塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 小林・鈴木家(東越谷二丁目)邸内

石塔型式 駒型(東向き・高さは中)

年号 文化七年(一八一〇)

〔左側面〕

文化七年歳

施主

六月吉日 半右衛門

〔正面〕

(梵字サ) 馬頭観世立目

〔右側面〕

(移カ)

四国八十八箇所□

東福寺

〔六十八番〕廿七番

〔六十八番〕

※「半右衛門」とは、鈴木家の先祖である。

「武蔵国新四国八十八箇所」二十七番の東福寺

※東福寺は、武蔵国の新四国八十八箇所の一つで、二十七番にあたる。武蔵国八十八箇所の札所巡りは、江戸時代後期(下町タイムス社の「江戸・東京札所事典」によると、文化二年)に創始され、廃れた後の明治十六年に再興され、一番の西新井大師(足立区西新井)から始まり、南足立郡、北足立郡、南埼玉軍の三郡に及び、三郡をめぐる「送り大師」として再び盛んになった。

(8) 島根家(東越谷二二〇)

27・越谷八景の「水神」文字塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 小林・島根家(東越谷二二〇)邸内

石塔型式 駒型(東向き・高さは低)

年号 大正五年(一九一六)

〔左側面〕

大正五年二月七日佛男

〔正面〕

妙法水神

大正五年十二月二十七日

小水神

島根 忠一

〔右側面〕

昭和六年九月廿日

嶋根新之助

※この石塔が祭られていた水神社は、元は瓦菅根溜井の小林村側の中洲の島にあった。越ヶ谷町の漢詩人である山本梅塘(はいとう)によって明治初期に唱えられた「越ヶ谷八景」のうちの「水神の落雁(らくがん)」の水神社を指した。その水神社のそばにあった「妙法水神」と刻まれた石塔が、現在は島根婦久(東越谷二二〇)宅に祭られているのである。

水神社は昭和二年(一九四七)のカスリーン台風にも流されず残ったと言う。しかし、昭和三八年(一九六三)頃からの瓦菅根溜井の用排水分離の大工事がきっかけで取り壊される運命となり、水神社とそばにあったこの石塔は水神社とともにこの水神社を守っていた島根家邸内に移されたのである。水神社の祠の中には水神様の神体はなかったという。石塔は、現在も島根家に祭られ、保管されている。

35.8915、139.7993

35.8926、139.8010

(9) 浜野家 (東越谷八・24・16) 略路傍

浜野家は屋号を「追分(おいわけ)」と呼ばれた。それは、東北東よりきた道が浜野家の南東隣で西に向かう道と南西に向かう道の二つに分かれて二股の道路(追分)となっていたからである。そこには寛政九年(一七九七)に造立された道標石塔(『越谷市金石資料集』道標六番)があった。この石塔には、右は岩槻や慈恩寺、左は江戸道という意味の道しるべが刻まれていた。しかし道路工事によって西に向かう道路(岩槻方面)が廃止され、そればかりか道標石塔が行方不明となってしまうのである。とても残念なことである。(下図参照)

なお『越谷市金石資料集』道標六番に記載された記録によると、年号は「寛政九・二・吉」、所在地は「東小林八六二一」、主銘及び脇銘は「右いわつき 志をんじ 左江戸道」、石塔型式は「駒型」、大きさは「六五×三〇×一五」となっている。

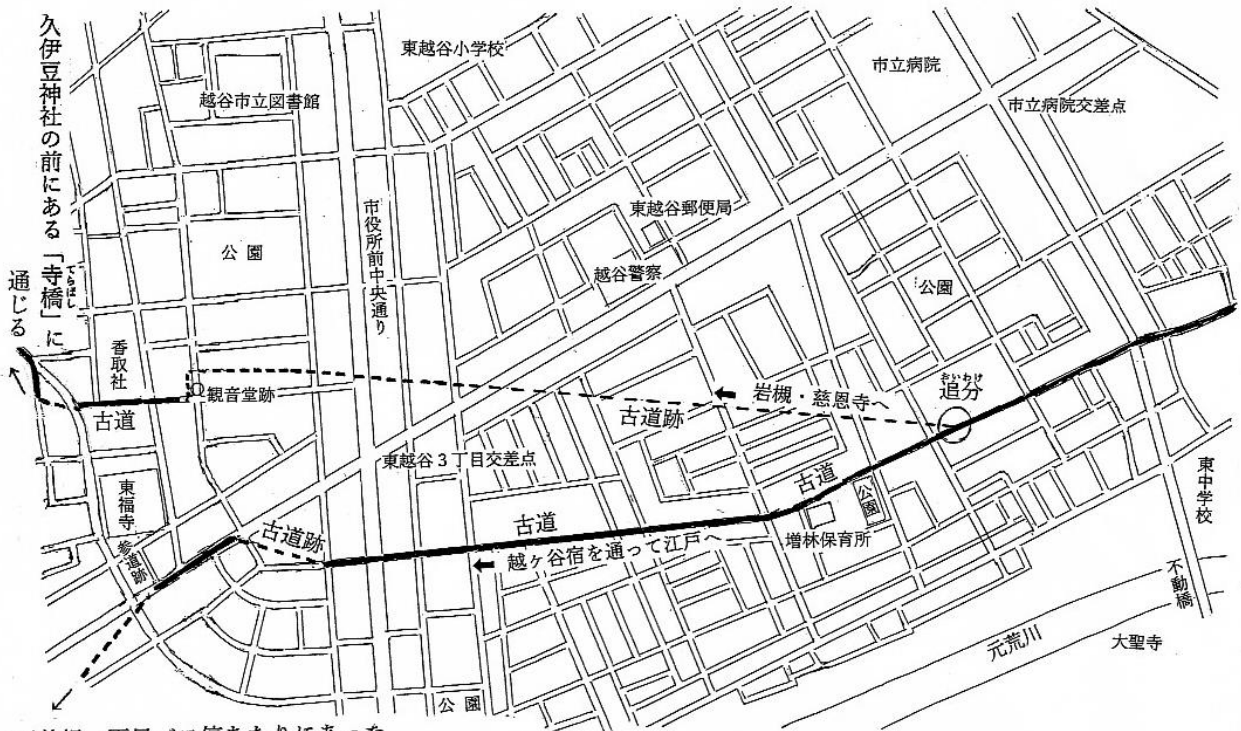
35.8966, 139.8252

東福寺の鬼門にあった観音堂と落ち武者伝説

小林11から20までの石仏は、元は東福寺の鬼門(長、北東)に観音堂墓地にあった。観音堂は増田家が管理するお堂である。現在の東越谷一丁目14、13、東越谷三丁目10、11の交差点の北隣あたりの現在の道路上にあった。開発によって観音堂は廃棄され、その本尊と墓地は東福寺に移転した。増田家については、次のような言い伝えがあった(大正十一年生まれの増田卓司氏)。

増田家の先祖は、関ヶ原の戦いで敗れてこの地にやって来た落ち武者で、東福寺の北東の鬼門にあたる所に観音堂を建て、屋敷はその南西側(現在の交差点の西隣りの道路あたり)あたりに構えたが、農業を行なうために現在地の東越谷八丁目五の四に移り、今日にまで至っている。また、その落ち武者の息子は増森の三丁野に移り、同様に農業を行なったという。

小林村の追分にあった道標石塔と古道



瓦曾根一丁目バス停あたりにあった「瓦曾根橋」(戦後は「平和橋」、後に廃止)に通じる